金沢市文化財紀要277

石川県　金沢市

直江南遺跡・直江ボンノシロ遺跡
直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡

－金沢市副都心北部直江土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－

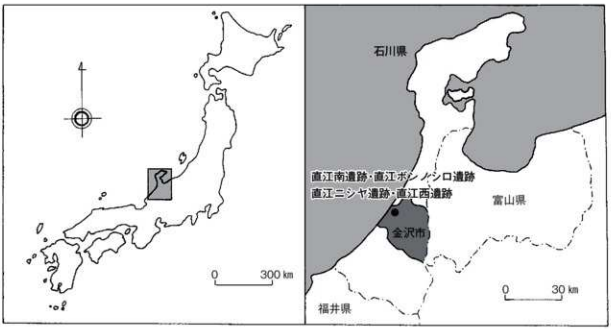
平成２４年３月
（２０１２年）

金　　沢　　市
（金沢市埋蔵文化財センター）

石川県　金沢市

直江南遺跡・直江ボンノシロ遺跡
直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡

－金沢市副都心北部直江土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－



平成２４年３月
（２０１２年）

金　　沢　　市
（金沢市埋蔵文化財センター）

例　言

1．本書『直江南遺跡・直江ボンノシロ遺跡・直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡』は、石川県金沢市直江町地内に所在するそれぞれの遺跡(新発見のため遺跡番号なし)の発掘調査を扱った報告書である。

2．本調査は金沢市副都心北部直江土地区画整理組合による土地区画整理事業に伴い、平成21・22年度に金沢市が発掘調査を実施したものである。

3．現地調査は金沢市埋蔵文化財調査委員会（会長　橋本澄夫氏、谷内尾晋司氏、垣田修児氏、横山方子氏)の指導の下で、平成21年度は前田雪恵(文化財保護課主任主事)、向井裕知(文化財保護課主任主事)が、平成22年度は向井が担当した。

4．本書は前田が第5章、第6章を執筆し、向井がその他の執筆と編集を担当したが、「第7章　直江遺跡群の古環境」については（株）パレオ・ラボに各分析を委託し、報文を得ている。写真撮影は遺物を景山和也（文化財保護課主査）が行い、遺構を各調査担当者、航空写真を日本海航測（株)、樹種同定と塗膜分析の顕微鏡写真を(株)パレオ・ラボが行った。

5．本書の各図及び写真図版の指示は以下のとおりである。
（1）方位は全て座標北である。座標は世界測地系(第Ⅶ系)に基づき設定している。
（2）各図の縮尺は、遺物は1/2・1/3・1/4・1/6・1/8、遺構は1/40・1/60・1/100が主であるが、各図に指示しているとおりである。
（3）遺物実測図の番号は通し番号とし、それぞれの本文中、観察表、写真図版のそれと一致する。
（4）遺構名の略号は、SB＝掘立柱建物、SE＝井戸跡、SK＝土坑跡、SD＝溝・川跡、SX＝落ち込み・土器だまり跡などである。
（5）土器については「壺」・「甕」・「高坏」・「器台」などと表記するが、用途を示すのではなく、形態による分類で、「壺形土器」などの略称である。

6．本調査での出土遺物、記録資料は金沢市埋蔵文化財センターで保管している。

目　　次

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯……1
第２節　発掘調査の経過……1

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境……3
第２節　歴史的環境……3

第３章　直江南遺跡

第１節　概要……5
第２節　検出遺構……5
第３節　出土遺物……6
第４節　小結……8

第４章　直江ボンノシロ遺跡

第１節　概要……33
第２節　検出遺構……33
第３節　出土遺物……35
第４節　小結……37

第５章　直江ニシヤ遺跡

第１節　概要……79
第２節　検出遺構……79
第３節　出土遺物……81
第４節　小結……82

第６章　直江西遺跡

第１節　概要……95
第２節　検出遺構……95
第３節　出土遺物……95
第４節　小結……103

第７章　自然化学分析

第１節　樹種同定……104
第２節　塗膜分析……108

第８章　総括……115

遺構平面図……118
写真図版

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

今回報告する直江南遺跡、直江ボンノシロ遺跡、直江ニシヤ遺跡、直江西遺跡を含む直江遺跡群は、金沢市副都心北部直江土地区画整理事業（以下、直江土地区画整理事業）に伴う埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査で見つかった遺跡である。

遺跡の発見から発掘調査へ至るまでの経緯は以下のとおりである。

平成17年10月21日付け文書にて区画整理課長から同年11月9日開催の直江土地区画整理事業設立に向けた説明会への出席が依頼された。そこでは、大まかなスケジュール案が提示され、平成18年度の秋に埋蔵文化財試掘調査を実施し、範囲の確定と調査経費の積算を行い、本発掘調査は平成19年度からお願いしたいとのことであった。

平成17年12月6日に区画整理組合の設立準備会より埋蔵文化財の調査依頼が提出された。平成18年4月11日には区画整理課より同様の依頼があり、耕作が終了した10月からの着手を希望してきた。平成18年10月12日～同26日に試掘調査を実施した。今回の試掘調査によって、大半の対象地が終了し、直江北遺跡、直江中遺跡、直江西遺跡が確認されたが、一部未実施地区と詳細試掘調査が必要な箇所が残った。翌年の平成19年10月15日～同16日に試掘調査を実施し、直江ボンノシロ遺跡が新たに見つかった。その翌年の平成20年10月14日～同15日の試掘調査で、直江西、直江ニシヤ、直江ボンノシロ、直江南の各遺跡の範囲が確定した。

試掘調査の結果、明らかになった遺跡に関して、街路や仮設水路等の工事によって遺跡が損壊もしくは損壊と同等の状態になる箇所について、平成19年度から順次発掘調査を実施している。

第２節　発掘調査の経過

直江南遺跡、直江ニシヤ遺跡、直江西遺跡は平成21年度に、直江ボンノシロ遺跡は平成21年度および22年度に下記の日程にて発掘調査を実施した。

直江南遺跡は平成21年7月7日から同年12月9日まで、直江ボンノシロ遺跡は平成21年7月13日から同年12月9日および平成22年10月12日から同年11月26日まで、直江ニシヤ遺跡は平成21年7月14日から同年12月9日まで、直江西遺跡は7月21日から同年12月9日までである。

【発掘日誌抄】

平成21年

7月7日　南 表土掘削開始(7/9まで)
7月13日　ボンノシロ 表土掘削開始(7/14まで)
7月14日　ニシヤ 表土掘削開始(7/21まで)
7月21日　西 表土掘削開始(7/22まで)
7月24日　南・ボンノシロ 調査開始
8月21日　南 ほぼ完掘
9月8日　ボンノシロ ほぼ完掘、ニシヤ 調査開始
10月7日　南・ボンノシロ 航空測量実施
10月10日　南・ボンノシロ 現地説明会実施
10月19日　南・ボンノシロ 調査完了、ニシヤ 調査開始
10月21日　ニシヤ ほぼ完掘
10月30日　西 ほぼ完掘
11月13日　ニシヤ・西 航空測量実施
11月16日　ニシヤ・西 調査完了
12月9日　撤収等、現地調査完了
12月17日　西 埋戻し

平成22年

10月12日　ボンノシロ 表土掘削開始(10/15まで)
10月20日　ボンノシロ 調査開始
11月19日　ボンノシロ 航空測量実施
11月26日　ボンノシロ 調査完了

第１図　金沢市副都心北部直江土地区画整理事業施工図と遺跡の範囲、調査位置図〔S=1/7,000〕

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

本書で報告する各遺跡は石川県金沢市直江町地内に所在する。石川県は本州日本海側のほぼ中央に位置している。北方は日本海に面し、南方は福井県、岐阜県、富山県と接する南北に細長い県であり、日本海に突き出た能登地方とその南の加賀地方に分けられる。金沢市は加賀地方の北部に位置している。その西部は日本海に接し、南東部には海抜1,500ｍを越える山地をかかえる。この山地からは市域を西流する二大河川、浅野川と犀川が流れ、北側に位置する前者は河北潟へ、南側の後者は日本海へ注ぐ。市域の西部に展開する平野部では両河川に挟まれた地域に市街地が形成されている。また、犀川を境として、北部平野と南部平野に分かれ、前者は犀川・浅野川やその北部を流れる金腐川・森下川によって形成された沖積平野であり、後者は手取川が形成する扇状地の北辺である。

これらの遺跡は市内の北西部、現在の海岸線からは約３㎞内陸側に位置する。河北潟と大野川の後背湿地のため、土壌は強い粘性をもつ。近年は地下水の汲み上げ等に伴い地下水位が低下したが、古くは豊富な地下水の自噴地帯であった。また、大野川の旧河道や中州、自然堤防が島状に分布し、田舟で往来したというように、舟運が非常に重要な役割を果たしていた。

第２節　歴史的環境

直江町には、直江南遺跡（弥生末期、古墳前期、鎌倉）、直江ボンノシロ遺跡（縄文晩期、弥生末期、古墳前・中期、平安、鎌倉、室町）、直江ニシヤ遺跡（古墳前期、平安、鎌倉、室町）、直江西遺跡（弥生末～古墳中期）、直江中遺跡（縄文晩期、古墳前期、平安、鎌倉、室町）、直江北遺跡（縄文晩期、弥生中～末期、古墳前・中期、平安、鎌倉、室町）が分布する。

これらの遺跡周辺に分布する遺跡を時代毎に概観すると、まず縄文時代には直江中遺跡で晩期の遺跡が確認できる。近岡遺跡では昭和45年の調査で花粉分析から縄文晩期の農耕について話題になった。隣接する戸水Ｃ遺跡からも土器片が少量出土している。弥生時代には戸水Ｂ遺跡、戸水Ｃ遺跡、藤江Ｃ遺跡などで前期からの遺物が確認されており、直江北遺跡においては中期から遺物が確認されている。後・終末期になると遺跡の数は多くなり、建物や墓などが多く見つかっている。古墳時代は弥生終末期の遺跡が継続されることが多いが、中・後期になると激減し、周辺では藤江Ｂ遺跡や畝田・寺中遺跡で確認できる。直江北遺跡では古墳時代前期から中期にかけての集落跡が見つかっており、掘立柱建物や布堀建物、井戸、溝などが見つかっている。奈良・平安時代は再び遺跡が広く分布し、戸水Ｃ遺跡や戸水大西遺跡、畝田遺跡群といった港湾施設や官衙に関係した遺跡が出現する。鎌倉・室町時代は、本報告の遺跡も含めて周辺には当該期の遺跡が広く分布している。畝田・寺中遺跡では、堀で囲繞された方二町×一町半程度の空間が検出されている。南新保北遺跡では銭の出納に関わる付札木簡が出土している。戸水Ｃ遺跡は古代以来の津湊関連遺跡と評価されている。近岡遺跡の所在する近岡町には林系の近岡九郎利明が12世紀末～13世紀初頭に館を構えたと伝えられている。このように、遺跡周辺は中世期の活動が活発な地域であり、倉月荘内に比定される直江町においても直江北遺跡、同中遺跡、同ニシヤ遺跡、同ボンノシロ遺跡、同南遺跡で活動が認められる。「直江」の初見は、『天文日記』天文五年(1536)五月二日条に「加州直江村新右衛門尉」として見える。本願寺証如によるものであり、一向一揆が盛んであった当地域との関係が垣間見え、16世紀代の遺構・遺物も確認されている。このころ、木越には木越三光と称される一向一揆の有力寺院が所在しており、直江町からもほど近い距離といえる。

第２図　位置と周辺の遺跡〔S=1 /30,000〕

第３章　直江南遺跡

第１節　概要

本遺跡では、主に中世前期の遺構が見つかっており、複数の井戸と方形の竪穴遺構が検出されている。井戸は縦板組横桟留めや曲物積みによる構造がみられる。竪穴遺構からは完形品の漆器が出土しており、埋納の可能性が高く、墓などの信仰対象施設を推定している。

なお、遺跡内からは掘立柱建物などの住居施設が見つかっていないが、井戸の濃密な分布からは調査区外の周辺域に展開していることが予想される。

第２節　検出遺構

1．井戸・土坑

SE01（第４～12図）　方形を呈する井戸側として周囲の縦板とそれを固定する横桟で構成される縦板組横桟留めの構造をもつ井戸である。掘方の覆土は地山ブロックを多く含んだ黒褐色シルトであり、井戸側が検出された周辺は灰色を呈す暗灰色シルトである。検出段階では略円形のプランの中に略方形のプランが2重に検出され、外側の方形プランは井戸側が存在した場所、内側の方形プランは井戸側内部の覆土を示すと考えられる。内側の方形プランは地山土が多く含まれており、埋め立てたであろうことが容易に推定できる。井戸側の横桟（1～8）は上下2段設けてあり、1辺につき15枚前後（北側13枚、東側13枚、南側18枚、西側15枚）の縦板（10～46）を留めている。横桟は両端を互い違いに細く削りだしており、他の横桟と組み合わせられるようになっている。9は横桟に類似する形態をしているので、当該箇所に配置したが、両端の細く削りだした個所が互い違いにはなっていないので、他の横桟とは異なる。13世紀頃の遺物が出土している。

SE03（第４・13図）　楕円形の掘方を持ち、検出面から約70㎝下方にて井戸側として用いている曲物を検出した。曲物は1段のみで、上部は欠損している。中位、下位に板籠が残存しており、挟み板は3ヶ所みられる。13世紀頃の遺物が出土している。

SE04（第４図）　略楕円形を呈する掘方のやや東よりに略円形の井戸側痕跡が検出されたが、はっきりとプランが確認できたのは、10㎝ほど掘り下げてからであった。略円形のプランから井戸側は曲物と考えられるが、掘方下方には井戸側が1段残っている。井戸側は残り具合が悪く、図化していないが、内面には垂直気味、外面には斜め方向のケビキを施す曲物が出土している。

遺物量は少ないが、14世紀頃と考えられる土師器皿が出土している。

SE05（第４・14図）　略方形を呈する掘方の中央に横板と1段の曲物で構成される井戸側を伴う。横板の下端と曲物の上端の高さは重複せず、若干の空間を持っている。横板よりやや大きな幅で別の井戸側が存在したことが土層観察により確認できた。すでに木胎は残っておらず、垂直気味に延びる幅約2㎝の黒褐色粘質土をそのように判断した。平面プランはしっかりしたものではないが、概ね方形を呈しており、横板が方形に設置されていることからも、何らかの方形に囲う施設が存在したのであろう。縦板組であるのか横板組であるかの判断はつかないが、大半が腐食した縦板状の木製品が数点出土している。また、横板上端よりやや上位でアサリ様の貝殻だまりを確認している。13世紀頃の遺物が出土している。

SE02（第15～18図）　SK02と重複するが、SK02よりも新しいことが土層観察で判明している。略円形の掘方のやや南西寄りに曲物と縦板、横板からなる井戸側を確認している。SE05と構成要素は類似しているが、横板上端よりも曲物が存在する点が異なる。曲物は、重複しているが7段分確認しており、

残りの良い55・60・63（3・6・7段目）を図化している。63は上段の板籠外面に葉のような刻画がみられる。56～59は横板の外側で検出された縦板、61・62・64・65は板籠で挟まれた挟み板であり、65は底板と考えられる円形版の転用である。また55・63は上下段の曲物にわたって挟まれていたことがわかる資料である。井戸埋めに関する遺構として、井戸側内部で頭部大ほどの川原石が複数見つかっており、充填しているのではなく、数段に積み重なっている。13世紀後半頃の遺物が出土している。

SK01（第15図） SK02と重複するが、SK02より新しいことが土層観察から判明している。平面略円形、横断はすり鉢状を呈する。13世紀頃の遺物が出土している。

SK02（第15図） SK01、SE02と重複するが、両者より古いことが土層観察で明らかとなっているが、平面観察では認識できないほどの違いである。遺物は少なく、非ロクロ土師器皿片が出土している。

SK03（第15図） 調査区の北西隅で検出したために全形は不明である。SK05と重複するが、SK05より新しく、また後述するSD01と覆土が近いために、近代頃のものと考えられる。

SK04（第15図） 平面略円形を呈する土坑で、弥生時代終末期頃の土器や須恵器が出土している。

2. 竪穴遺構・ピット

SI01（第19図） 長方形を呈する大型土坑である。長辺3.1m、短辺2.4m、深さは50㎝程であり、土層観察からは一度に埋められたものと考えられる。中央底付近からほぼ完形品の漆器小皿、北東隅寄りから漆器椀が出土しており、何らかの埋納行為が行われた可能性を考えている。土層観察面中に縦方向に延びる板が見えるが、穴が埋まった後に差し込まれたものである可能性が高く、本竪穴に関係するかは不明である。13世紀後半頃から14世紀前半頃の遺物が出土している。

P01（第19図） SI01の南東隅に隣接して検出されたが、関連は不明である。平面略方形を呈し、掘方、深さ共にしっかりしている。覆土には地山ブロックが多く混入しており、SI01の覆土とは異なる。13世紀後半頃の遺物が出土しており、土錘が5点と目立つ。

3. 溝

SD01（第19図） 調査区南辺中央付近から北西方向へ延びる幅1m程の溝である。近代頃の所産であり、調査区北辺の手前で終わっているが、前述のSK03が同様の溝である可能性があり、その場合はその間が陸橋状に残されていることになる。

SD02（第19図） 調査区西辺で検出された南北に延びる溝である。SE05やSK06と重複するが、SK06は覆土が類似することから同一遺構の可能性がある。

第3節　出土遺物

1. 井戸・土坑

SE01（第20図） 1～25が出土している。1・2は口縁部に1段のナデを施す非ロクロの土師器小皿である。13世紀代の所産と考えられる。3は内面に片彫りの分割線を施す龍泉窯系青磁碗Ⅰ－4類である。17は図上端部に加工痕もしくは使用痕と考えられる細かな削り状の痕跡が見られる円柱状の木製品で、側面には長さ10㎜、幅3㎜、深さ5㎜の凹みがある。下端は欠損している可能性が高い。栓のような用途をもつものであろうか。19は図下端を鈍角に尖らせた棒状品である。上端頂部は欠損の可能性が高いが、その周辺は斜めにカットしている。用途不明品である。

SE02・SK02（第20～22図） 26～66が出土している。26～38は非ロクロ土師器皿で、法量は8㎝前後と12㎝前後に分かれる。31・32・36は口縁端部に面取り状のナデを施すものである。13世紀代

の所産と考えられる。39～44は珠洲焼鉢・すり鉢である。Ⅲ期もしくはⅣ期の所産であろう。45は瓷器系の甕片である。加賀焼もしくは越前焼であろう。46は土製品片である。竈や炉の構造体であろうか。48は金属製品であり、錆に覆われている。刀子であろうか。59は折敷である。表面には推定刃物痕が多数認められる。60は穿孔をもつ木片であるが、形態から下駄の可能性が考えられる。63は端部を凸状に仕上げたものである。もう一方の端部は欠損している。65は柱材のような形態をしており、柱であれば、遺構内に柱穴を含んでいた可能性が考えられる。

SE03（第22図）　67～71が出土している。67・68は非ロクロ土師器皿で口縁端部に面取りを施している。発色は異なるが、同一個体である可能性も考えられる。13世紀後半頃の所産であろう。69は板状の製品である。図下端が若干盛り上がるように周辺が加工されている。70は碁石と考えられる扁平で楕円形を呈する石である。

SE04（第22図）　72・73が出土している。72は10～11世紀頃のロクロ土師器碗もしくは皿の底部である。73は非ロクロ土師器皿で、ナデを1段施す口縁部はやや外反気味に立ち上がる。14世紀代の所産であろう。

SE05（第22図）　74～75が出土している。75は口縁端部面取り気味の非ロクロ土師器皿である。13世紀代の所産であろう。

P01（第22図）　76の非ロクロ土師器が出土している。口縁端部に面取りを施す口縁部はやや外反して立ち上がる。口径は118㎜で、13世紀後半～14世紀代の所産と考えられる。

SK01（第22図）　77～80が出土している。77は口縁端部に面取りを施す非ロクロ土師器皿で13世紀代の所産であろう。78は須恵器系陶器の小壺で、僅かに残る短い口縁部は片口状に突き出している。細い棒状工具で押し出したのであろう。外面には一部叩き痕のような跡が見えるが、対応する内面には痕跡は見られない。小壺や瓶子などが該当しようか。79は加賀焼の甕の口縁部である。口縁部は大きく外傾し、端部は細くつまみ上げられている。12世紀後半から13世紀前半頃の所産であろう。80は炉など火処に用いられたと考えられる石製品の破片で、一部コゲが付着した面が残っている。

SK02（第22図）　81・82が出土している。81は厚めの板状材、82は須恵器瓶類の底部片である。

SK06・SD02（第22図）　83・84が出土している。83は弥生時代終末期頃の甕の口縁部である。84は非ロクロ土師器皿の小皿である。

2. 竪穴遺構

SI01（第23図）　85～101が出土している。いずれも器表面の磨滅が激しい。85～89は非ロクロ土師器皿である。85は口縁部に1段のナデを施す小皿で、やや肥厚気味の口縁部の立ち上がりは強い。86～89は78に比して大皿とすべきものである。86は平らな底部から口縁部が強く立ち上がるが、1段ナデによって口縁部が大きく外反するものである。89は口縁部に1段ナデを施すもので、口縁部上半はやや肥厚気味である。口縁端部は面取り気味を呈す。92～94は珠洲焼の鉢もしくはすり鉢である。全体的に薄作りであり、92は面取りした口縁端部の一端が外側にやや突き出している。93は同じく口縁端部の一端が内側に突き出している。94は波状の卸目が施されており、底面は静止糸切り痕が見える。いずれも珠洲Ⅰ期からⅡ期の所産であろう。95～99は土錘である。95～98は径1㎝弱の円柱形を呈する細いものであるが、99は球形を呈している。他に未実測の小片2点を含めて土錘がまとまって出土しているのは本遺構のみであり、土錘のみだったのか、何らかの植物質もしくは動物質の製品についていたのか、埋納に関する遺構を想定していることもあって興味深い。100は乳白色を呈する砂岩質の砥石である。101は磨製石斧のような形状の石製品である。図の上端と右側が欠損している。図下端

の刃部に該当する箇所が丸みを帯びており、鋭角になっていないが、その状態で磨かれている。転用品であろうか。102はケヤキを横木取りで用いた漆器小皿である。口縁部外面と内面に黒色漆を塗布している。外底面は口縁部境付近に塗布されているが、中央付近には面的な塗布は見られない。ただし、部分的には黒色を呈する箇所が見られるために、当初は全体に塗布してあった可能性が考えられる。遺存状態が悪いために図化できなかったが、完形品と思われる漆器椀が近い場所から1点出土している。103は箸状木製品、104は穿孔を持つ板棒状製品である。105は全体的にケズリ加工を施した棒状製品であり。図上端部付近では縦方向のケズリ、中央から下端にかけては略円形のケズリ痕が見られる。上方は折れたものか切断されたかの判別はできない。

3. 溝

SD01（第23図） 106～108が出土している。遺構自体は近代以降の所産である。106の須恵器甕や107の砥石、火打石の剥片の可能性がある108のメノウ剥片が出土している。

SD03（第23図） 109の外底部に菊花状絞り痕跡がみられる内面黒色土器碗が出土している。平安時代後半の所産である。

4. 遺構外

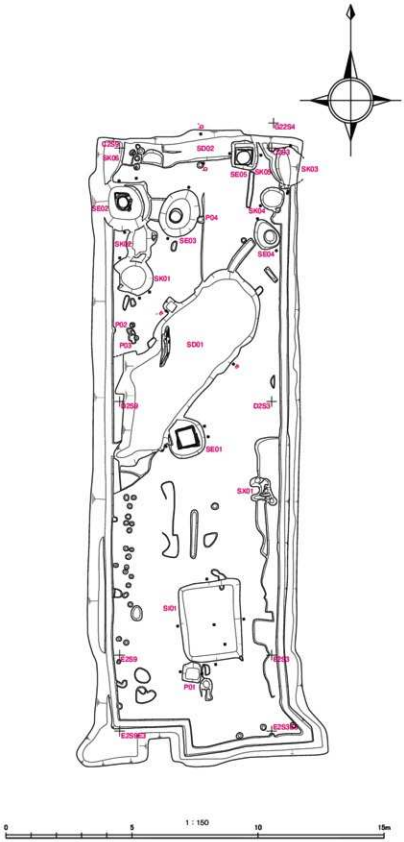
遺構外（第23図） 110・111の青磁碗が出土している。

第4節　小　結

本調査区では鎌倉時代を中心とする時期の井戸と方形竪穴遺構が検出された。

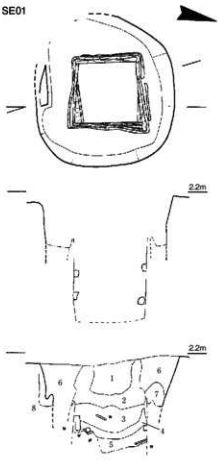
井戸は5基検出しており、縦板組横桟留めや曲物積み、縦板と曲物積みを併せたもの、曲物積みと横板を併せたものなど、多様な井戸側が採用されている。出土遺物から時期は13世紀前半から14世紀前半頃までに限られると考えられ、その後に続く遺構は本調査区では見つかっていない。同様の状況は近隣の直江中遺跡でも確認できる（金沢市2011）。直江中遺跡では川と溝で挟まれた約25mほどの空間に井戸と掘立柱建物が重複して築かれている。これらも12世紀末頃から14世紀前半頃に営まれた集落と考えており、本遺跡とも共通している。調査区内では建物に関する遺構は見つかっていないが、おそらく調査区周辺には掘立柱建物が広がっているものと推定可能であろう。なお、方形竪穴遺構については、下記のとおり建物跡を想定していない。

井戸群からやや東に離れた場所で方形竪穴遺構を検出しているが、地山直上付近から完形品で出土した漆器小皿と椀は、その出土状況から廃棄されたものではなく、埋納品の可能性が高いと考えている。また、地山直上の層中には植物質が面的に確認できた箇所があった。残り具合が悪いので、広い範囲で広がっていた可能性もある。これらのことから地山直上を床面として、植物質の何かを平面的に敷き、その上に漆器皿を置いたような光景が想像できる。植物質や漆器椀の遺存状態が極めて悪いことから、有機物が残り続けるには過酷な環境であったようで、他にも有機物が複数存在していた可能性も想定可能であろう。このように考えた場合には、墓のような埋葬施設としての利用が想定できるであろうか。またはその他の祭祀行為に用いられたのであろうか。いずれにせよ、漆器の出土状況や一度に埋められた痕跡からは、特殊な機能を持った遺構と考えるのが妥当であろう。



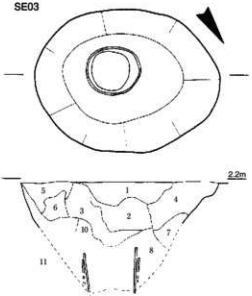
第３図　遺構全体図〔S=1/150〕

SE01



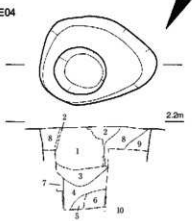
1．10YR6/6明黄褐色砂質土（10YR3/2黒褐色ブロック混）
2．10YR3/1黒褐色シルト
3．10YR2/1黒色シルト
4．7.5YR1.7/1黒色シルト（植物遺体混）
5．2.5Y3/1黒褐色シルト
6．10YR3/2黒褐色粘質土（亀山ブロック混）
7．10YR3/2黒褐色粘質土＋　亀山土
8．10YR7/4にぶい黄橙色シルト　亀山

SE03



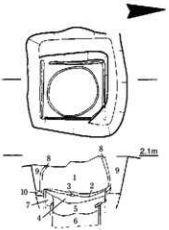
1．10YR3/2黒褐色砂質土
2．10YR3/1黒褐色粘質土（2.5Y6/4にぶい黄色粘質土ブロック混）
3．10YR3/1黒褐色シルト（2.5Y6/4にぶい黄色粘質土ブロック混）
4．10YR4/2灰黄褐色砂（10YR2/2黒褐色粘質土ブロック混）
5．10YR4/2灰黄褐色砂＋10YR2/2黒褐色粘質土（10YR6/6明黄褐色細砂ブロック混）
6．10YR3/2黒褐色シルト
7．2.5Y3/1黒褐色粘質土＋10YR4/2灰黄褐色砂
8．2.5Y3/2黒褐色シルト（10YR4/2灰黄褐色砂少混）
9．10YR3/1黒褐色シルト（10YR4/2灰黄褐色砂混）
10．10YR3/1黒褐色シルト（10YR4/2灰黄褐色混）
11．10YR4/2灰黄褐色砂　亀山

SE04



1．10YR3/1黒褐色砂質土
2．10YR4/1褐灰色粘質土（薄戸焼）
3．10YR2/1黒色シルト
4．2.5Y2/1黒色シルト
5．2.5Y5/1灰色シルト
6．10YR4/1褐灰色中粒砂
7．10YR3/1黒褐色シルト
8．2.5Y3/1黒褐色砂質土
9．10YR4/2灰黄褐色中粒砂
10．10YR4/3にぶい黄褐色中粒砂　亀山

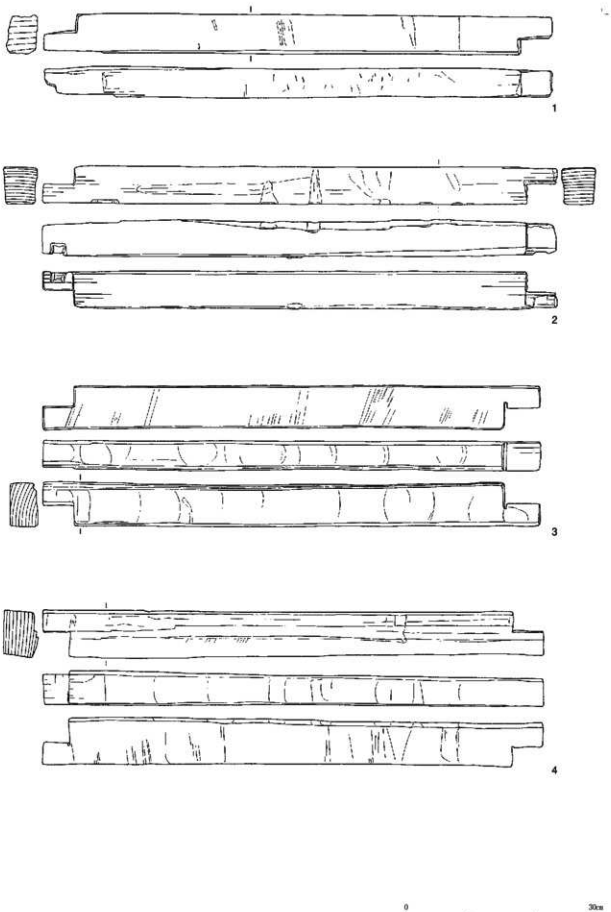
SE05



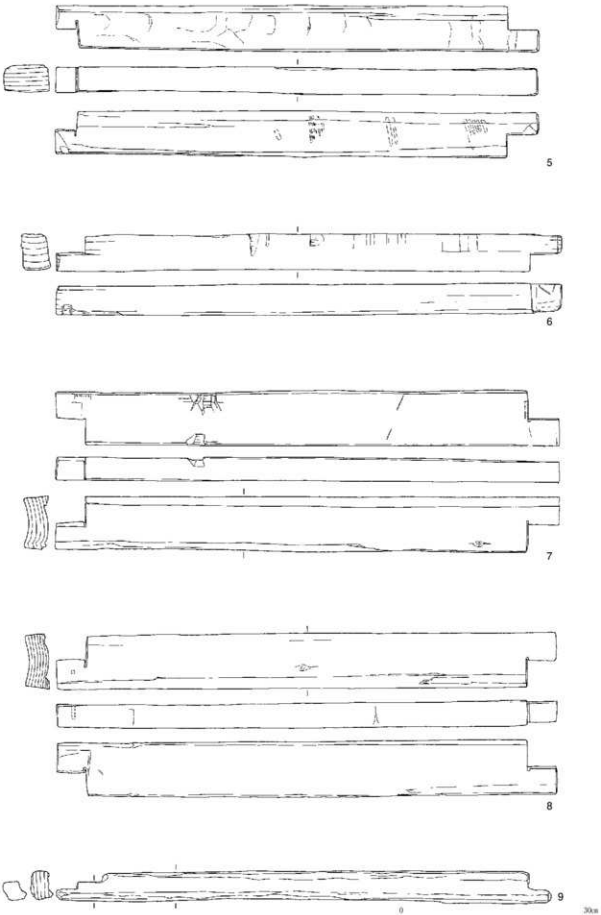
1．10YR3/1黒褐色粘質土
2．2.5Y3/1黒褐色粘質土
3．2.5Y5/2暗灰黄色粘質土（ブロック状）
4．10YR3/1黒褐色シルト（植物遺体混）
5．2.5Y2/1黒色シルト
6．2.5Y2/1黒色シルト＋10YR3/1黒褐色中粒砂
7．10YR3/1黒褐色シルト（植物遺体混）（10YR4/1褐灰色中粒砂混）
8．10YR3/2黒褐色粘質土
9．10YR2/2黒褐色粘質土＋10YR3/2黒褐色中粒砂
10．10YR3/2黒褐色中粒砂

0　2m

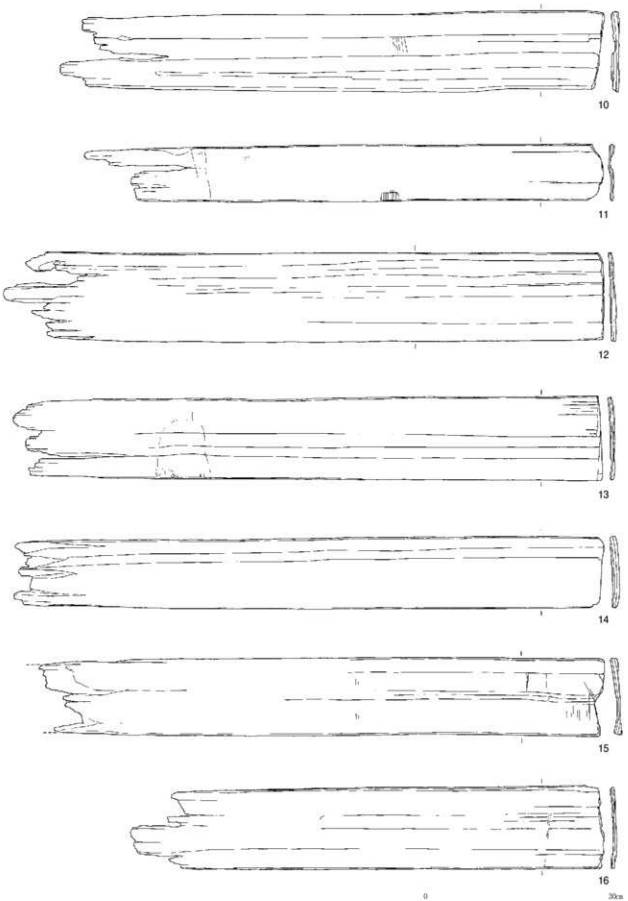
第4図　SE01、03～05〔S=1/40〕



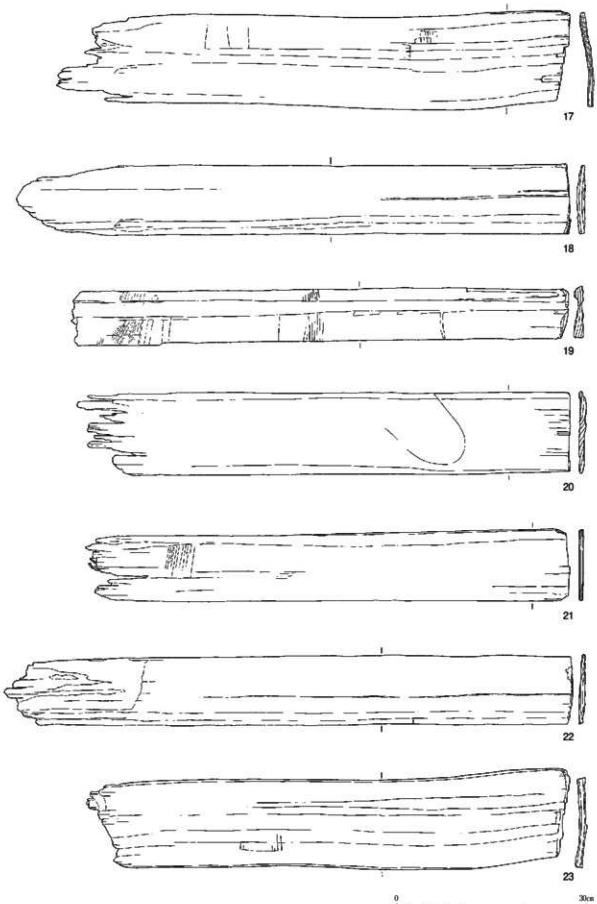
第5図　SE01 井戸側材(1)〔S=1/6〕



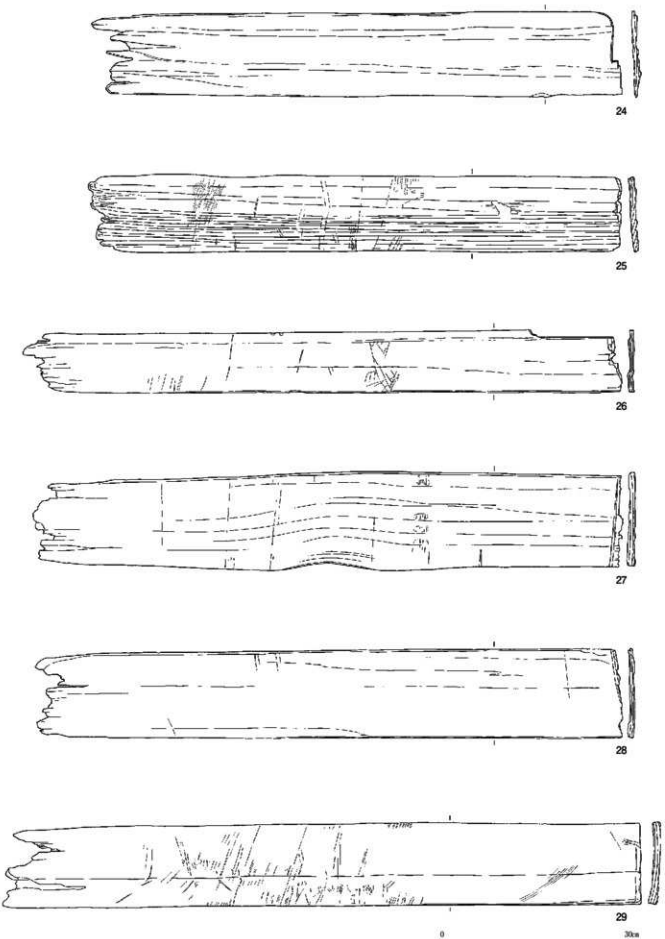
第6図　SE01 井戸側材(2)〔S=1/6〕



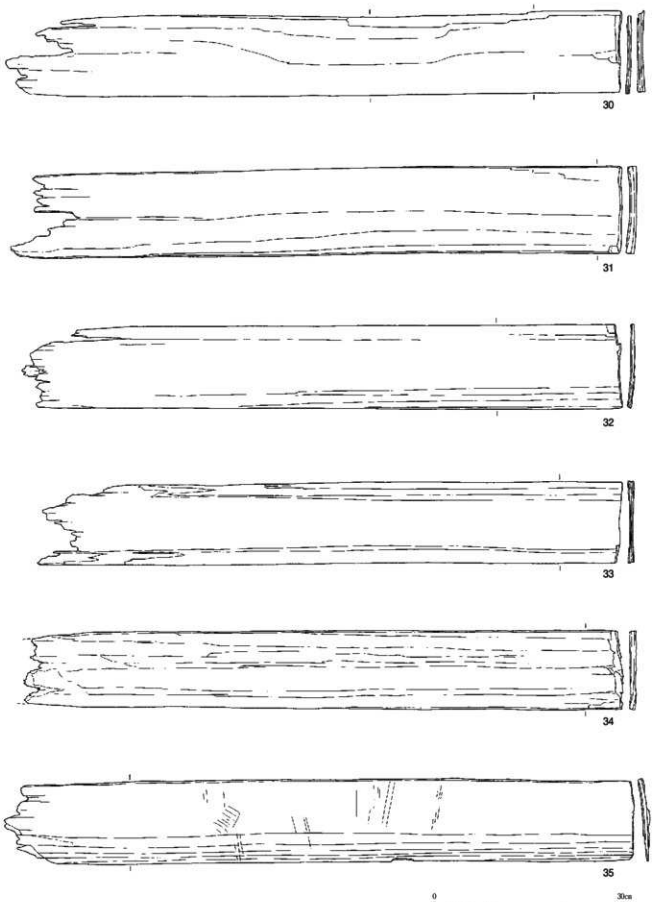
第７図　SE01 井戸側材(3)〔S=1/6〕



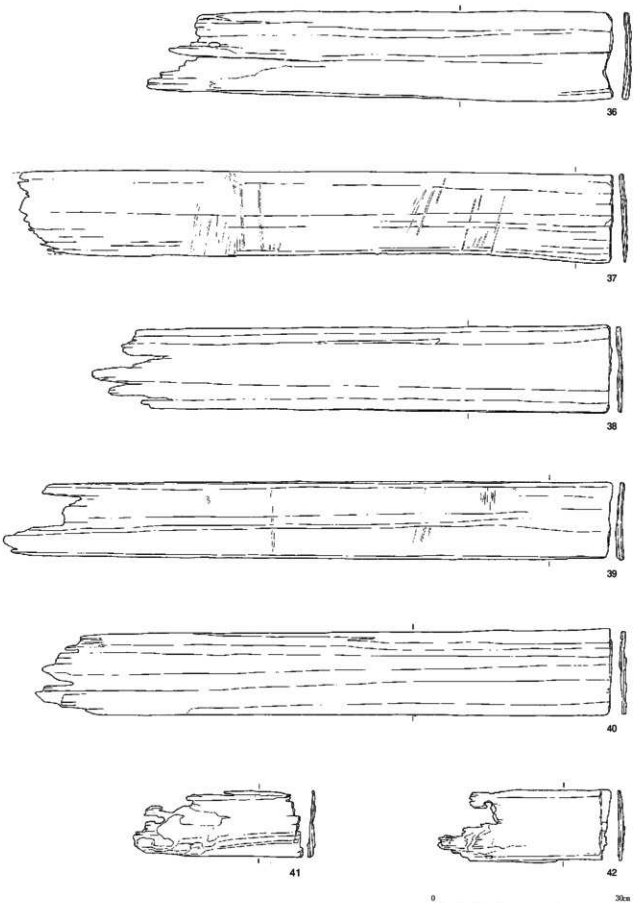
第8図　SE01 井戸側材(4)〔S=1/6〕



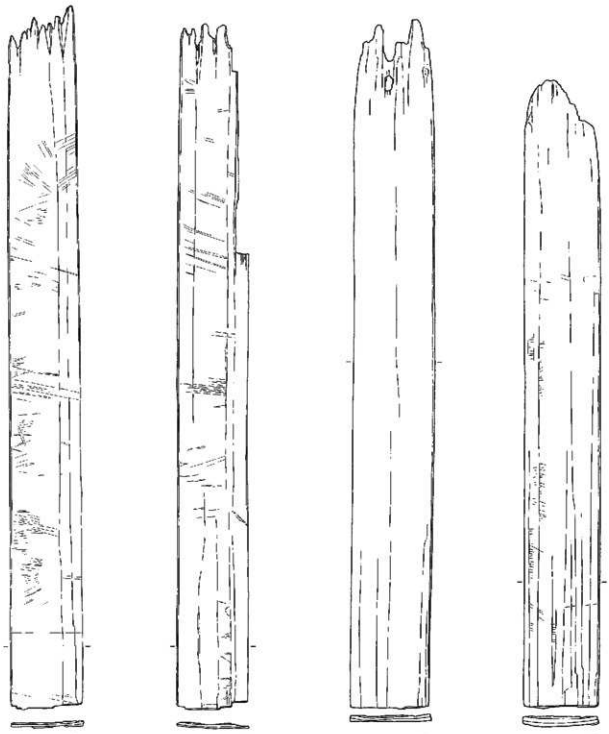
第９図　SE01 井戸側材(5)〔S=1/6〕



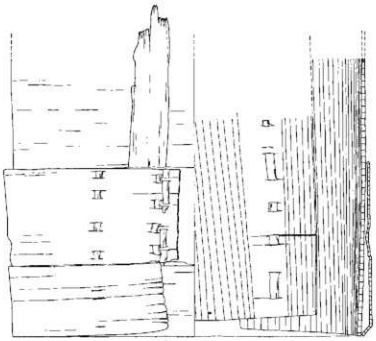
第10図　SE01 井戸側材(6)〔S=1/6〕



第11図　SE01 井戸側材(7)〔S=1/6〕

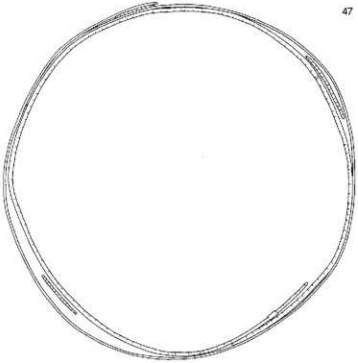


第12図　SE01 井戸側材(8)〔S=1/6〕

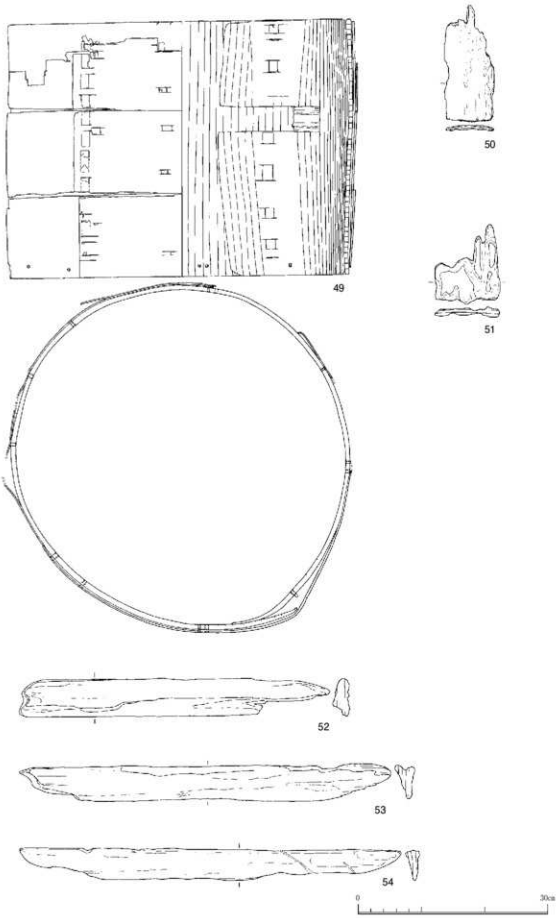


47

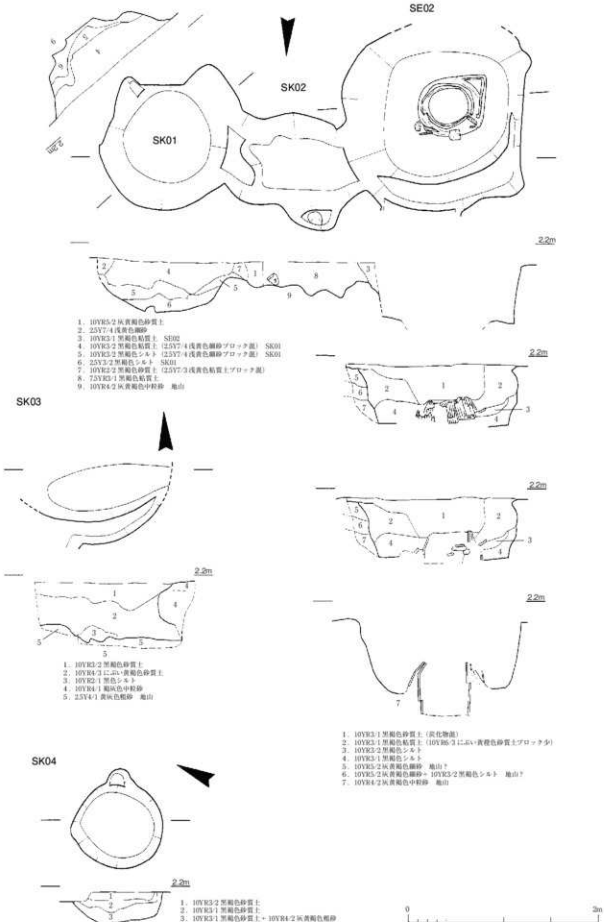
48



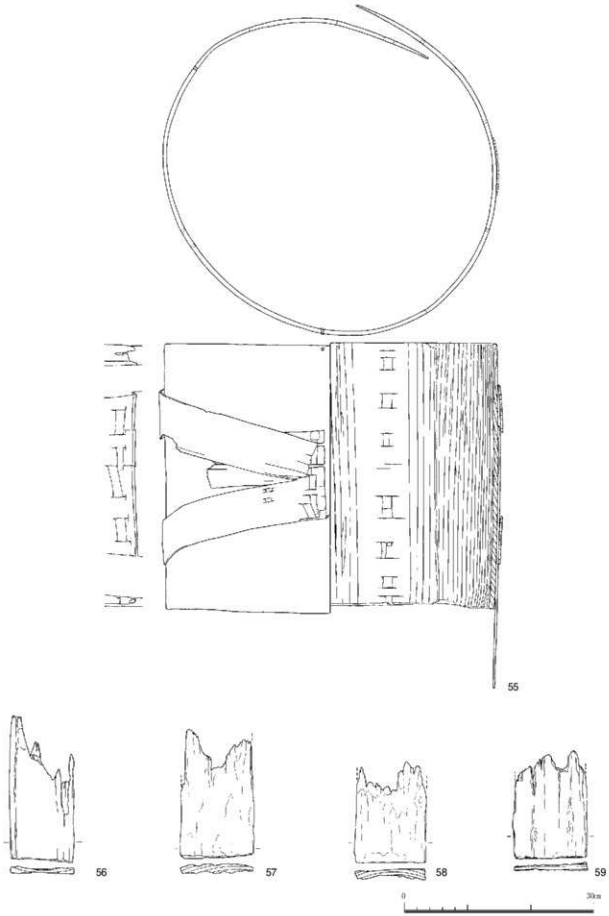
第13図　SE03 井戸側材〔S=1/6〕



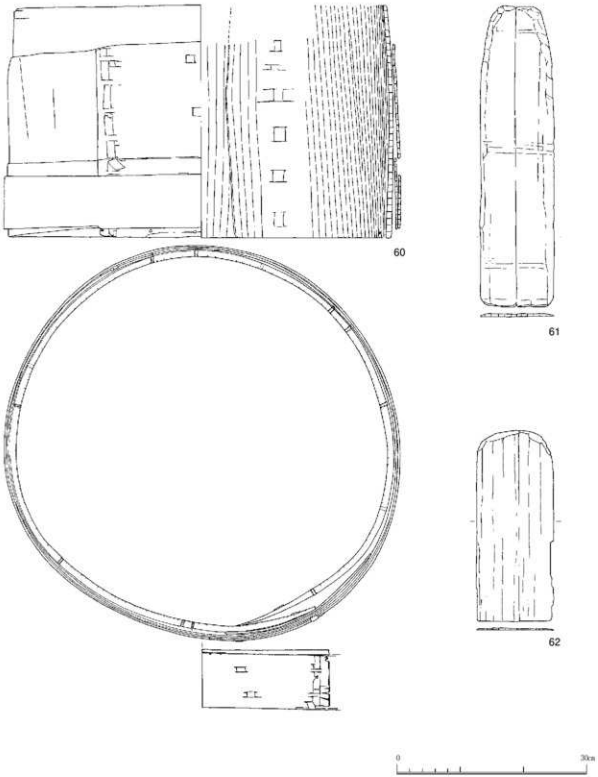
第14図　SE05 井戸側材〔S=1/6〕



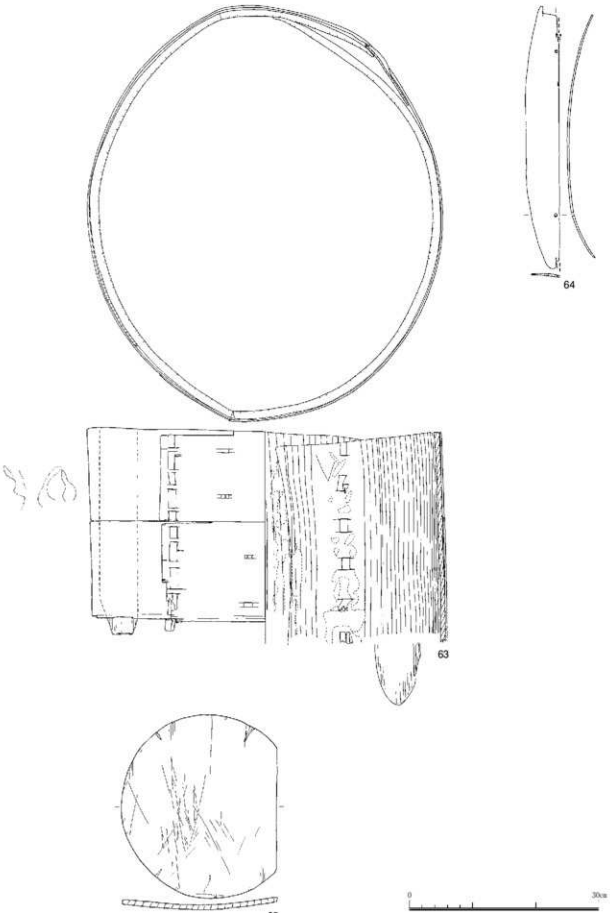
第15図　SK01・02・SE02、SK03、04〔S=1/40〕



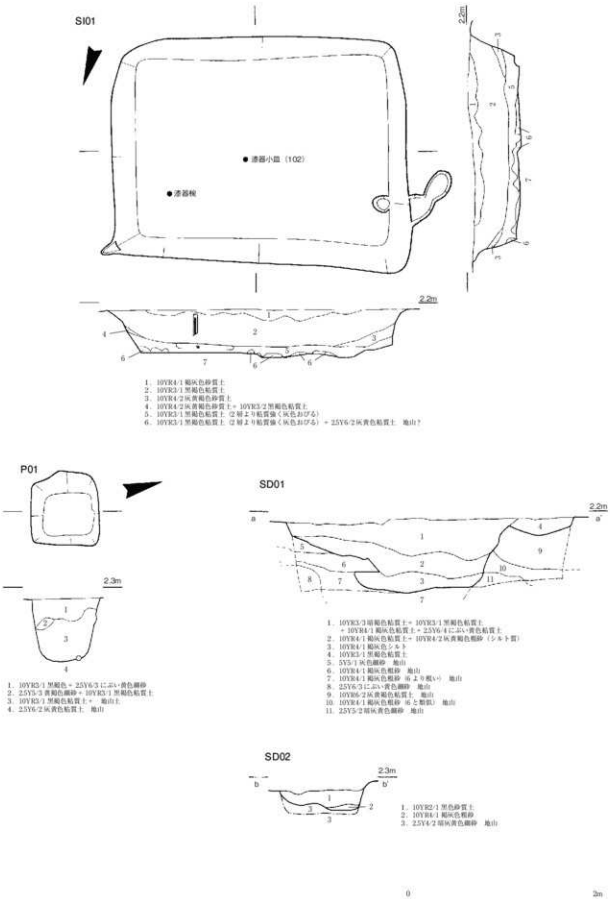
第16図　SE02 井戸側材(1)〔S=1/6〕



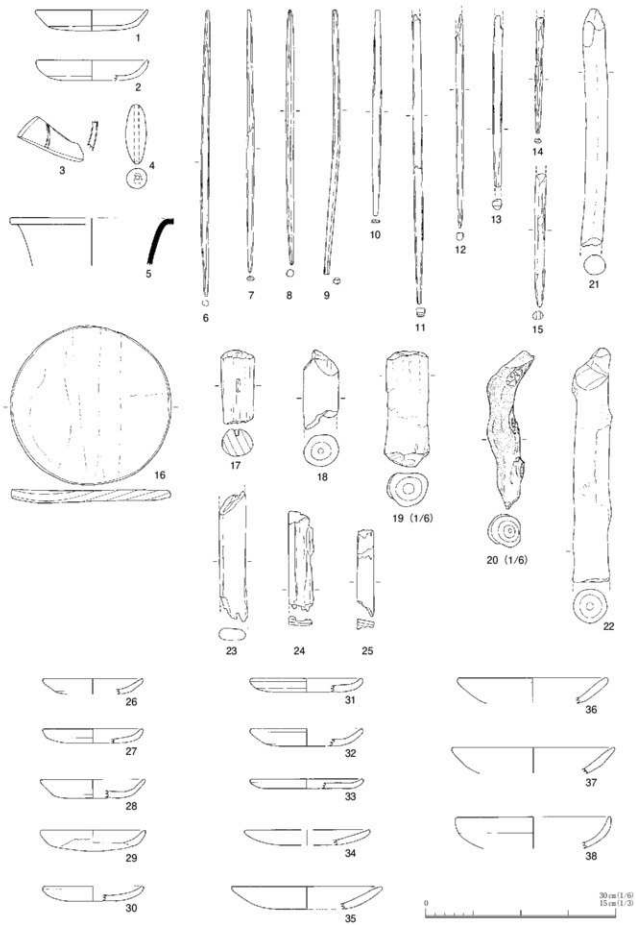
第17図　SE02 井戸側材(2)〔S=1/6〕



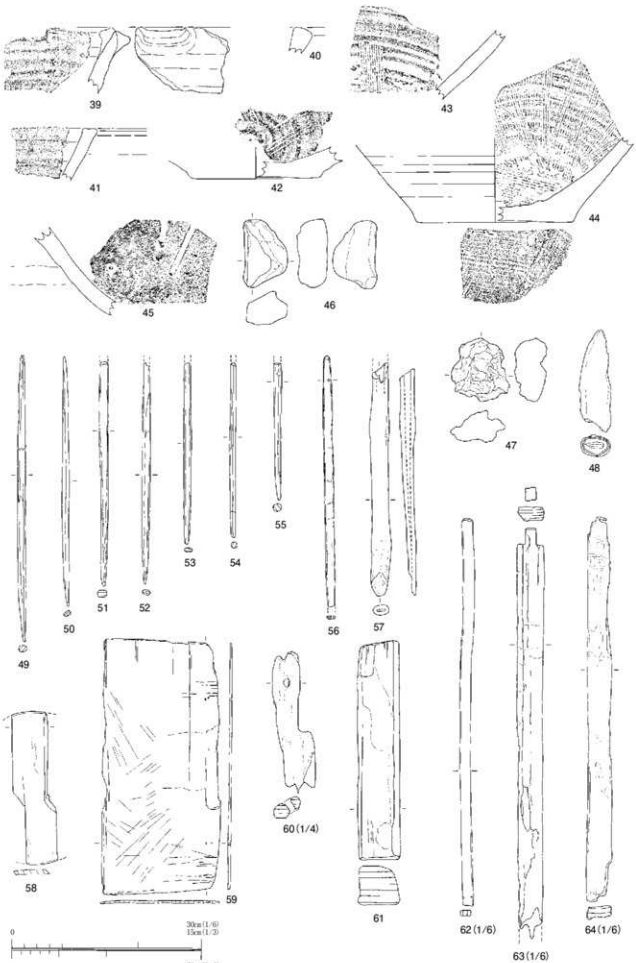
第18図　SE02 井戸側材(3)〔S=1/6〕



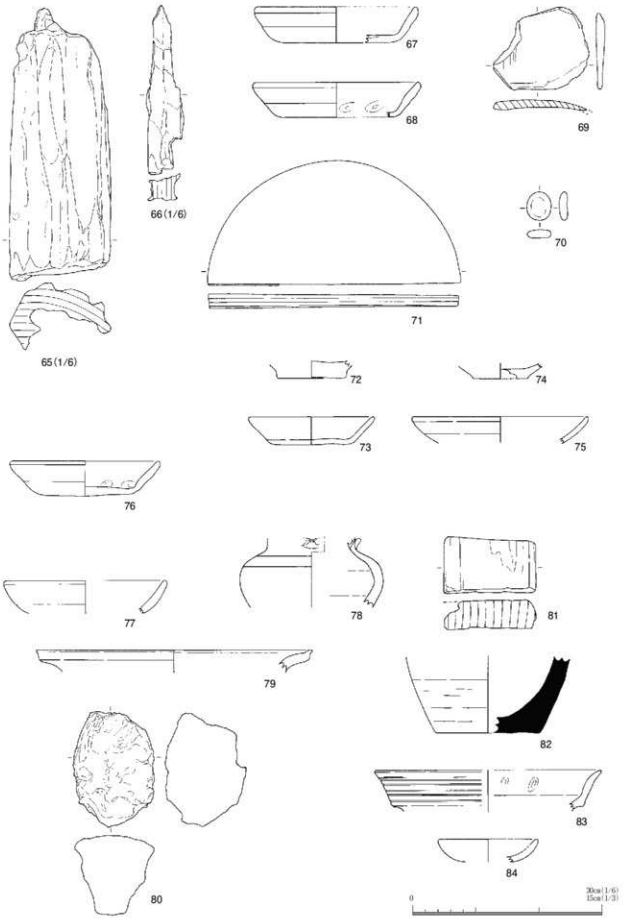
第19図　SI01、P01、SD01・02〔S=1/40〕



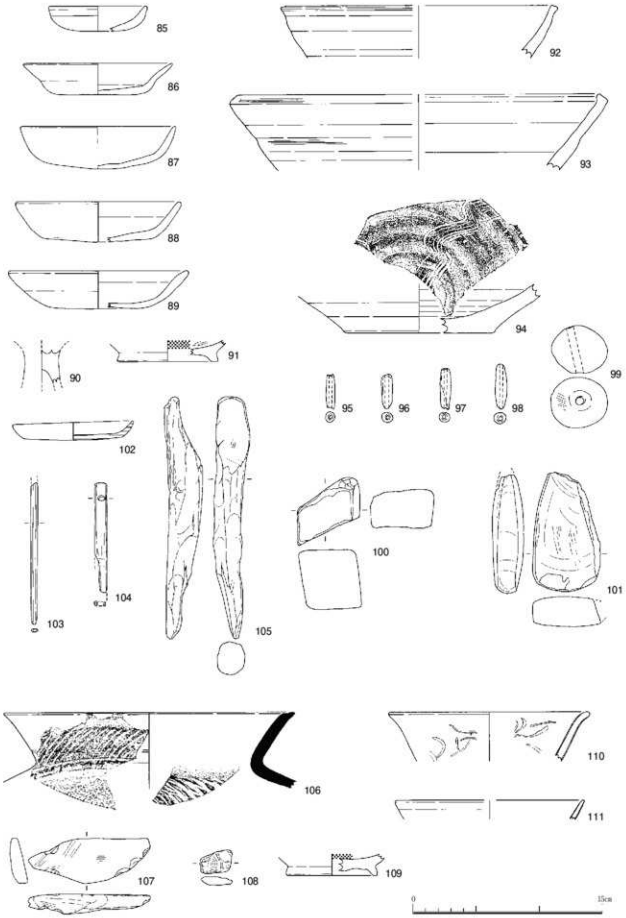
第20図　SE01（1～25）、02（26～38）出土遺物〔S=1/3・6〕



第21図　SE02出土遺物〔S=1/3・4・6〕



第22図　SE02（65、66）、03（67～71）、04（72、73）、05（74、75）、P01（76）、SK01（77～80）、02（81、82）、SK06・SD02（83、84）出土遺物〔S=1/3・6〕



第23図　SI01（85～105）、SD01（106～108）、03（109）、遺構外（110、111）出土遺物（S=1/3）

第1表　井戸・土坑計測表

（単位：cm）

遺構No	位置	長	短	深	枠	枠図	備考
SE01	E2	160	145	(135)	縦板	1～46	
SE02	D2	63	52	130	曲物	55～65	7段　横桟・縦板有
SE03	D2	195	150	(120)	曲物	47・48	1段
SE04	D2	126	115	80	縦板		1段
SE05	D2	75	70	143	曲物	49～54	1段　横桟・縦板有
SK01	D2	153	142	100			
SK02	D2	52	50	118			
SK03	D2	50	48	110			
SK04	D2	107	95	(125)			
SK05	D2	270	217	105			
SK06	D2	88	78	27			
SI01	E2	220	208	77			
P01	E2	275	175	65			

第2表　井戸側材(曲物)計測表

（単位：mm）

No.	遺構No.	種類	上からの位置	最大径	最大高	最大厚	目打痕	板継	ケビキ	実測No.
47	SE03	曲物		560	440	7	2	2一	縦	T302
49	SE05	曲物		558	407	10	13	3	縦	M144
55	SE02	曲物	3段目	543	544	10	12	1～	縦	F237
60	SE02	曲物	6段目	645	376	11	13	2～・毒	縦	ET60
63	SE02	曲物	7段目	652	(435)	10		2	縦	S224

第3表　井戸側材(縦板等)計測表(1)

（単位：mm）

No.	遺構	種別	長	幅	厚	板継	木取	備考	実測No.
1	SE01	横桟	810	62	56	計	芯去	北・上段	F253
2	SE01	横桟	820	60	54	計	芯去	東・上段	S229
3	SE01	横桟	792	68	44	計	芯去	南・上段	T309
4	SE01	横桟	796	76	54	計	芯去	西・上段	M156
5	SE01	横桟	770	43	73	計	芯去	北・下段	F252
6	SE01	横桟	840	59	42	計	芯去	東・下段	ET62
7	SE01	横桟	820	88	37	計	芯去	南・下段	M155
8	SE01	横桟	796	87	40	計	芯去	西・下段	M157
9	SE01	横桟ｎ	787	50	30	計	芯去	枠内	F256
10	SE01	縦板	(832)	128	12	計	板目	北内西から7枚目	S255
11	SE01	縦板	(826)	90	7	計	板目	北側西から6枚目	S253
12	SE01	縦板	(953)	141	9	計	板目	北側北内西から5枚目	T352
13	SE01	縦板	(919)	132	8	計	板目	北内西から4枚目	S254
14	SE01	縦板	(936)	114	11	計	板目	北側北内西から3枚目	T353
15	SE01	縦板	(900)	122	10	計	板目	北側西から2枚目	F283
16	SE01	縦板	(754)	132	6	計	板目	北側西から1枚目	S252
17	SE01	縦板	(816)	152	9	計	板目	東内北から6枚目	M184
18	SE01	縦板	(880)	110	11	計	板目	東内北から5枚目	ET90
19	SE01	縦板	(892)	86	15	計	板目	東内北から4枚目	ET91
20	SE01	縦板	(786)	130	10	計	板目	東内北から3と4枚目間	S251
21	SE01	縦板	(772)	114	8	計	板目	東内北から3枚目	M183

第3表　井戸側材(縦板等)計測表(2)

（単位：mm）

22	SE01	縦板	(905)	110	10	計	板目	東内北から2枚目	ET89
23	SE01	縦板	(770)	147	13	計	板目	東内北から1枚目	S250
24	SE01	縦板	(830)	131	11	計	板目	南内西から6枚目	T356
25	SE01	縦板	(834)	116	9	計	板目	南内西から5枚目	ET98
26	SE01	縦板	(936)	95	8	計	板目	南内西から5枚目	M189
27	SE01	縦板	910	76	17	計	板目	南内西から4枚目	S256
28	SE01	縦板	(918)	135	9	計	板目	南内西から1枚目	M190
29	SE01	縦板	(999)	126	12	計	板目	南内西から1枚目	ET97
30	SE01	縦板	(973)	130	17	計	板目	西側西内南から4枚目	M188
31	SE01	縦板	(970)	140	14	計	板目	西内南から3枚目	T351
32	SE01	縦板	(954)	134	6.5	計	板目	西側西内南から3枚目	M187
33	SE01	縦板	(915)	130	8	計	板目	西側西内南から2枚目	T349
34	SE01	縦板	(954)	125	11	計	板目	西側西内南から1枚目	F281
35	SE01	縦板	(1000)	131	11	計	板目	西側西内南から1枚目	T348
36	SE01	縦板	(746)	142	10	計	板目	西側西内南から6枚目	ET92
37	SE01	縦板	(958)	138	8	計	板目	西側西内南から5枚目	F282
38	SE01	縦板	(826)	138	9	計	板目	西側西内南から5枚目	ET93
39	SE01	縦板	(965)	122	12	計	板目	西内南から4枚目	T350
40	SE01	縦板	(918)	138	9	計	板目	西内南から4枚目	ET94
41	SE01	縦板	(270)	104	12	計	板目	西側西内南から4枚目	ET95
42	SE01	縦板	(276)	114	9	計	板目	西側西内南から4枚目	ET96
43	SE01	縦板	(1115)	115	9	計	板目	南内西から2枚目	T354
44	SE01	縦板	(1088)	114	8.5	計	板目	南内西から3枚目	T355
45	SE01	縦板	(1094)	128	10	計	板目	西内南から2枚目	M185
46	SE01	縦板	(996)	120	16	計	板目	西内南から6枚目	M186
47	SE03	挟板	479	60	4	計		曲物図内	T302
		挟板	390	115	4.5	計		曲物図内	
		挟板	425	80	4	計		曲物図内	
48	SE03	縦板ｎ	(266)	(68)	12	計	芯去		F268
49	SE05	挟板	390	78	3.5	計		曲物図内	M144
		挟板	390	65	3.5	計		曲物図内	
50	SE05	縦板	(184)	78	9	計	板目	東	T329
51	SE05	縦板	(119)	122	14.5	計	板目	西	T322
52	SE05	枠板	(494)	60	25	計	芯去	東	ET74
53	SE05	枠板	(590)	56	30	計	芯去	南	ET75
54	SE05	枠板	606	48	21	計	芯去	西	ET76
55	SE02	挟板	414	92	3	計		曲物図内	F237
56	SE02	縦板	(236)	102	9	計	板目	南	ET70
57	SE02	縦板	(206)	116	16	計	板目	北	F260
58	SE02	縦板	(158)	114	20	計	板目	北	F261
59	SE02	縦板	(170)	118	13.5	計	板目		T325
60	SE02	挟板	292	77	2	計		曲物図内、径4mmの孔	ET60
61	SE02	挟板	480	115	4	計	柾目	枠2段目	F258
62	SE02	挟板	304	122	3	計	柾目	枠2段目	F259
64	SE02	挟板	(415)	(74)	3.5	計	柾目	2・4段目	M145
65	SE02	挟板	290	(244)	9	計	柾目	2・4段目	F238

※（　）は最大値を示す。

第４表　土器・陶磁器・土製品観察表

（単位：mm）

No.	遺構	地区	種類	器種	口(長)	底(幅)	高(厚径)	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調(釉色調)	内面色調(素地色調)	礫	砂	骨	赤	焼成	備考	実測No.
1	SE01	E2	土師器	皿	88	52	16.5	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	淡橙褐	淡橙褐		並		少	並	個内上	T364
2	SE01	E2	土師器	皿	88	50	16.0	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	淡橙褐	淡褐		少		少	並	個方	T365
3	SE01	E2	青磁	碗				青磁釉	青磁釉		暗緑	灰						枠内雑錯１	T368
4	SE01	E2	土師器	土鍋	47	16	3.0				橙褐色		少	多		並	並	枠内11.17g	T366
5	SE01	E2	須恵器	瓶類				ナデ	ナデ		灰	白灰		少			並	枠内	T367
26	SE02	D2	土師器	皿	79	44		ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	淡橙褐	淡橙褐		少	少	少	並	個内外上枠外	T378
27	SE02	D2	土師器	皿	78	44	11.0	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	淡橙褐	淡橙褐		少		少	並	個内外上枠外	T381
28	SE02	D2	土師器	皿	82	46	15.0	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	淡橙褐	淡橙褐		少		少	並	個内外上枠外	T384
29	SE02	D2	土師器	皿	83	52	17.0	メントリ・ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ・指圧	淡黄褐	淡黄褐					並	サブトレ	T377
30	SE02	D2	土師器	皿	78	40	12.0	メントリ・マメツ	マメツ	マメツ	淡橙褐	淡橙褐		少	少	並	並	枠周辺	T382
31	SE02	D2	土師器	皿	88	58	11.0	ナデ	ナデ	ナデ	淡褐	淡褐		並		少	並	サブトレ	T383
32	SE02	D2	土師器	皿	87	50	14.0	メントリ・ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	淡黄褐	淡黄褐		少		少	並	個内外上枠外	T380
33	SE02	D2	土師器	皿	88	70	7.5	ヨコナデ	ナデ	ナデ$_n$	淡橙褐	淡橙褐		少		少	並	サブトレ	T379
34	SE02	D2	土師器	皿				ナデ	ナデ		淡橙褐	淡橙褐		少		少	並	東	T396
35	SE02	D2	土師器	皿	119	60	18.0	ナデ	ナデ	ナデ	灰白褐	灰白褐		少			並	下北	T397
36	SE02	D2	土師器	皿	118			メントリ・ナデ	ナデ		淡橙褐	淡橙褐		少		少	並	個内外上枠外	T386
37	SE02	D2	土師器	皿	128			ナデ	ナデ		淡褐	淡褐		少		少	並	枠周辺	T385
38	SE02	D2	土師器	皿	122			ヨコナデ・ナデ	ナデ		暗灰褐	灰褐		少	少	少	並	サブトレ	T376
39	SE02	D2	珠洲	すり鉢				ナデ	ナデ・刷目		灰白褐	灰白褐	少	多			並	枠外	T395
40	SE02	D2	珠洲	鉢				ナデ	ナデ		灰	灰		並			良	サブトレ	T389
41	SE02	D2	珠洲	すり鉢				ナデ	ナデ・刷目		灰	灰		並	並		並	枠外	T396
42	SE02	D2	珠洲	すり鉢		102		ナデ	ナデ・刷目	ヘラ起シ・ナデ	白灰	白灰	少	並			並	枠周辺	T392
43	SE02	D2	珠洲	すり鉢				ナデ	ナデ・刷目		灰	暗灰	少	並			並	外枠西	T393
44	SE02	D2	珠洲	すり鉢		124		ナデ	ナデ・刷目	静止糸切り	灰白	灰		少	並		並	個外	T551
45	SE02	D2	瀬戸系	壺				ナデ	ナデ		灰白	赤褐	並	並			並	枠外	T394
46	SE02	D2	土師器	不明	54	35	26.0				淡橙褐		少	並		多	並	32.0g	T387
67	SE03	D2	土師器	皿	128	86	29.0	メントリ・ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ・ヘラ起シ痕	白灰褐	白灰褐		少		少	並	枠内	T373
68	SE03	D2	土師器	皿	129	90	27.5	メントリ・ヨコナデ・ナデ	ナデ・指圧痕	ナデ	淡橙褐	淡橙褐		少		並	並	サブトレ	T374
72	SE04	D2	土師器	碗・皿		55		ナデ	ナデ	ナデ	淡橙褐	淡橙褐		少		少	並	枠外	T370
73	SE04	D2	土師器	皿	98	60	22.0	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	淡褐	淡白褐		少		少	並	枠内	T369
74	SE05	D2	土師器	無台椀・皿		44		マメツ	マメツ	マメツ	橙褐	橙褐		少		少	並	方形枠北端北東ｽﾐ	T372
75	SE05	D2	土師器	皿	138			ヨコナデ・ナデ	ナデ		橙褐	橙褐		並		少	並	枠外	T371
76	P01	F2	土師器	皿	118	78	28.0	メントリ・ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	マメツ	淡橙灰	淡橙灰		並		並	並		S262
77	SK01	D2	土師器	皿	126			メントリ・ヨコナデ	マメツ		淡橙灰	淡橙灰		並		少	並		S266
78	SK01	D2	陶器	壺				ナデ	ナデ		暗灰	灰	少	並			並	珠洲$_n$	S265
79	SK01	D2	加賀	壺	238			ナデ	ナデ		灰	淡赤灰		並			並	最下層	S267
82	SK02	D2	須恵器	壺・瓶		84		ナデ・ケズリ	ナデ	静止糸切り	濃灰	濃灰	少	並			並	北辺	S261
83	SK06・SD02	D2	弥生	壺				ナデ	ナデ・指圧痕		橙褐	淡橙灰		並	並	並	並	南半	S263
84	SK06・SD02	D2	土師器	皿	78			マメツ	ナデ		淡桃橙	淡桃橙		少			並	南半	S264
85	SI01	E2	土師器	皿	78	56	20.0	ヨコナデ・ナデ	ナデ	マメツ	淡赤褐	淡赤褐		少		並	並	南西	S277
86	SI01	E2	土師器	皿	118	78	25.0	マメツ	マメツ	マメツ	淡橙褐	淡橙褐		少		少	並	北西	S276
87	SI01	E2	土師器	皿	122	98	34.0	マメツ	マメツ	マメツ	淡橙褐	淡橙褐		並		少	並	サブトレ	S273
88	SI01	E2	土師器	皿	130	92	32.0	マメツ	マメツ	マメツ	淡橙褐	淡橙褐		並			並	サブトレ	S275
89	SI01	E2	土師器	皿	142	88	30.0	ナデ	ナデ	マメツ	淡橙褐	淡橙		少		並	並	西アゼ	S274
90	SI01	E2	土師器	高杯				マメツ	ナデ		赤橙	赤橙		少		並	並	南東	S279
91	SI01	E2	内黒	有台椀		80		マメツ	ミガキ	マメツ	淡橙褐	黒	少	並		少	並	南西	S278
92	SI01	E2	珠洲	鉢				ナデ	ナデ		淡灰	淡灰	少	並			並	サブトレ	S270
93	SI01	E2	珠洲	鉢				ナデ	ナデ		淡灰	淡灰	少	並			並	南東	S285
94	SI01	E2	珠洲	すり鉢		120		ナデ	ナデ・刷目	ケズリ・工具痕	灰	灰	少	並			並	北西	S269
95	SI01	E2	土師器	土鍋	(27)	7	2.0				淡桃灰			少		少	並	西アゼ0.8g	S283
96	SI01	E2	土師器	土鍋	(27)	9	3.0				淡褐			少		少	並	西アゼ1.15g	S284
97	SI01	E2	土師器	土鍋	(32)	9	3.0				淡橙褐			少		少	並	北西1.46g	S281
98	SI01	E2	土師器	土鍋	(35)	10	3.0				淡橙褐			少		少	並	北西1.61g	S282
99	SI01	E2	土師器	土鍋	37	44	7.0				淡灰褐			並			並	西アゼ55g	S280
106	SD01キ	D2	須恵器	壺	228			ナデ・タタキ	ナデ・タタキ		灰	灰		並			並		S286
109	SD03	D2	内黒	有台椀		72		マメツ	マメツ	マメツ	淡橙褐	黒	少	少			並		S287
110	遺構外		青磁	碗	158			青磁釉	青磁釉		淡緑灰	白						表土除去	S291
111	遺構外		青磁	皿				青磁釉	青磁釉		淡青灰	灰						西半	S290

※（　）は最大値を示す。

第５表　漆製品観察表

（単位：mm）

No.	遺構	地区	器種	口	底	高	外面塗	内面塗	外底面塗	樹種	木取	備考	実測No.
102	SI01	E2	皿	96	77	14.0	黒色塗	黒色塗	黒色塗	ケヤキ	柾木	東サブトレ西端地山直上	ET28

第６表　木製品観察表

（単位：mm）

No.	遺構	地区	種別	口（長）	底（幅）	高（厚さ）	樹種	木取	備考	実測No.
6	SE01	E2	箸状	226	6	4.0	針		棒内四角	S236
7	SE01	E2	箸状	208	6	3.0	針		棒内平・角	S243
8	SE01	E2	箸状	202	6	5.0	針		棒内多角	S237
9	SE01	E2	箸状	210	5	5.0			棒内多角	S238
10	SE01	E2	箸状	163	7	2.0	針		棒内平	S241
11	SE01	E2	箸状	(229)	7	6.0	針		棒内角	S242
12	SE01	E2	箸状	(170)	5	6.0	針		棒内四角	S239
13	SE01	E2	箸状	(137)	7	8.0	針		棒内多角	S240
14	SE01	E2	箸状	(92)	6	4.0	針	辺	棒内多角	F272
15	SE01	E2	箸状	(106)	8	6.0	針	辺	棒内多角	F271
16	SE01	E2	円形板	127	127	10.0	針	板	棒内	S233
17	SE01	E2	杭ヵ	(59)	25	21.0	針	辺	棒内	S235
18	SE01	E2	棒状	(62)	28	25.0	広ヵ	芯	棒内	F270
19	SE01	E2	棒状	184	66	52.0	広	芯	棒内	S232
20	SE01	E2	棒状	(250)	52	52.0	広ヵ	芯	棒内	S233
21	SE01	E2	棒状	(188)	18	18.0	針ヵ	芯ヵ	棒内	S234
22	SE01	E2	棒状	(185)	29	28.0	広ヵ	芯	棒内	F269
23	SE01	E2	棒状	(103)	21	10.0	広ヵ		棒内	F273
24	SE01	E2	棒状	(80)	(19)	7.0	針		棒内	F274
25	SE01	E2	棒状	(68)	13	7.0	針		棒内	F275
49	SE02	D2	箸状	228	6	5.0	針		北多角	T316
50	SE02	D2	箸状	199	6	3.5	針		棒内平角	T327
51	SE02	D2	箸状	(178)	7	5.0	針		柱上段2×1四角	F263
52	SE02	D2	箸状	(175)	7	4.0	針		南	F257
53	SE02	D2	箸状	(145)	6	3.0	針		側内外上部棒先平	T321
54	SE02	D2	箸状	(139)	5	5.0	針		棒内多角	T326
55	SE02	D2	箸状	(19)	6	6.0	針		側内外上部棒先四角	T320
56	SE02	D2	箸状	200	8	4.0	針		棒内平角	T328
57	SE02	D2	棒状	(185)	16	13.0	針		柱上段2×1	F262
58	SE02	D2	板状	122	(28)	5.0	針		円形板ヵ	F265
59	SE02	D2	折敷	270	(127)	3.0	針		側内、底	S394
60	SE02	D2	下駄ヵ	(151)	(33)	(21.0)				F266
61	SE02	D2	棒状	173	34	31.0	針		棒周辺	T324
62	SE02	D2	棒状	614	16	8.0	針		南	ET71
63	SE02	D2	棒状ヵ	(652)	41	22.0			南	F254
64	SE02	D2	棒状ヵ	(607)	38	18.0			棒外南	ET73
65	SE02	D2	杭ヵ	(434)	(160)	(530.0)			棒外	ET77
66	SE02	D2	棒状	(268)	(28)	(43.0)	針		北	F264
69	SE03	D2	板状	(65)	(74)	7.0	針ヵ		サブトレ	T318
71	SE03	D2	円形板	201	(98)	12.0	針	板	棒内	F267
81	SK02	D2	板状	44	73	22.0	針	柾		F276
103	SI01	E2	箸状	(112)	5	2.5	針		北東（東アゼ当）ヲ	T323
104	SI01	E2	棒状	87	9	3.5	針		北西	T319
105	SI01	E2	棒状	191	26	26.0		芯	南西	T317

第７表　石製品観察表

（単位：mm）

No.	遺構	地区	器種	長	幅	厚	重量（g）	備考	実測No.
70	SE03	D2	番石	22	19	6.0	4.52	側外	T375
80	SK01	D2	炉石ヵ	91	64	63.0			S268
100	SI01	E2	礎石	(54)	(49)	47.0	114	南東	S272
101	SI01	E2	敲製石斧	(94)	(54)	24.0	185	南東	S271
107	SD01	E2	礎石	(97)	35	16.0	55		S288
108	SD01	DE2	剥片	18	26	6.5	4	メノウ火打石ヵ	S289

第８表　金属製品観察表

（単位：mm）

No.	遺構	地区	器種	長	幅	厚	重量（g）	備考	実測No.
47	SE02	D2	鉱滓	50	43	25.0	61.25		T390
48	SE02	D2	不明	(81)	25	17.0	25	鉄	T391

※（　）は最大値を示す。

第４章　直江ボンノシロ遺跡

第１節 概要

本遺跡では、古墳時代の川跡や平安時代から室町時代の遺物が確認できる川跡とその川跡と重複する江戸時代から明治時代頃の川（用水）跡、また江戸時代から明治時代頃の墓跡が見つかっている。遺物は古墳時代の土器や木製品、平安時代の土師器、須恵器、鎌倉時代から室町時代の土師器や国産陶器、中国産陶磁器、漆器、木製品などが多く出土している。墓については、近世以降に営まれており、近代以降の墓も含んでいる。件数は多く見つかっているが、ここでは近世のものについて詳しく触れることとし、近代以降のものについては、その全てについて述べることはしないので、ご容赦願いたい。

なお、隣接調査区で鞍月文化会館建設工事に伴う発掘調査が実施されており、縄文時代晩期後葉の土器が出土している。また、第24、25、81、82、84、85図にはその際の遺構図を含んでいる。

第２節　検出遺構

1．土坑・墓坑

SK07（第30図）　方形棺に隣接して29の小型の早桶と第3節第36図2の土器壺が埋納されていた墓坑である。壺は木棺の上端とほぼ同じ高さで検出されたが、早桶はかなり下からの検出であった。方形棺と早桶、土器壺がセットとして埋納している墓坑は本遺構のみである。副葬品はない。

SK09（第26・27図）　SK28を壊して造られた墓坑である。棺は1枚物の側板と底板からなり、天井板は未検出である。側板の縁部にはそれぞれ縦方向、横方向の細い板が鉄釘によって留められており、同様に留められた内側の角にある縦方向の棒状材は底板よりも下方に延びて、脚となっている。長辺側の側板外面には菊花と卍をモチーフにした飾板が釘によってつけられていたようで、1のように復元した。飾板と側板の間には4・6・7のような板が当てられており、復元に際しては、その痕跡や板を置けるスペースを考慮した。それらの飾板から端側には格子が木釘によって留められている。飾板は5→6→3→4→側板の順に木釘を用いた鋲によって留められていた。7は卍と側板の間に入れられた板である。9・10も側板の飾板と考えられるが、反対側の長辺側にも同様の飾板が入ることから、短辺側の飾板、もしくは底板の下から出土していることから底板に関係したものである可能性が高い。2は宝珠状の棒材である。棒材を角状にカットしているので、棺の角につけられていたのかもしれないが、詳細は不明である。副葬品はない。

SK13（第28・29図）　本墓坑群で、木棺、人骨ともに最も残りの良かった遺構の1つである。11の木棺は、飾板の模様などが若干異なるが、SK09木棺と類似している。菊花と葉を用いた飾板や卍がある。また、短辺の横板両端には墨描き状の草模様が描かれており、中央部分には簾状の植物質が部分的に付着している。短辺側の図で、網掛けで示した部分は墨痕のような痕跡が認められた箇所である。横板下端部の細い横板には「メ」の様な墨書が見える。16の卍はSK09と異なり卍の向きが反対方向である。飾板や横材、縦材を留める鋲は出土時には金色に光って見えた。17はSK09出土品と同様に底板の下から出土している。12は2同様に棒部を角状にカットしているので、木棺の四隅につけるような機能を持っている可能性がある。副葬品は出土していない。

SK14（第29図）　方形に近い木棺をもつ墓坑である。18～22は木棺の上部に取り付けられる天蓋の一部である可能性を考えている。18・19は天蓋の笠の部分が想定される。20～22は中央にあって、その笠の部分を固定するための板が想定される。6ヶ所の切込みが確認できるので、6枚の笠部品がついていたのであろう。副葬品は出土していない。

SK18（第26・30図） 長方形を呈する木棺をもつ墓坑である。底板と側板の接合には木釘を用いている。底板上に側板が乗り、外底面から木釘を打ちつけて固定している。26～28は漆塗りの板材であり、底板の下から出土しているが、用途は不明である。

SK19（第26・29図） 早桶を用いた棺をもつ墓坑である。第26図遺構図の左側が底板側であり、西側に倒れた状態で検出されている。倒れた状態で上側となる東半の側板を外して図化しており、側板の内面が見えた状態である。23は蓋板であり、木釘状のジョイントによって板を繋ぎ合せて蓋としている。図上部左寄りと、図下部右寄りに平らな面から打ち込んだ木釘が残っている。24は出土側板を並べて復元した桶である。外面上半部には箍が残っている。蓋の径と口径の大きさが合わないが、桶図が復元によるものであることに起因する可能性がある。

SK28（第26図） SK09と重複する墓坑であり、SK09よりも古いことが土壌の平面観察によってわかる。SK09によって、北半の大半が失われているが、板状品が見えるので、木製棺が設置されていたのであろう。漆器椀2点の他、鉄鍋が逆位で出土しており、いわゆる鍋被り葬の事例に該当しよう。

SK30（第31図） 厚い蓋板を伴う長方形を呈する木棺をもつ墓坑である。検出時には明確な輪郭は確認できなかったが、SD08を掘り下げていく中で検出された。木棺の側板は組み合わせ式になっており、接合箇所を木釘で固定している。底板には外周に棒材が木釘と鉄釘で固定されており、台となっている。外底面には一部縄のような痕跡があり、また端部に凹んだ痕跡が2ヵ所あることから、運搬の際には木棺の短辺側2ヵ所に縄をかけていたことが想定される。側板には木釘を多用し、荷重のかかる底板の接合には鉄釘と木釘を併用している。

SK31（第34図） SK30に隣接して検出されたが、こちらもSD08を掘り下げる際に検出された。平面図には掲載できていない。長方形を呈する木棺をもつ墓坑であり、蓋板も検出したが、天井板は薄くもろいために図化できなかった。ただし、蓋板の側板は図化しており、33の上部に掲載した細長い板は蓋板の側板で、端部を桜の皮と木釘で固定している。また天井板と側板は木釘で固定していた痕跡が見える。側板は組み合わせ式であり、平たい面から木口に向かって木釘が打たれている。また、長辺の側板には横幅を3等分するかのように縦板が2本木釘で固定されている。底板の外周には台となる細長い棒材が木釘によって固定されており、中央にはやや幅広の板材が木口からと表面からの木釘によって設置されている。外底面には縄の痕跡が見られる。副葬品はない。

SK32（第26・32・33図） 蓋を伴う長方形を呈する木棺をもつ墓坑である。SD07と重複しており、遺構検出時には確認できずに、SD07の掘削によって見つかった遺構である。木棺、副葬品共に最も残り具合の良い資料である。第26図は棺内の検出状況であり、34は木棺の蓋である。天井板は幅細の板を木釘状のジョイントを用いて接合しており、短辺側の蓋側板の形状に合わせて、緩やかに湾曲している。蓋板の中央部右寄りのところに四角で囲んだ箇所があるが、その内部の図は天井板の内面の同位置で見られる紐状のものが当たったような痕跡を示している。図左側の蓋側板には木棺と接する側に2ヵ所の金具痕が認められる。木棺側にも同様の痕跡と鉄釘が認められるので、蓋の開閉を可能とする蝶番状の金具が付けられていた可能性が高い。また蓋板同様に四角く囲んで示した個所の内部の図は木棺内面の同位置を表しており、紐状のものが当たっていたような痕跡がうかがえる。木棺側板は3枚の横板材を木釘状のジョイントを用いて組み合わされている。側板上端部よりやや下がった位置には蓋の受けとして棒状の横材が取り付けられている。蓋側板の長辺側中央の天井板と接する部分には凹みが設けられており、36のような横架材状の棒材が設置されていた可能性がある。また、第33図の長辺側の側板上端部中央にも凹みと孔があり、そこと接する蓋板にも同様の凹みと共に何かが当たったていた痕跡と孔が存在することから、蓋板を留めるような仕掛けが施されていた可能性が考えられる。

第26図の北端部から鉄鍋（第39図34）が、そして漆器椀が鉄鍋の南東端（同図33）、同東端（同図32）、木棺の南東隅（同図31）、鉄鍋の下に包丁（同図35）、木棺中央に鎌（同図36）が入っていた。蓋が残っていたことから、墓坑陥没による棺外からの流れ込みは無い。

2．溝・川

SD01（第35図）　調査区東端を南北に流れる川跡である。最終埋没は近代である。a－a'層位図の1～6層、c－c'層位図の1～6層、d－d'層位図が該当する。

SD02（第35図）　SD01と重複しながら南北に流れる川跡である。a－a'層位図の7～19層、b－b'層位図、c－c'層位図の7～9層が該当する。古代から中世にかけての遺物が多く出土しており、古代は不明ながらも中世には機能していた川跡と考えられる。中世後半には流路をSD01の方に変えていると想定しているが、上層からは近世遺物が出土しているので、徐々にSD01寄りに変わっていったものと考えられる。

SD03（第35図）　SD01・02が重複しつつ南北に流れる調査区の、中央付近西寄りで検出された東西溝の一端である。c－c'層位図の10～13層、e－e'層位図が該当する。古代から中世の溝跡であろう。

SD05（第35図）　調査区西寄り、墓坑群が位置する付近で検出された東西溝である。墓坑群と火葬骨を含む溝状遺構のSX05により一端途切れるが、その西側に所在するSD20に繋がる同一溝と考えている。弥生時代から古墳時代の土器が出土している。

SD10（第35図）　調査区西端中央やや南寄りで検出された東西に流れる川跡と推定している。北岸は検出できたが、南岸は近代以降に埋没したSD11によって削られているようだ。弥生時代終末期から古墳時代前期頃の遺物が多く出土している。

SD20（第35図）　SD05から続く東西溝と考えている。

第３節　出土遺物

遺物については、紙幅の都合もあって、遺構の年代を決定するために必要なものや特殊なものについて扱うこととする。文中で触れないものや法量等については章末の観察表をご参照願いたい。

1．ピット・土坑・墓坑

P02（第36図）　1の土師器甕底部片が出土している。

SK02（第37図）　13は9世紀代の須恵器無台坏、14は12世紀頃の口縁部に小さな玉縁をもつ白磁椀、15は近世の外面に鉄釉を施す陶器瓶類で、16は中世の珠洲焼甕である。

SK07（第36図）　2は土師器の骨壺である。胴部上半に横方向の波状文を施している。近代か。

SK11（第37図）　17は鎌の刃部片と考えられる。

SK14（第37図）　18・19は秉燭である。18は芯立部が欠損している。近世から近代か。

SK17（第37図）　20は越前焼の甕で、陶棺として利用したものであろう。胴部上半に刻印がみえる。口縁部および胴部形態から18世紀前半頃の所産と考えられる。

SK18（第36図）　12は外面および外底面は黒色漆塗りで、内面および外面の漆絵は褐色を呈する漆を塗布する漆器椀である。外底面のケズリは粗い。近世の所産であろう。

SK19（第36図）　3は須佐唐津のすり鉢で18世紀後半頃、4は肥前の碗で18世紀頃、5は肥前片口鉢で18世紀～19世紀頃の所産であろう。6～8は寛永通宝で7は古寛永、他は新寛永である。

SK21（第36図）　9～11は土師器骨壺とその蓋である。10・11は同一個体であろう。近世末から明治期の所産と考えられる。

SK27（第38図） 棺については他墓坑との重複によってか、よくわからなかったが、21・22の箱膳と26・27の筆箱およびそれらの中身が出土した。21・22は部分的に黒色漆が残っており、全体的に黒ずんでいるので、黒色漆塗りの製品と考えられる。底板内面には図の右側に23の口縁端部痕、左側には入子で出土した24と25の口縁端部痕が見える。天井板内面には23の高台端部痕が見える。22の長辺側側板の中央やや下寄りのところに2ヵ所の木釘が見える。23は外面に扇を赤色漆で描いた内面赤色、外面黒色の漆器椀、24は内外面に赤色漆で絵を描いた内外面黒色の漆器椀、25は外面に赤色漆で扇を描いた内面赤色、外面黒色の漆器椀である。26・27は21・22同様に黒ずんでいることから黒色漆塗りの製品と考えられる。蓋、身共に外面に刃物痕が多く認められる。27の身は内部に棒材による筆置きがあり、2ヶ所の凹みが見られる。また底板中央には2ヶ所の孔が開けられている。28は筆箱に入っていた硯である。近世の所産と考えられる。

SK28（第39図） 29は三足をもつ丸型湯口の鉄鍋である。30は内面に赤色漆絵を施す内外面黒色の漆器椀である。共に近世の所産と考えられる。

SK32（第39図） 34は相対する位置に2ヶ所の吊耳をもつ鉄鍋である。吊耳には4ヵ所の孔が開いている。35・36は包丁と鎌であるが、両者ともに刃部に布状の付着物が認められる。布様の繊維で巻いてあった可能性がある。いずれも近世の所産と考えられる。

3. 落ち込み等

SX01（第40図） 38は古瀬戸前・中期頃の瓶子類の口縁から頸部と考えられる。口縁端部内面から外面にかけて薄い灰釉が施されている。胎土はやや赤みを帯びた灰色を呈す。

SX03（第40図） 平安時代前期の須恵器と土師器が出土している。

SX05（第40図） 火葬骨を多く含んだ黒色砂質土を主体とする近世から近代の溝状遺構である。44～46は14～15世紀頃の土師器皿、48・49は竈などの構造物片と考えられる。

4. 溝・川

SD01（第40～42図） 古墳時代頃から近代にいたる土器、陶磁器等が出土している。51は外底部に墨書が見られる。

SD01・02（第42～45図） 両川跡の境周辺から出土した遺物であり、弥生時代中期後半頃から近代まで見られる。104は外底面に「井」のような墨書が見える。130～139、141は白磁椀・皿であり、131は見込みに篦描き文が、141は外面に篦描き文、内面に櫛目文が見える。140・141は青磁碗であり、140は外面に片彫りの蓮弁文と櫛目文を描き、内面には櫛目が見え、漆継の痕跡もある。

SD02（第46～53・56図） 取り上げ層位ごとに掲載しており、遺物観察表の備考欄に記載しているが、対応する層位は第35図の層位図注記を参照願いたい。概ね弥生時代終末期から古墳時代前期、9世紀頃、11世紀前後、12世紀後半から13世紀頃、15・16世紀頃の遺物が多いようだ。186は外底面に墨書が認められる須恵器だが、破片であり詳細不明である。199は外底面にヘラ記号をもつ緑釉陶器で、釉は黒褐色を呈す。209は古墳時代の須恵器坏身である。212は外底部に「大」もしくは「六」墨書をもつ須恵器である。219は装飾器台の破片である。221は焼成された粘土塊であり、竈などの構造物片を想定している。224は外底面に筋痕が見えるが、調整痕であろうか。227は外底部に「井」墨書をもつ須恵器無台坏である。228・229も外底部に墨書が見えるが、断片であり詳細不明である。230は9世紀代の無台坏の外底部に推定「池」墨書が見える。265は灰釉陶器の碗であり、9～10世紀頃の所産であろうか。279は赤彩した装飾器台であり、透かしの一部が残存している。284は外底面に「依」墨書をもつ有台坏

である。290～294は外底面に墨書をもつ無台坏だが、290～293は墨書の詳細は不明である。290は底部から口縁部への境付近に打ち欠きのように見える破損部がある。293は「千」のように見える。295は壺もしくは瓶類口縁部の内面に「依」と墨書されている。296は高坏で、外面赤彩のように見えるが、須恵質でもあるので、断面白抜き・赤彩表示なしで図示した。307は、逆位で転用硯として使用されている。高台内には墨痕が見え、高台は3ヶ所を打ち欠いており、筆置きなどとして使用した可能性がある。319は白磁の碗で見込みに篦描き文を施す。321は内面に片彫りの推定蓮花文を施す龍泉窯系青磁碗である。323・324は近世の白磁である。326は緑色凝灰岩の剥片である。327・338はメノウの剥片で火打石の可能性が考えられる。331～333は有台・無台坏の外底面に墨書を持つもので、331は「井」墨書があるが高台内全体的に墨痕が残っており、転用硯の可能性がある。332は墨書内容不明、333は「殿」墨書が想定され、直江中遺跡でも1点「殿カ」墨書土器が出土している。

SD03（第54図）　365～367の平安時代の須恵器や白磁などが出土している。

SD05（第54図）　368・369など弥生時代中期後半頃の土器が出土している。

SD06（第54図）　近世・近代の川跡であり、370など当該期の土器が出土している。

SD07（第54図）　近世・近代の溝跡であり、371など当該期の土器が出土している。

SD09（第54図）　近世・近代の溝跡であるが、386～391の平安時代の土師器や須恵器、古瀬戸の可能性がある鉄釉瓶子類、青磁碗などを掲載した。

SD09・11・12（第56図）　421は表面に削った際の筋が残る砥石である。

SD10（第55・56図）　弥生時代終末期から古墳時代前期の土器が出土している。393・394は表面に赤彩の痕跡が見えるもので、外面および口縁部内面を丁寧に磨いている。同一個体の可能性がある。395は赤彩の痕跡が認めれらないが、393・394と類似した形態・調整をしている。410は土鈴片であり、外面を丁寧に磨いている。407は近世以降の所産であり、混入と考えられる。

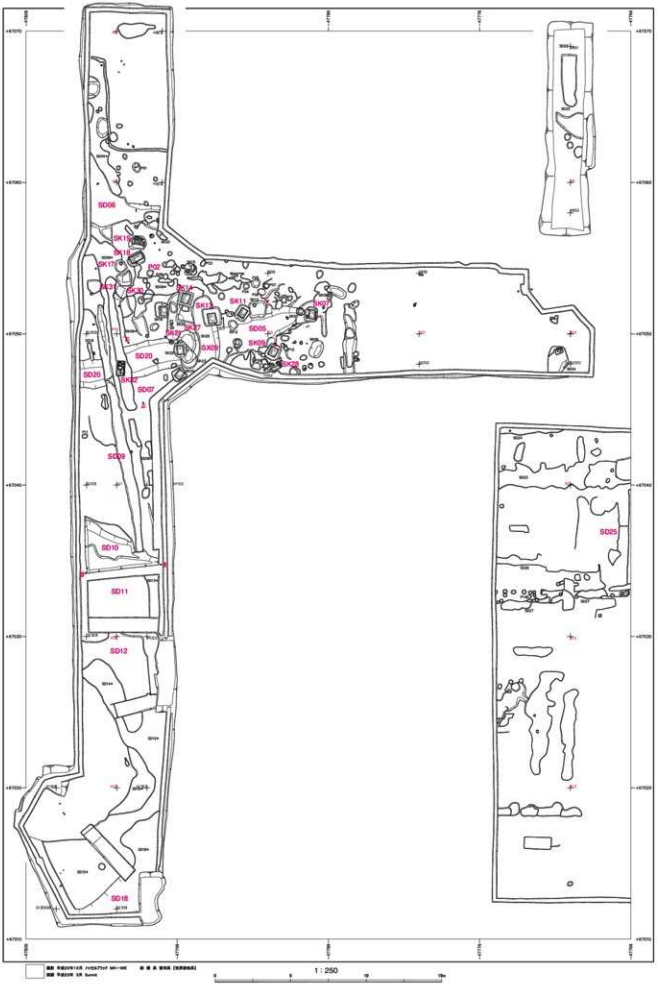
SD18（第56図）　覆土観察から近世・近代の川跡と考えられる、422・423の弥生時代末から古墳時代初頭頃の器台もしくは高坏の他、古墳時代前期頃の土器が出土している。

SD20（第54図）　372～376の弥生時代中期後半、古墳時代前期、9世紀頃の土器、須恵器などが出土している。

第4節　小結

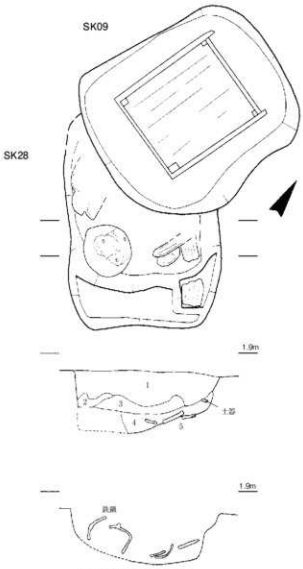
発掘調査では、調査区東側を流れる鞍月用水沿いで川を検出している。川からは弥生時代後半～古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代以降の遺物が出土しており、周辺に当該期の集落などが存在した可能性を感じさせる。しかしながら、建物跡などの具体的な遺構は検出されず、耕地整理などによる削平によって失われたのか、未調査範囲に含まれるのかは、調査の進展がないと明らかにならない。SD01、02周辺は複数の川が重複しており、徐々に流路が整備されて調査区に隣接する現在の鞍月用水へ姿を変えたものと考えられる。

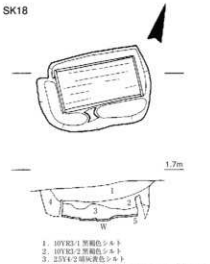
また、区画整理によって移転となった墓地跡からは近世の墓坑が複数検出された。出土遺物を伴わない墓坑が多いので、大まかな変遷となるが、概ね長方形木棺および早桶木棺など、SK18、19、28、30～32は近世、その他は近世末頃から近代にかけての墓坑と推定できる。特筆すべきはSK28、32にみられる鍋被り葬であり、東日本では認められるが、当地ではほとんど知られていない墓制である。

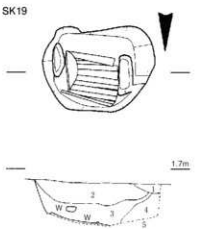


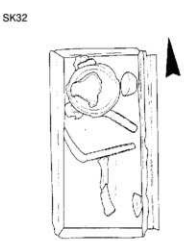
第24図　遺構全体図(1)〔S=1/250〕

第25図　遺構全体図(2)〔S=1/250〕

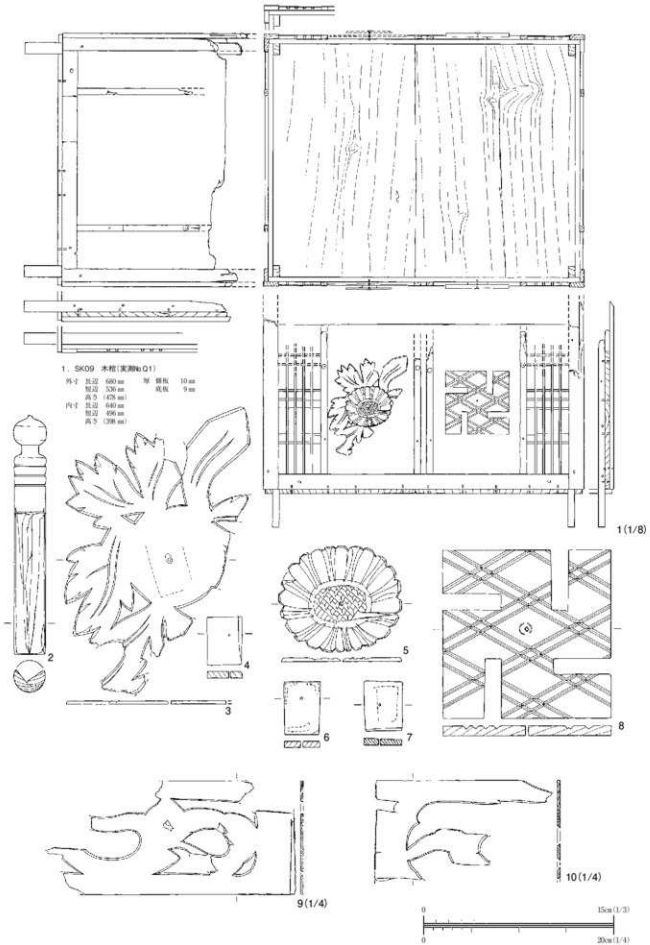




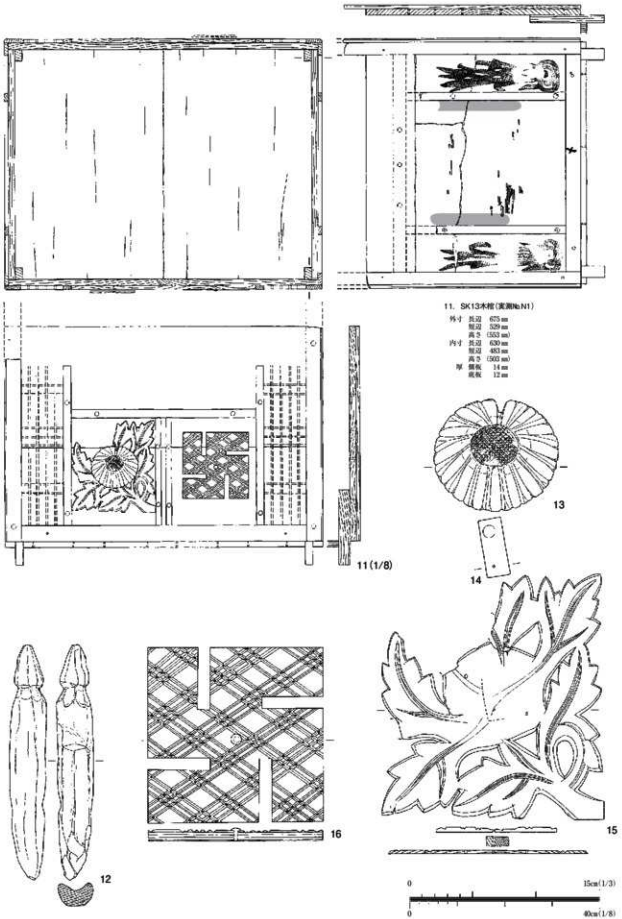




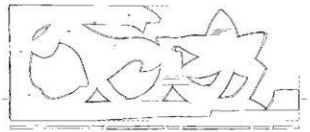
第26図　SK09・28、SK18、19、32〔S=1/40〕



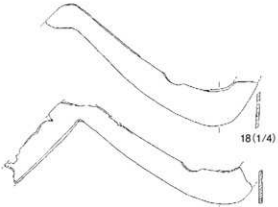
第27図　SK09 棺材〔S=1/3・4・8〕



第28図　SK13 棺材〔S=1/3・8〕



17(1/4)

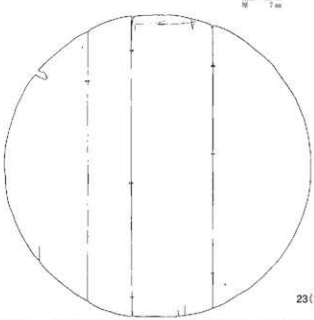


18(1/4)

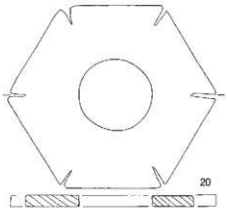
19(1/4)

23. SK19棺の蓋（実測No.ET101）

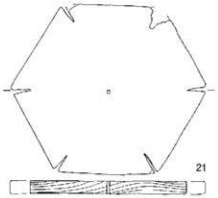
長径　652 ㎜
短径　634 ㎜
厚　　7 ㎜



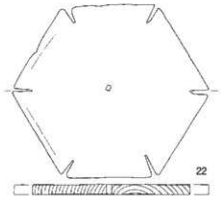
23(1/8)



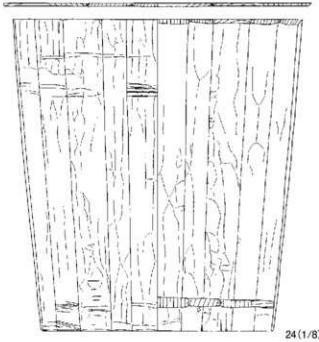
20



21



22

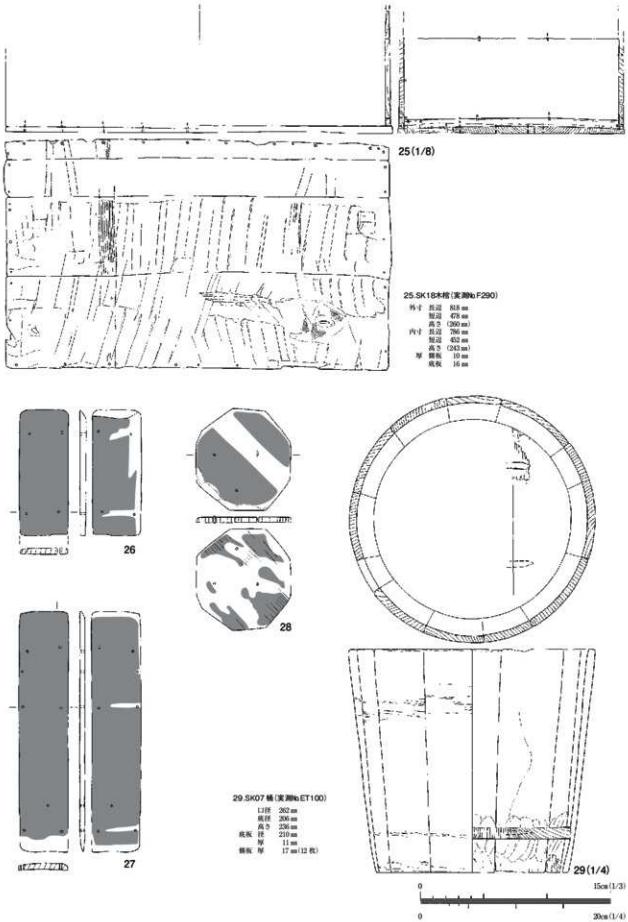


24(1/8)

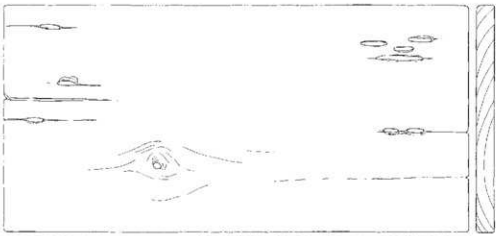
24. SK19棺（実測No.ET101）

口径	610 ㎜	底板　径	496 ㎜
底径	490 ㎜	厚	22 ㎜
高さ	664 ㎜	側板　厚	4 ㎜

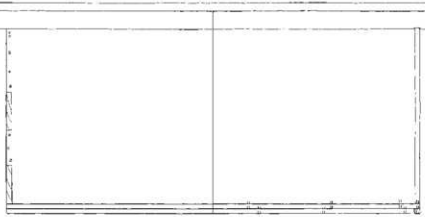
第29図　SK13（17）、14（18～22）、19（23、24）棺材〔S=1/3・4・8〕

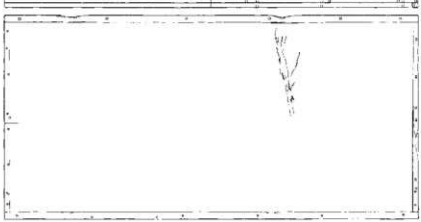


第30図　SK18 (25～28)、07 (29)棺材(S=1/3・4・8)

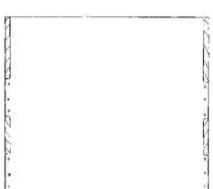


30





31



30.SK30蓋（実測No.M194）

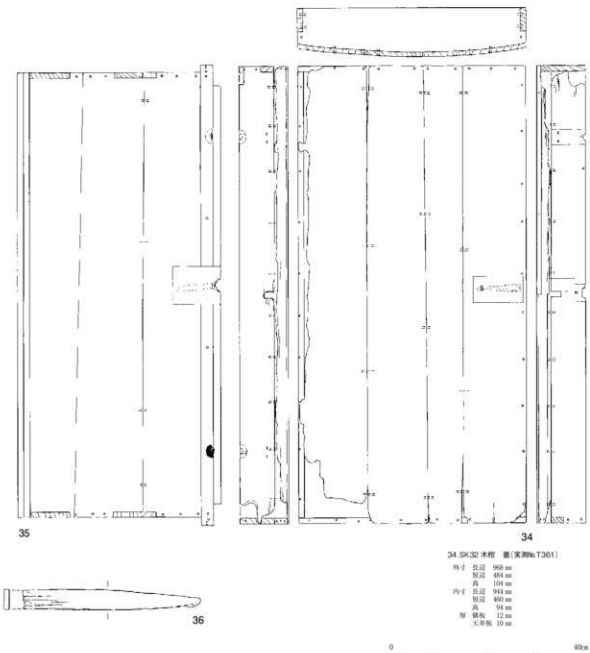
長辺	990 cm
短辺	480 cm
厚	38 cm

31.SK30 木棺（実測No.M194）

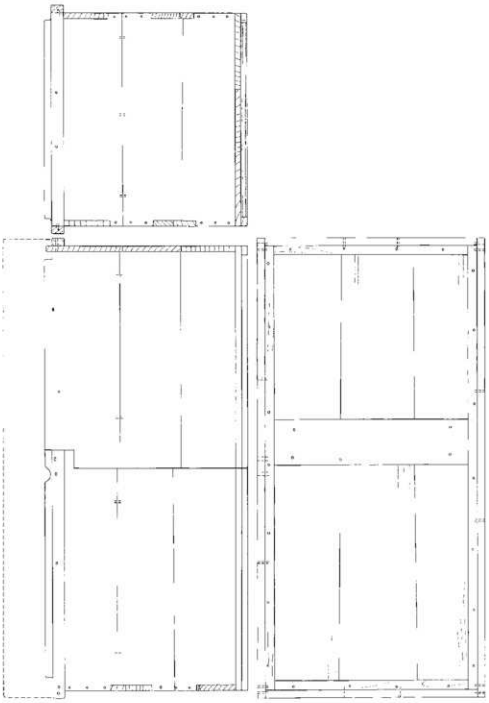
外寸	長辺	880 cm
	短辺	430 cm
	高さ	392 cm
内寸	長辺	860 cm
	短辺	410 cm
	高さ	370 cm
厚	側板	14 cm
	底板	10 cm

0　40cm

第31 図　SK30 棺材〔S=1 /8〕



第32図　SK32 棺材(1)〔S=1/8〕



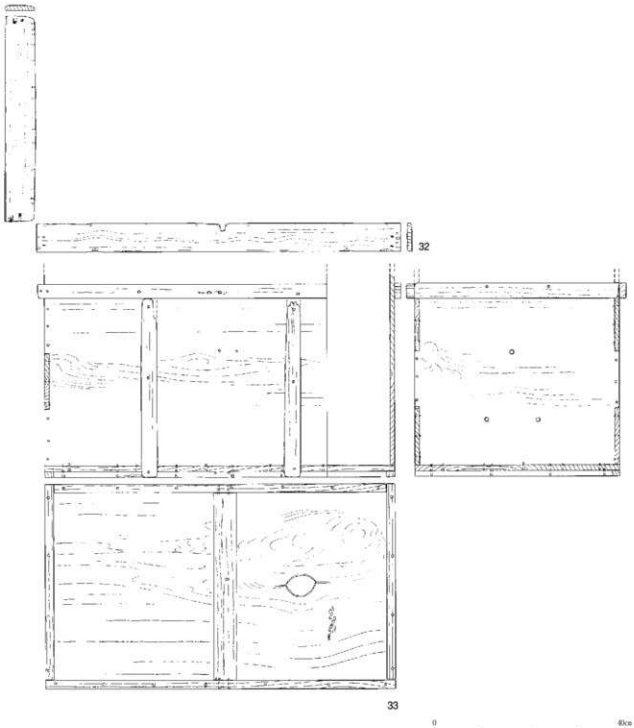
35

35.SK32木棺（実測№T361）

外寸　長辺　976 mm
　　短辺　482 mm
　　高さ　430 mm
内寸　長辺　916 mm
　　短辺　428 mm
　　高さ　405 mm
厚　側板　12 mm
　　底板　13 mm

0　40cm

第33図　SK32 棺材(2)〔S=1/8〕



32. SK31 木棺蓋〔実測No.S259〕

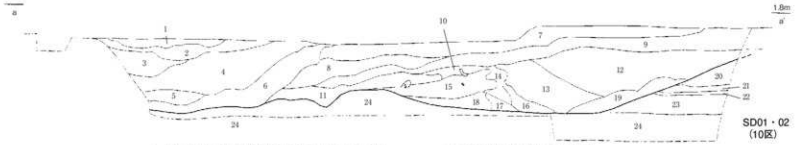
外寸	長辺	772 mm
	短辺	456 mm
	高さ	(64 mm)
内寸	長辺	750 mm
	短辺	436 mm
	高さ	64 mm
厚	横板	11 mm

※天井板無し

33.SK31 木棺〔実測No.S259〕

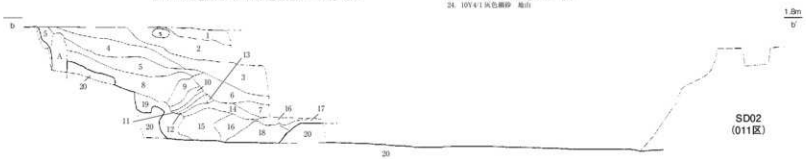
外寸	長辺	770 mm
	短辺	464 mm
	高さ	(432 mm)
内寸	長辺	720 mm
	短辺	412 mm
	高さ	(408 mm)
厚	横板	10 mm
	底板	12 mm

第34図　SK31 棺材〔S=1/8〕



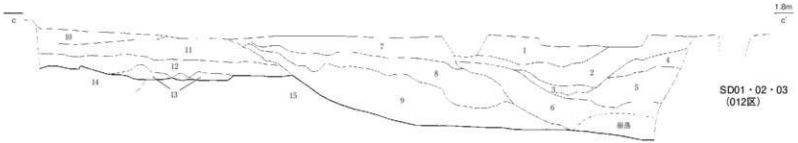
SD01・02
(10区)

1. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（10YR7/2 に赤い黄橙色砂質土ブロック混） SD01
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 SD01
3. 10GY5/1 緑灰色砂質（10YR4/1 褐灰色粘質土ブロック混多混） SD01
4. 10YR3/1 黒褐色粘質土 SD01
5. 10YR3/1 黒褐色シルト SD01
6. 10YR3/1 黒褐色粘質土＋2.5Y4/2 暗灰黄色中粒砂（5 層より粗色強い） SD01
7. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 SD02
8. 10YR3/1 黒褐色シルト（10YR4/1 褐灰色細砂 炭化物混） SD02
9. 7.5YR3/4 暗褐色砂質土 SD02
10. 2.5Y4/1 黄灰色細砂 SD02
11. 2.5Y3/1 黒褐色シルト（2.5Y4/1 黄灰色細砂混） SD02
12. 2.5Y2/1 黒色粘質土（2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロック少混） SD02
13. 2.5Y2/1 黒色粘質土（12 層より暗い） SD02
14. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（2.5Y5/3 黄褐色粘質土 13,15,16 層がマーブル状に混） SD02
15. 2.5Y3/1 黒褐色砂質土（シルト質） SD02
16. 2.5Y2/1 黒色粘質土（13 層より暗い 2.5Y5/3 黄褐色粘質土混） SD02
17. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（2.5Y5/3 黄褐色粘質土 13,15,16 層がマーブル状に混） SD02
＋2.5Y3/1 黒褐色粘質土＋ 2.5Y3/2 黒褐色細砂 SD02
18. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土＋2.5Y3/2 黒褐色細砂 SD02
19. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土（2.5Y5/3 黄褐色粘質土ブロック混） SD02
20. 7.5GY5/1 緑灰色細砂 地山
21. 5BG5/1 青灰色細砂＋7.5GY5/1 緑灰色シルト 地山
22. 10G5/1 緑灰色シルト 地山
23. 5GY6/1 緑オリーブ灰色シルト 地山
24. 10Y4/1 灰色細砂 地山



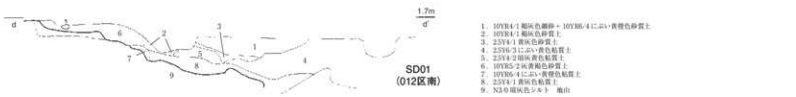
SD02
(011区)

1. 2.5Y7/4 浅黄色砂質土（2 層ブロック混） 上層
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 上層
3. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 2 層
4. 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂 3 層
5. 2.5Y6/3 にぶい黄色細砂＋2.5Y3.5/1 黒褐色粘質土 3 層
6. 2.5Y2.5/1 黒色シルト（2.5Y2/1 黒色シルト（植物質）ブロック混） 3 層
7. 2.5Y2.5/1 黒色シルト（2.5Y2/1 黒色シルト（植物質）ブロック混）＋2.5Y3/2 黒褐色細砂 3 層
8. 10YR3/1 黒褐色粘質土（シルト質）
9. 10YR2/1 黒色シルト（植物質）
10. 2.5Y3/1 黒褐色シルト＋2.5Y5/1 黄灰色細砂
11. 10YR2/1 黒色シルト（9 層と類似）
12. 2.5Y5/2 黒褐色シルト
13. 5GY5/1 オリーブ灰色細砂
14. 2.5Y3/1 黒褐色シルト（2.5Y2/1 黒色シルト（植物質）ブロック，2.5Y6/1 黄灰色シルトブロック混）
15. 2.5Y3/1 黒褐色シルト（14 層より暗い）
16. 5BG6/1 青灰色粘質土＋2.5Y3/1 黒褐色シルト
17. 2.5Y3/1 黒褐色シルト＋10BG6/1 青灰色細砂
18. 2.5Y3/1 黒褐色シルト（5BG6/1 青灰色粘質土ブロック混）
19. 10BG6/1 青灰色細砂＋5BG6/1 青灰色粘質土（8 層，15 層混）
20. 10BG6/1 青灰色細砂 地山



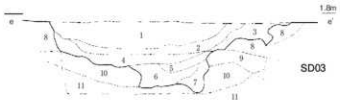
SD01・02・03
(012区)

1. 10YR4/1 褐灰色粘質土（上半分は 2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土混） SD01
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土＋2.5Y5/1 黄灰色砂 SD01
3. 10Y5/1 灰色細砂＋ 10YR4/1 褐灰色シルト SD01
4. 10Y5/1 灰色細砂＋ 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 SD01
5. 5GY5/1 オリーブ灰色粘質土
6. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 SD01
7. 10YR4/1 褐灰色砂質土 上層 SD02
8. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土（下層に 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土帯状に混） 中層 SD02
9. 10YR2/1 黒色粘質土（2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土ブロック混） 下層 SD02
10. 10YR3/1 黒褐色粘質土 SD03
11. 10YR3/2 黒褐色細砂 SD03
12. 10YR3/1 黒褐色シルト SD03
13. 10YR3/1 黒褐色シルト＋2.5Y6/2 灰黄色粘質土 SD03
14. 5Y5/1 灰色粘質土 地山
15. 10G5/1 緑灰色細砂 地山



SD01
(012区南)

1. 10YR4/1 褐灰色細砂＋10YR6/4 にぶい黄橙色砂質土
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土
3. 2.5Y4/1 黄灰色細砂土
4. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土
6. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
7. 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土
8. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
9. N3.0 暗灰色シルト 地山

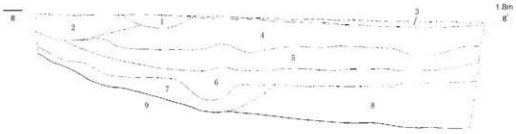


SD03

1. 10YR3/1 黒褐色粘質土
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂
3. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土
4. 2.5Y3/1 黒褐色粘質土
5. 2.5Y6/1 黄灰色粘質土（9 層，6 層混）
6. 2.5Y3/1 黒褐色シルト（11 層混）
7. 2.5Y2.5/1 黒色シルト（10 層混）
8. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土（シルト質） 地山
9. 2.5Y6/2 灰黄色粘質土（シルト質）＋ 10YR3/1 黒褐色粘質土 地山
10. 2.5Y6/1 黄灰色粘質土（2.5Y5/3 黄褐色中粒砂混） 地山
11. 2.5Y5/4 黄褐色中粒砂 地山

SD05

1. 10YR3/3 暗褐色粘質土 SD05
2. 10YR2/2 黒褐色粘質土 SD05
3. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 SD05
4. 10YR2/1 黒褐色粘質土 SD05
5. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
6. 10YR3/4 褐色粘質土
7. 2.5Y6/2 灰黄色シルト 地山



SD10

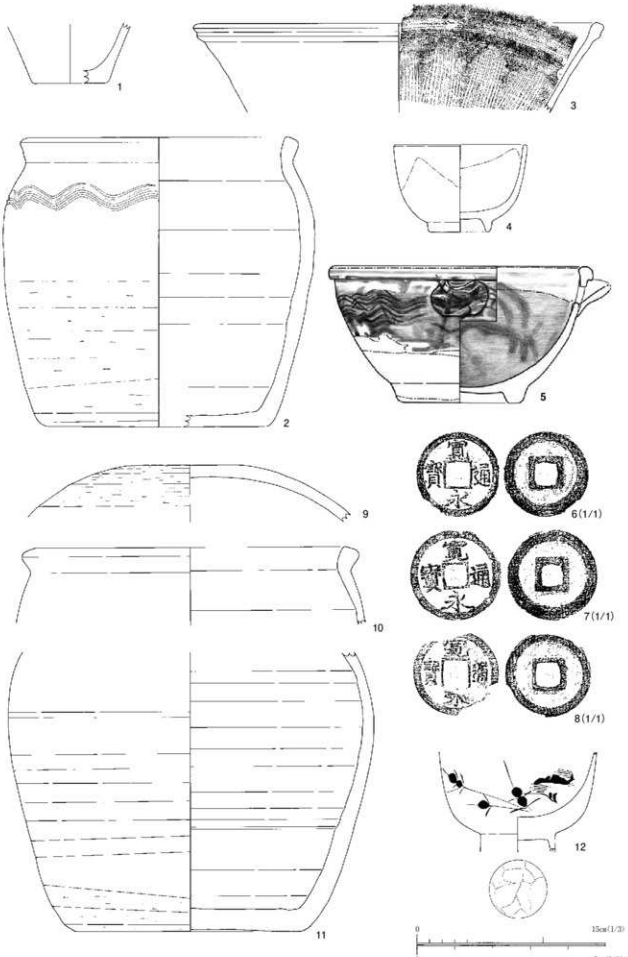
1. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
2. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土
4. 2.5Y2/1 黒褐色シルト
5. 10YR3/2 黒褐色シルト（有機物層）
6. 2.5Y3/2 黒褐色シルト
7. 5Y2/1 黒色シルト
8. 2.5Y3/1 黒褐色中粒砂（シルト混）
9. 7.5Y6/1 灰色細砂 地山

SD20

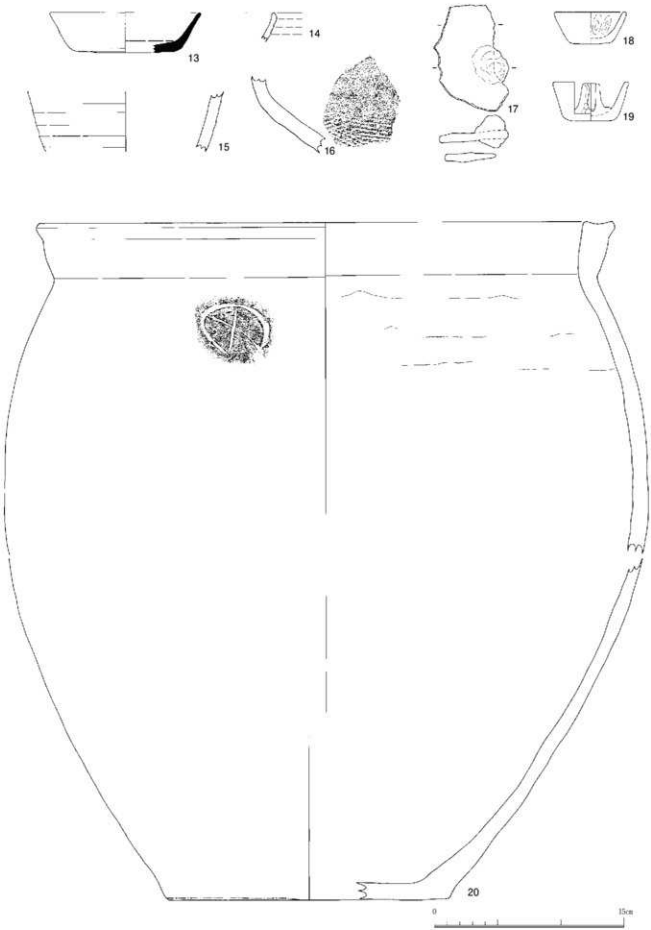
1. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土
2. 10YR2.5/1 黒褐色粘質土
3. 10YR7/1 黄色シルト
4. 2.5Y3/1 黒褐色シルト
5. 2.5Y2/1 黒色シルト
6. 2.5Y3/2 黒褐色シルト
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
8. 2.5Y2.5/1 黒色シルト（11 層混）
9. 2.5Y2.5/1 黒色シルト＋ 10Y6/1 灰色細砂
10. 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
11. 10Y6/1 灰色細砂 地山

0 2m

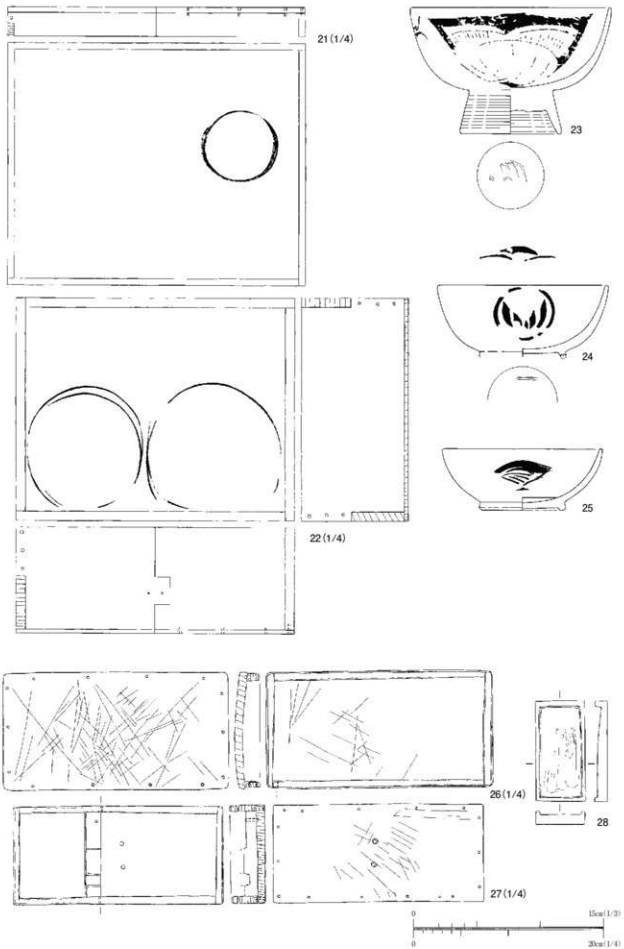
第35図 SD01・02、03、05、10、20〔S=1/40〕



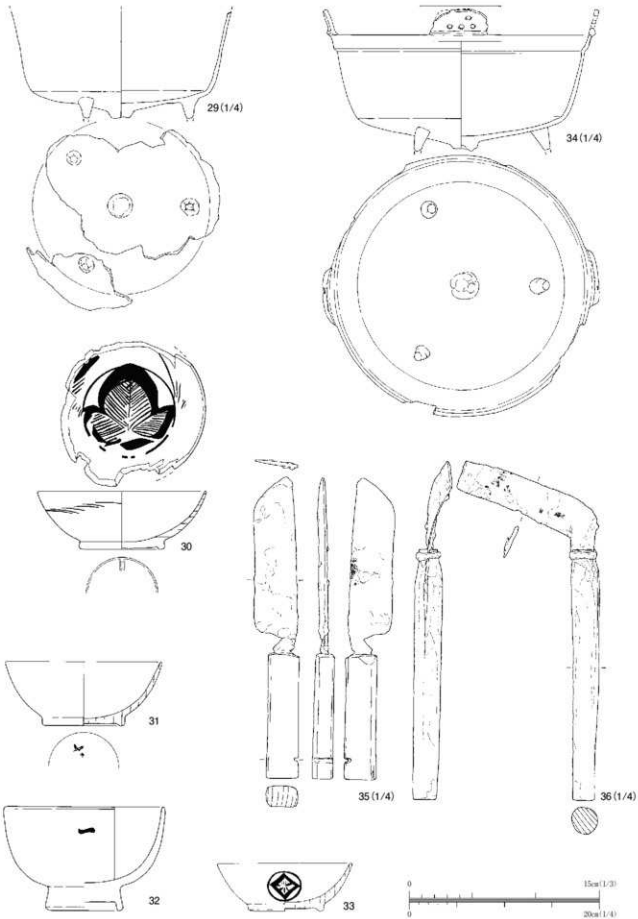
第36図　P02 (1)、SK07 (2) 、19 (3～8)、21 (9～11)、18 (12) 出土遺物〔S=1/1・3〕



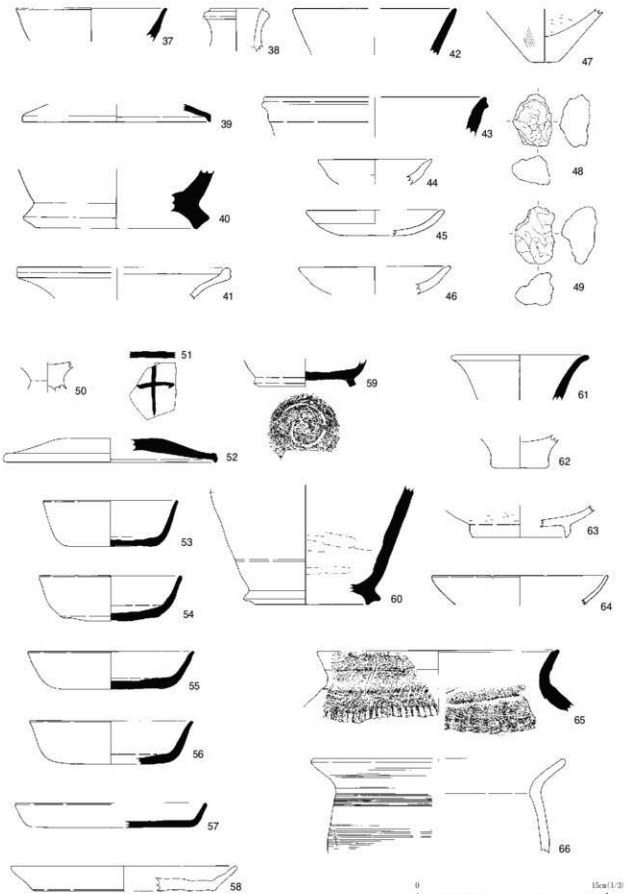
第37図　SK02 (13～16)、11 (17)、14 (18、19)、17 (20)出土遺物〔S=1/3〕



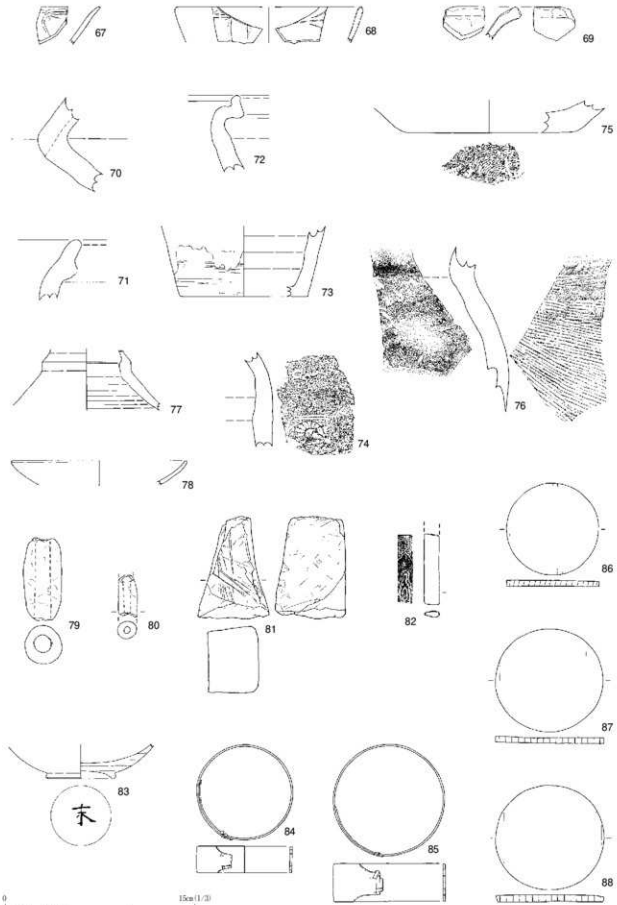
第38図　SK27 出土遺物〔S=1/3・4〕



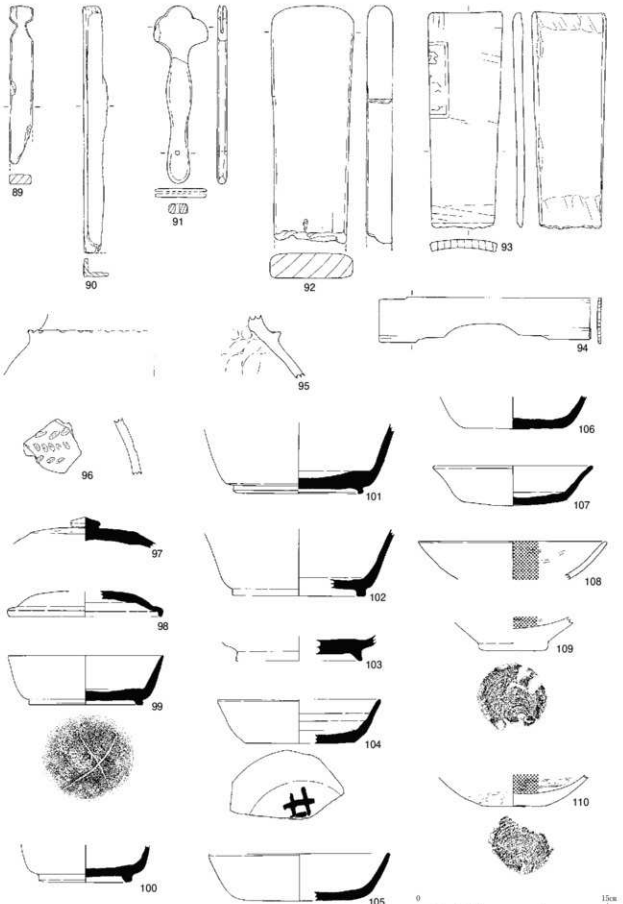
第39図　SK28 (29、30)、32 (31～36)出土遺物〔S=1/3・4〕



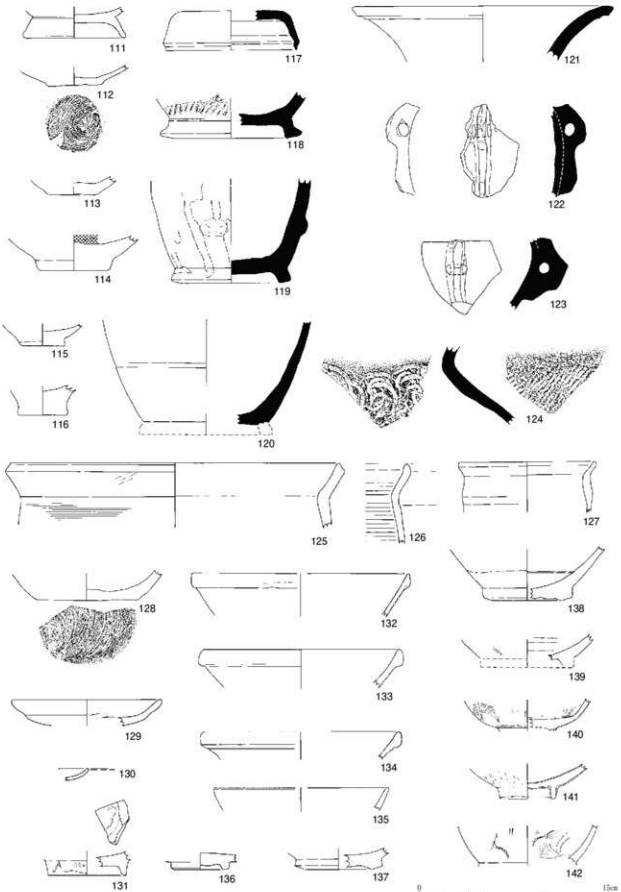
第40図　SX01（37、38）、03（39～41）、05（42～49）、SD01（50～66）出土遺物〔S=1/3〕



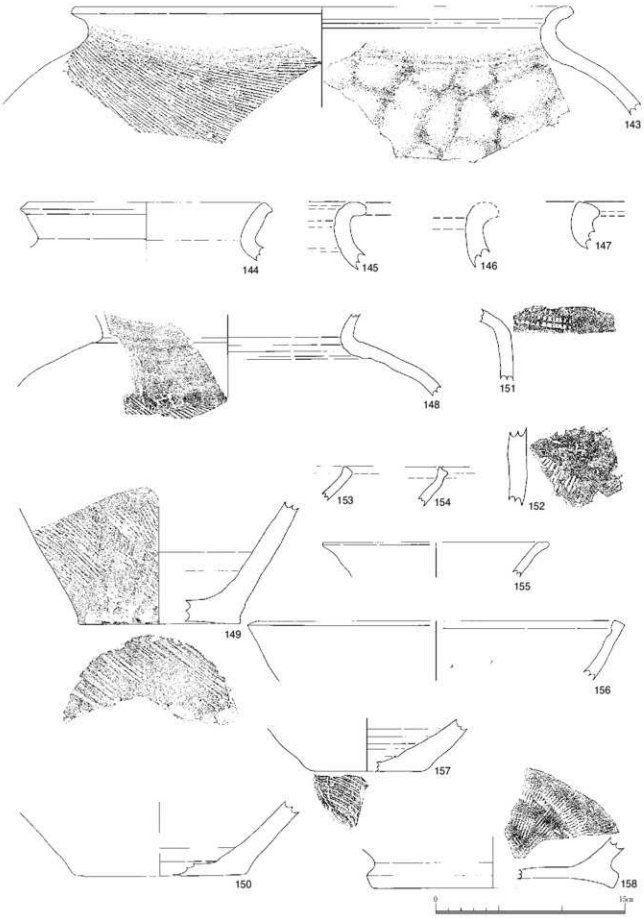
第41図　SD01 出土遺物〔S=1/3〕



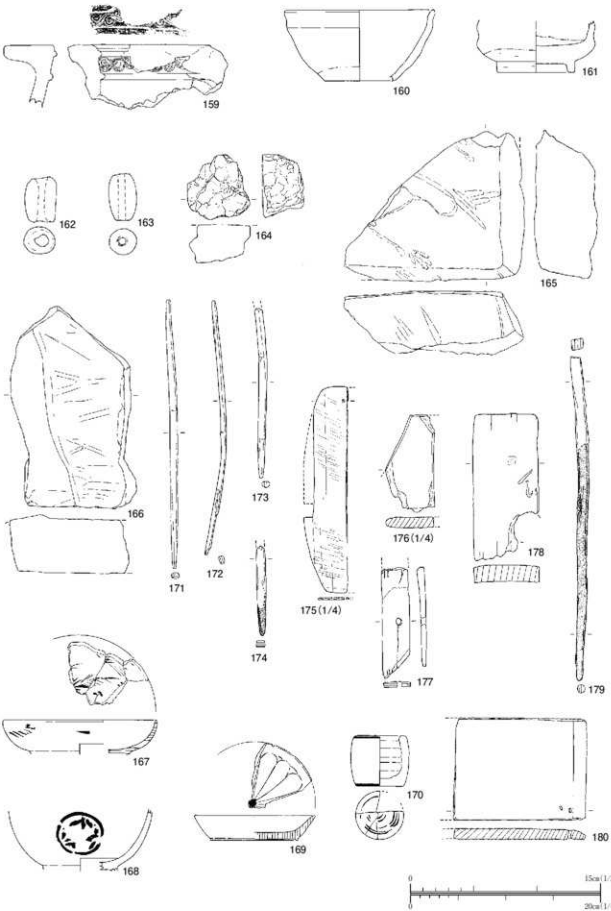
第42図　SD01（89～94）、SD01・02（95～110）出土遺物〔S=1/3〕



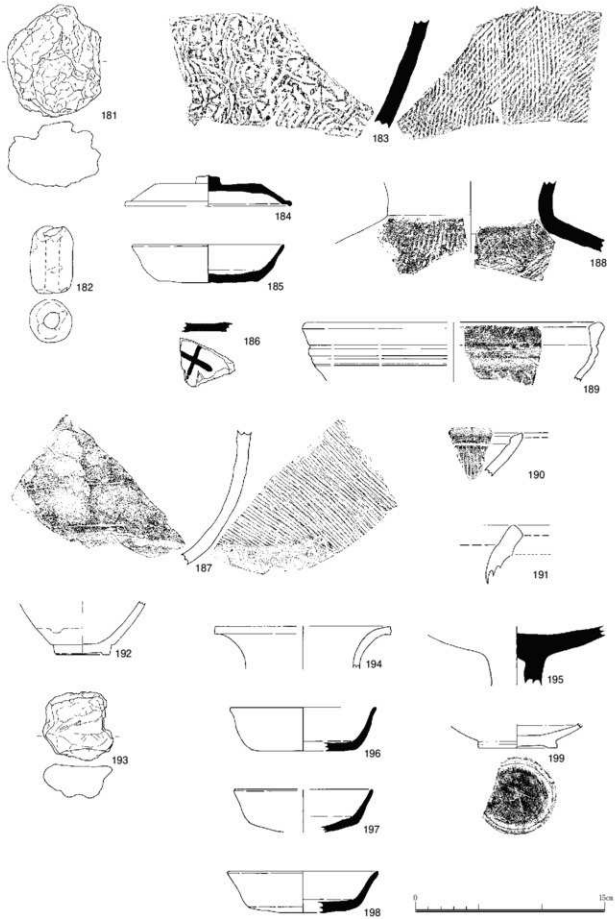
第43図　SD01・02出土遺物(1)〔S=1/3〕



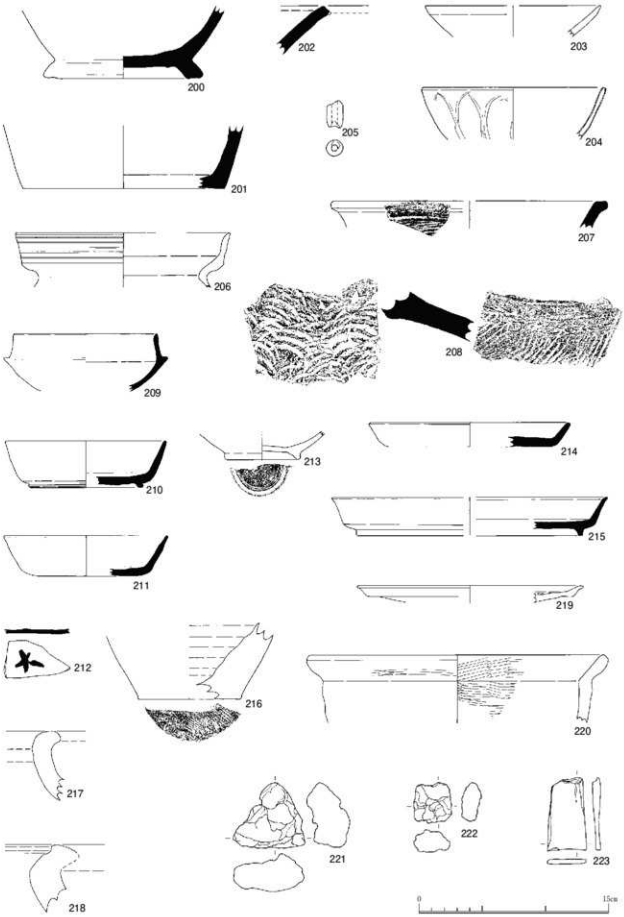
第44図　SD01・02出土遺物(2)〔S=1/3〕



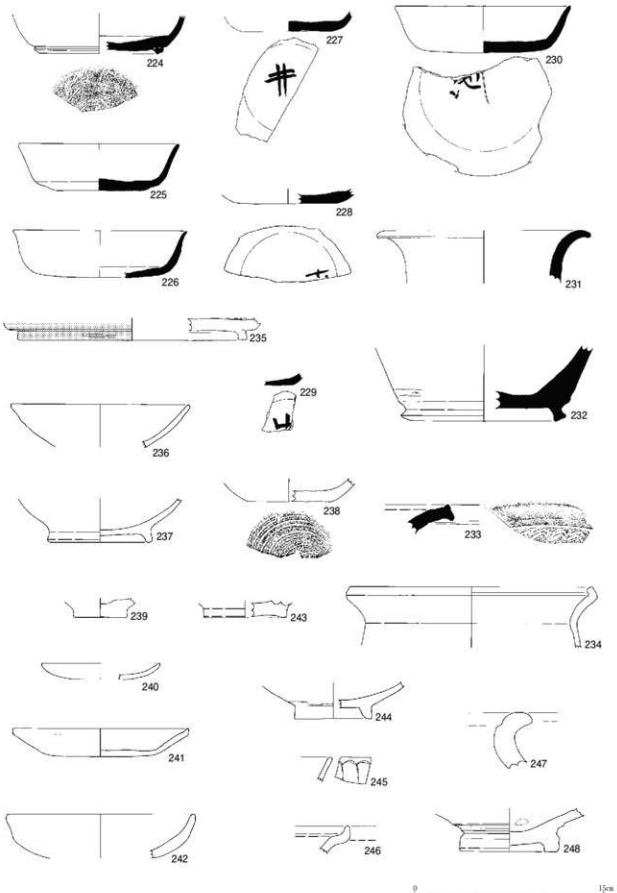
第45図　SD01・02出土遺物(3)〔S=1/3・4〕



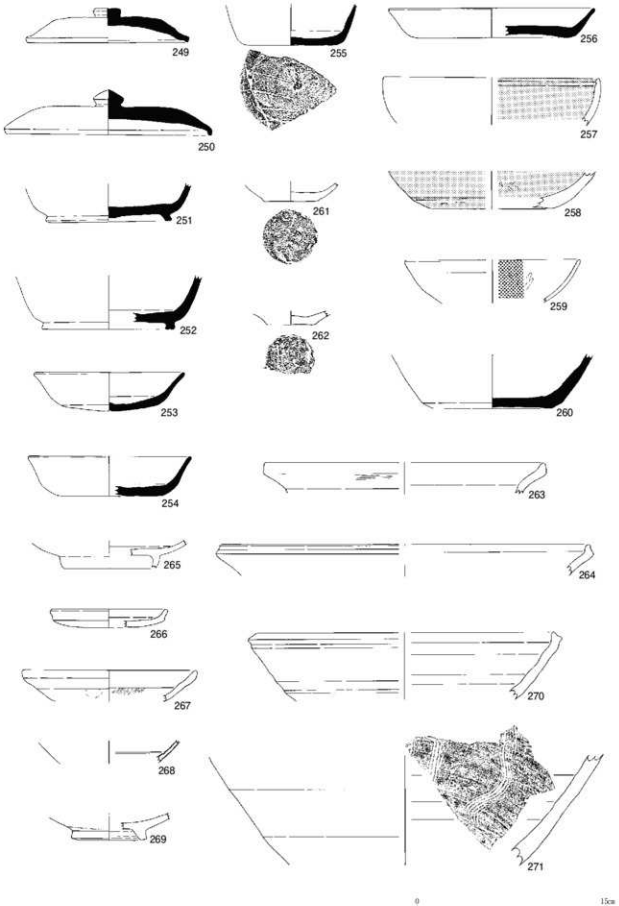
第46図　SD02 出土遺物(1)〔S=1/3〕



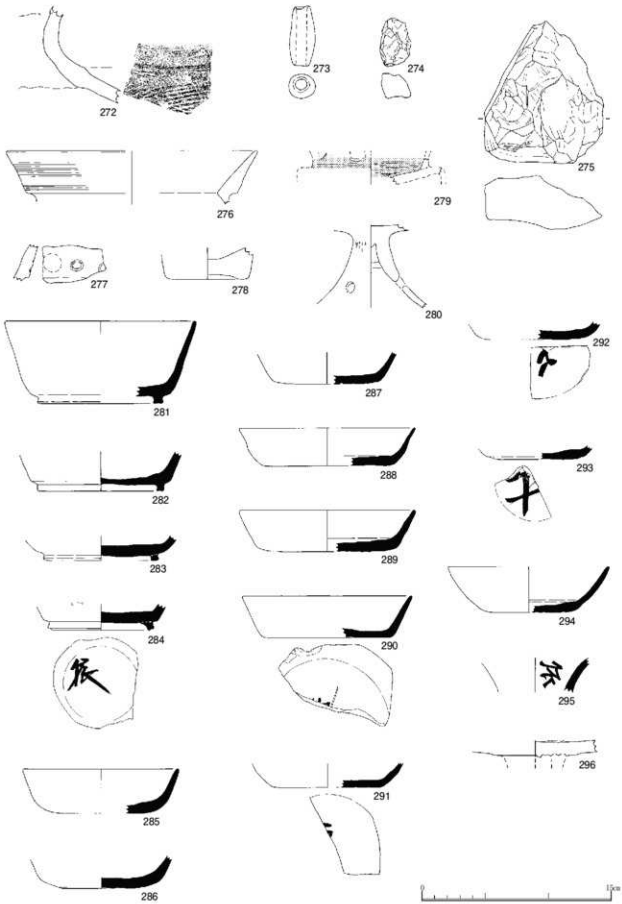
第47図　SD02 出土遺物(2)〔S=1/3〕



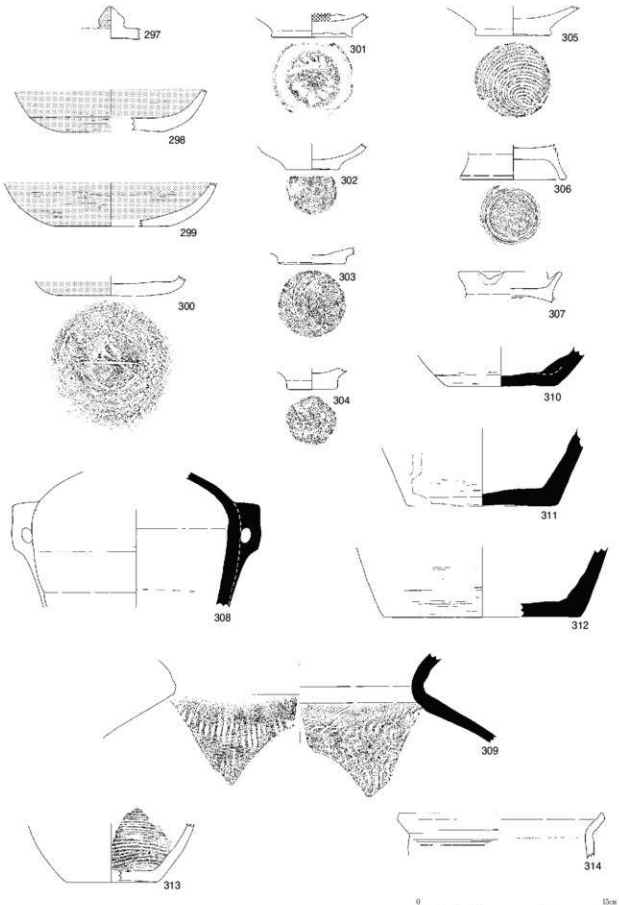
第48図　SD02 出土遺物(3)〔S=1/3〕



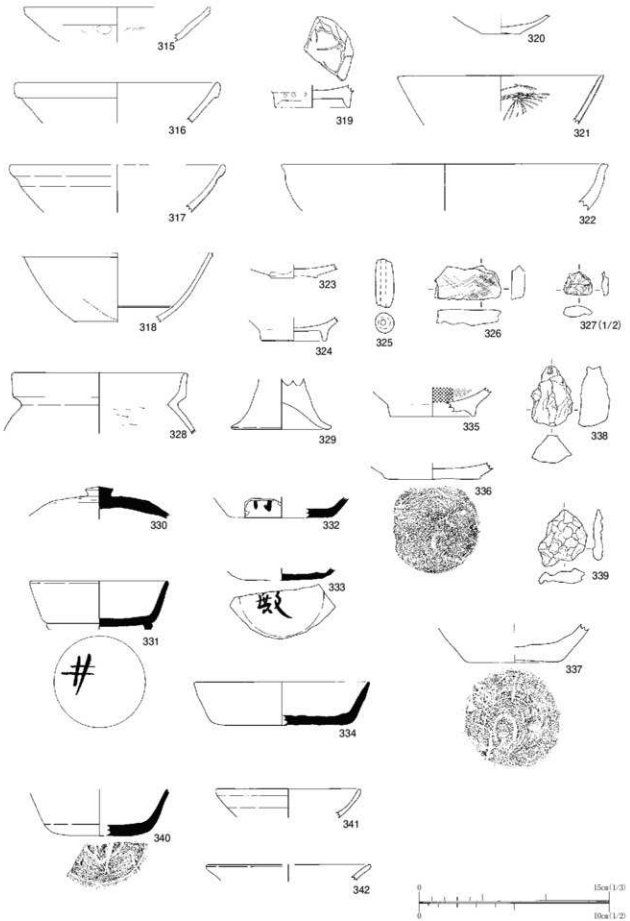
第49図　SD02 出土遺物(4)〔S=1/3〕



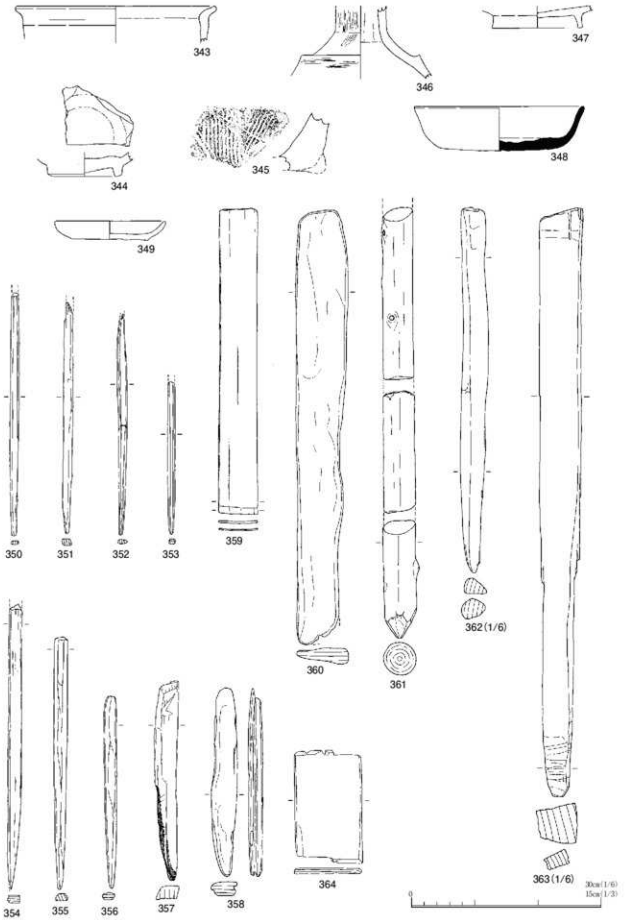
第50図　SD02出土遺物(5)〔S=1/3〕



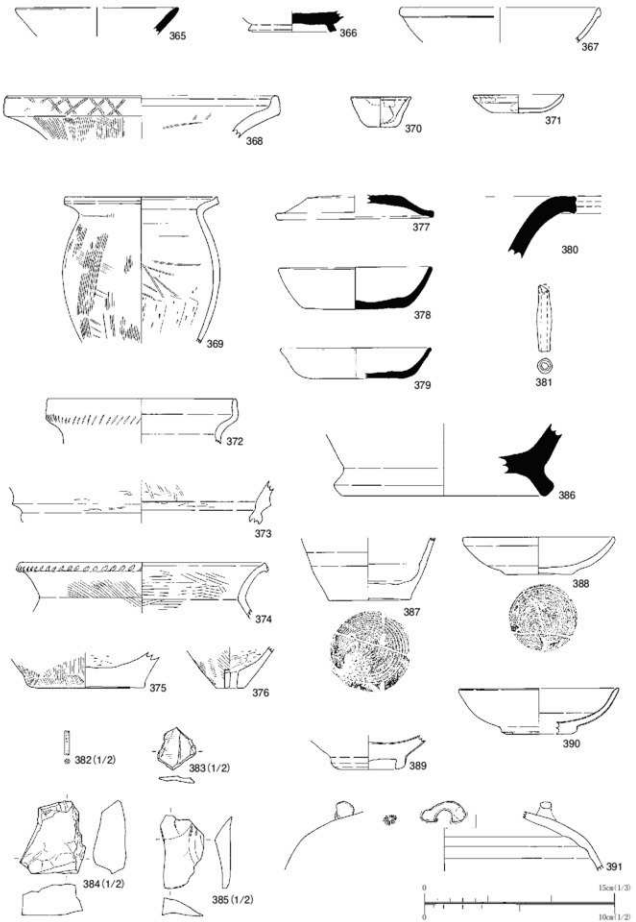
第51図　SD02出土遺物(6)〔S=1/3〕



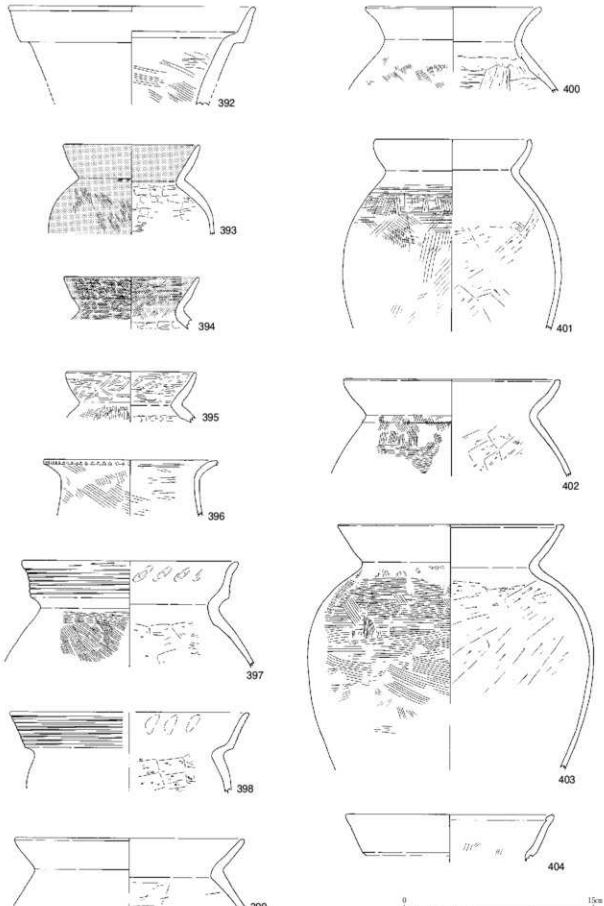
第52図　SD02出土遺物(7)〔S=1/2・3〕



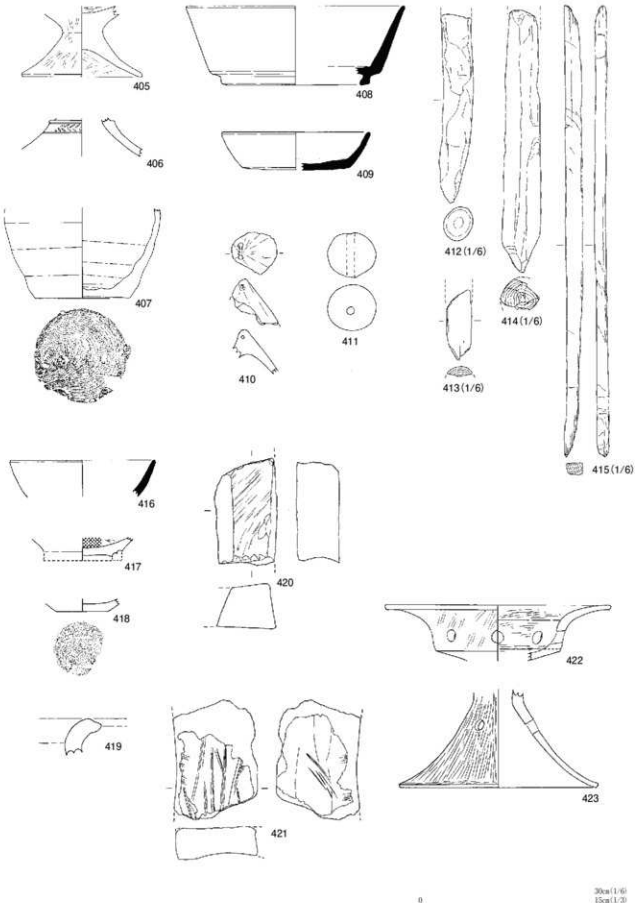
第53図　SD02出土遺物(8)〔S=1/3・6〕



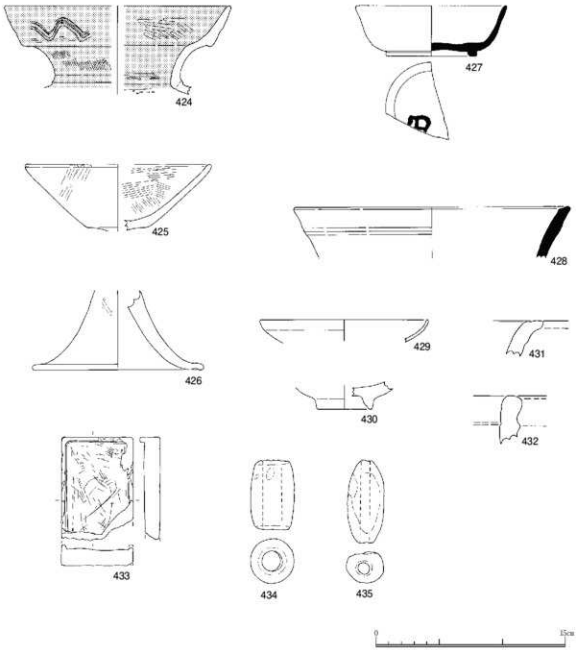
第54図　SD03（365～367）、05（368、369）、06（370）、07（371）、20（372～385）、09（386～391）出土遺物〔S=1/2・3〕



第55図　SD10出土遺物〔S=1/3〕



第56図　SD10（405～415）、02（416～420）、19・11・12（421）、18（422、423）出土遺物〔S=1/3・6〕



第57図　遺構外出土遺物〔S=1/3〕

第９表　棺材計測表(1)

（単位：mm）

No	遺構	地区	種別	長	幅	厚	被種	木取	備考	実測No
2	SK09	J10	棺蓋 棒状	190	25	25		芯去	北東外	G2
3	SK09	J10	棺蓋 葉	207	126	3				G1
4	SK09	J10	棺蓋 板	38	28	5		柾目	葉と側板の間	G1
5	SK09	J10	棺蓋 花	84	98	3				G1
6	SK09	J10	棺蓋 板	42	29	5		柾目	花と葉の間	G1
7	SK09	J10	棺蓋 板	40	30	5		柾目	花と側板の間	G1
8	SK09	J10	棺蓋 花	133	133	8		柾目		G1
9	SK09	J10	棺蓋 板状	(267)	120	3		柾目	底板の下	G3
10	SK09	J10	棺蓋 板状	(187)	106	3		柾目	底板の下	G4
12	SK13	I9	棺蓋 棒状	187	29	26	広？	芯去		T363
13	SK13	I9	棺蓋 花	89	99	4			側板東	F291
14	SK13	I9	棺蓋 板	46	19	8		柾目	側板東花と葉の間	F292

第９表　棺材計測表(2)

（単位：mm）

No	遺構	地区	種別	長	幅	厚	被種	木取	備考	実測No
15	SK13	I9	棺蓋 葉	193	175	3		柾目	側板東	F293
16	SK13	I9	棺蓋 花	139	139	9		柾目		N2
17	SK13	I9	棺蓋 板状	307	123	3			底板の下	S260
18	SK14	I9	棺蓋	(230)	39	3		柾目		E108
19	SK14	I9	棺蓋	(264)	35	4		柾目		E109
20	SK14	I9	棺蓋	146	165	9		柾目		E102
21	SK14	I9	棺蓋	129	155	10		柾目		E103
22	SK14	I9	棺蓋	137	151	8		柾目		E104
26	SK18	I9	棺蓋	(100)	39	5		柾目	底板の下	E106
27	SK18	I9	棺蓋	192	39	4		柾目	底板の下	E105
28	SK18	I9	棺蓋	80	71	4			底板の下	E107
36	SK32	I10	棺蓋	(378)	43	11			木棺の中	T361

第10表　土器・陶磁器・土製品観察表(1)

（単位：mm）

No	遺構	地区	種類	器種	口(長)	底(幅)	高(厚さ)	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調(釉色調)	内面色調(素地色調)	糖	砂	骨	赤	焼成	備考	実測No
1	P02	I9	土師器	壷b		60		マメツ	マメツ	マメツ	淡橙褐	淡灰褐		少	多		並		T559
2	SK07	J9	土師器	壷	202	177	23	ナデ-ケズリ後ナデ	ナデ	ケズリ	淡橙褐	淡橙褐	少	並	並	並	並	服方	T557
3	SK19	I9	陶器	すり鉢	316			ナデ	ナデ-櫛目		茶	淡灰褐		少			並	内外面に鉄泥	F486
4	SK19	I9	陶器	碗	102	50	69	灰釉-白泥	灰釉-白泥	灰釉	暗灰	淡灰褐					並		F487
5	SK19	I9	陶器	片口鉢	208	50	19	白泥-透明釉-鉄泥	透明釉-白泥		白-透明-暗赤茶	赤褐色					並		F491
9	SK21	I10	土師器	皿				ケズリ後ナデ-ナデ	ナデ		淡橙	淡橙褐		並		少	並		T560
10	SK21	I10	土師器	壷	246			ナデ	ナデ		淡橙褐	淡黄褐		並	並		並		T558
11	SK21	I10	土師器	壷		179		ナデ-ケズリ	ナデ	回転糸切り後ケズリ	淡橙褐	淡橙褐	少	並	並		並		T559
13	SK02	O10	須恵器	無台坏	118	82	32	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰白	灰白		少			並		T438
14	SK02	O10	白磁	碗				灰釉	灰釉		淡灰	灰白					並		T441
15	SK02	O10	陶器	鉢				ナデ-鉄釉	ナデ		暗茶-黒	灰					並		T440
16	SK02	O10	珠洲	壺				タタキ	当具		灰白	灰		並		少	並		T439
18	SK14	I9	土師器	無階	54	32	16	ナデ	ナデ	ナデ	暗灰	暗灰		並			並		T554
19	SK14	I9	土師器	無階	58	32	31	ナデ	ナデ	ナデ	淡橙	淡橙		並		少	並		T555
20	SK17	I9	陶器	壺	455	225		鉄泥	鉄泥		茶	橙褐		並			並		F484
37	SX01	N/O10	須恵器	坏	118			ナデ	ナデ		灰白	灰白	少	並			並		T436
38	SX01	N/O10	瀬戸	瓶子類	42			ナデ	ナデ		灰	淡褐灰		少			並		T437
39	SX03	M/N10	須恵器	皿	148			ナデ	ナデ		灰	灰白		多			並		T443
40	SX03	M/N10	須恵器	壷-瓶		126		ナデ	ナデ		灰	灰白	少	並			並		T444
41	SX03	M/N10	土師器	壷				マメツ	ナデ		淡橙褐	淡橙褐		少		少	並		T445
42	SX05	I9	須恵器	坏				ナデ	ナデ		灰	灰白		並			並		T566
43	SX05	I9	須恵器	壷-瓶				ナデ	ナデ		暗灰	暗灰		並			並		T564
44	SX05	I9	土師器	皿	88			ヨコナデ-ナデ	ナデ		灰白	灰白		少			並		T565
45	SX05	I9	土師器	皿	108	24	20	ヨコナデ-ナデ	ナデ		淡橙褐	淡橙褐		少		少	並		T561
46	SX05	I9	土師器	皿	118			ヨコナデョ-ナデ	ナデ		淡褐	淡褐		少		並	並		T562
47	SX05	I9	土師器	壷		22		ハケ後ナデ	ケズリ後ナデ	ナデ	淡褐	淡灰褐	並	並		並	並		T563
48	SX05	I9	土製品	粘土塊	42	30	23				淡灰褐			少		少	並	15.41g	T568
49	SX05	I9	土製品	粘土塊	45	30	26				淡灰褐			少	並	少	並	17.86g	T567
50	SD01	O12	須恵器	高坏				ナデ	マメツ		黒灰	黒灰		並		並	並	中下層	F370
51	SD01	O11	須恵器	坏底部					ナデ	ヘラ切り	灰	灰		少			並	中下層書書	T463
52	SD01	O11	須恵器	皿	167	86		ナデ	ナデ		暗灰	暗灰	多	並			並		F379
53	SD01	O11	須恵器	無台坏	105	74	37	ナデ	ナデ	ヘラ切りヘラ記ンナデ	暗灰	暗灰	少	並			並		F381
54	SD01	O11	須恵器	無台坏	111	80	36	ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	灰	並	並			並		F383
55	SD01	O11	須恵器	無台坏	130	84	30	ナデ	ナデ	ヘラ切り-ナデ	灰	灰白		並			並	中下層	T462
56	SD01	O10	須恵器	無台坏	128	90	34	ナデ	ナデ	ヘラ切り-ナデ	灰	灰	少	並			並	中下層北中	T460
57	SD01	O11	須恵器	無台盤	150	135	20	ナデ	ナデ	ヘラ切りヘラ記ンナデ	暗赤灰	暗灰	少	並			並		F382
58	SD01	O11	土師器	皿	178	146	20	ナデ	ナデ	ヘラ切り-ナデ	淡橙褐	淡橙褐	少		少	少	並	中下層	T453
59	SD01	O11	須恵器	瓶b		81		ナデ	ナデ	ヘラ切り	暗灰	灰	並				並		F380
60	SD01	O11	須恵器	壷-瓶		100		ナデ	ナデ	ナデ	暗灰	灰白	多	多			並	中下層北中	T465
61	SD01	O13	須恵器	甑類	105			ナデ	ナデ		淡灰	淡灰		並			並		F377
62	SD01	O12	土師器	粘質台部		45		ナデ	ナデ	マメツ	淡黄灰褐	淡黄灰褐		多			並	中下層西カ	T368
63	SD01	O12	灰釉	碗		74		ケズリ-ナデ	ナデ	ヘラ切り-ナデ		灰白					並	中下層	T454
64	SD01	O12	緑釉	碗	138			緑釉	緑釉		緑灰	灰					並	中下層	T458
65	SD01	O12	須恵器	壷	190			ナデ-タタキ	ナデ-当具		暗灰	暗灰		多			並	中下層	T469
66	SD01	O10	土師器	壷				ナデ-カキメ	ナデ		淡黄灰褐	淡灰褐	並	並			並	中下層北中	F367
67	SD01	O11	青磁	碗				青磁釉	青磁釉		淡茶灰	灰					並	龍泉窯系	F378
68	SD01	O12	青磁	碗				青磁釉	青磁釉		淡緑青	灰白					並		F373
69	SD01	O12	青磁	盤				青磁釉	青磁釉		緑灰	淡灰					並		F376
70	SD01	O12	珠洲	壺				ナデ	ナデ		暗灰	灰	並	並			並	中下層	T467
71	SD01	O12	越前	壺				ナデ	ナデ		橙褐	橙褐	並	多			並	中下層	T466
72	SD01	O11	加賀	壺				ナデ	ナデ		灰白	灰白	少	並		少	並	中下層	T468
73	SD01	O11	加賀	壺		102		ケズリ	ナデ	ナデ	淡茶灰	淡茶灰	少	少			並	中下層	T456
74	SD01	O11	加賀	壺				ナデ-押印	ナデ		淡茶灰	淡茶灰		多		少	並	中下層	T455
75	SD01	O12	珠洲	鉢		136		ナデ	ナデ	静止糸切り	灰	暗灰	少	並		少	並	中下層	T464
76	SD01	O12	珠洲	壺				ナデ-タタキ	ナデ-当具		暗灰	灰	並	並	少		並		F374
77	SD01	O11	陶器	不明				鉄釉	鉄釉		暗褐	灰白					並	中下層	T457
78	SD01	O10	滑石見ゥ	皿				青磁釉	青磁釉		淡青白	灰白					並	中下層北中	F372

※（　）は最大値を示す。

第10表　土器・陶磁器・土製品観察表(2)

（単位：mm）

No.	遺構	地区	種類	器種	口径	底径	高	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調（釉色調）	内面色調（素地色調）	釉	砂	巻	赤	焼成	備考	実測No.
79	SD01	011	土製品	土鈴	66	30	13				灰褐			多	少	少	並	56.00g	F375
80	SD01	011	土製品	土鈴	(31)	15	5				淡灰褐			並		少	並	中下層5.70g	F371
95	SD01/02	012	弥生	壷ヵ				マメツ	マメツ・指圧痕		淡橙	橙褐		並		並	並	箱下層	S333
96	SD01/02	012	弥生	不明				ナデ	マメツ		橙褐	灰褐		並		少	並	箱下層	S343
97	SD01/02	012	須恵器	蓋		24		ケズリ後ナデ・ナデ	ナデ		灰白	灰	少	並			並	南側トレンチ	T473
98	SD01/02	012	須恵器	蓋	124			ナデ	ナデ		濃灰	灰	少	並			並	箱下層	S349
99	SD01/02	012	須恵器	有台坏	123	90	39	ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	灰	灰	少	並			並	トレンチ東壁ベラ区	T545
100	SD01/02	012	須恵器	有台坏		66		ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	褐灰	褐灰	少	並			並	南側トレンチ0ライン	T471
101	SD01/02	012	須恵器	有台坏		98		ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	灰	灰		並			並	南側トレンチ0ライン	T470
102	SD01/02	011	須恵器	有台坏		105		ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	灰	灰	少	少	少		並	地山直上	F409
103	SD01/02	011	須恵器	無台坏		100		ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	褐灰	褐灰	少	少			並	底上砂中南	F401
104	SD01/02	012	須恵器	無台坏	128	86	40	ナデ	ナデ	ナデ	淡灰白	淡灰白	少				並	箱下層遺構覆土	S345
105	SD01/02	012	須恵器	無台坏	144	100	38	ナデ	ナデ	ヘラ起シ・ナデ	灰	灰	少	並			並	箱下層	S346
106	SD01/02	012	須恵器	無台坏		80		ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	灰白	灰白	少	並		少	不	箱下層	S347
107	SD01/02	011	須恵器	無台坏	125	84	31	ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	白灰	白灰	少	並			並	底上砂中南	F400
108	SD01/02	011	内黒	椀				ナデ	ミガキ		灰褐	黒	少	並			並	底上砂中南	F387
109	SD01/02	011	内黒	柱状底台椀		55		ナデ	ミガキ	段転糸切り	灰褐	黒灰		並	少	少	並	地山直上	F390
110	SD01/02	010	内黒	無台椀		48		ナデ	ミガキ	段転糸切り	淡灰白	黒	少	並		少	並		S389
111	SD01/02	012	土師器	有台椀		80		ナデ	ナデ	ナデ	淡橙	淡橙		少	少	少	並	南側トレンチ0ライン	T476
112	SD01/02	011	土師器	無台椀		45		ナデ	ナデ	段転糸切り	淡灰褐	淡橙灰褐		少		並	並	底上砂中南	F385
113	SD01/02	012	土師器	鉢台形・皿		40		ナデ	ナデ	段転糸切り・ナデ	淡橙褐	淡橙褐		並		並	並	南側トレンチ0ライン	T475
114	SD01/02	011	内黒	柱状底台椀		56		ナデ	ミガキ		赤灰褐	黒		少	少	並	並	底上砂中南	F384
115	SD01/02	011	土師器	柱状底台椀		36		ナデ	ナデ		淡黄灰褐	淡黄灰褐		並	少		並	底上砂中南西ヵ	F386
116	SD01/02	011	土師器	柱状底台椀		40		ナデ	ナデ		灰褐	灰褐		並	少	少	並	底上砂直西ヵ	F402
117	SD01/02	012	須恵器	蓋	103	80	31	ナデ	ナデ		灰	灰白		並			並	南側トレンチ0ライン	T472
118	SD01/02	012	須恵器	瓶・壺		112		タタキ・ナデ	ナデ	ナデ	灰	灰	少	並			並	箱下層	S348
119	SD01/02	011	須恵器	瓶		95		ナデ	ナデ	ナデ	褐灰	褐灰		並			並	底上砂南	F404
120	SD01/02	012	須恵器	瓶・壺				ナデ	ナデ		灰	淡灰	少	並			並	箱下層	S344
121	SD01/02		須恵器	壺	220			ナデ	ナデ		灰	灰		多			並	南側トレンチ	F405
122	SD01/02	010	須恵器	双耳瓶							淡灰	淡灰		並			並	南側	F475
123	SD01/02	012	須恵器	双耳瓶							灰白	灰白		並			並	南側トレンチ0ライン	T474
124	SD01/02		須恵器	壺				ナデ・タタキ	ナデ・タタキ		灰	灰	少	少			並	南側トレンチ	F415
125	SD01/02	012	土師器	甕	260			ナデ・カキメ	ナデ		淡橙褐	淡橙褐	少	並			並	箱下層	S330
126	SD01/02	011	土師器	甕				ナデ	ナデ・カキメ		灰褐	灰褐	並			少	並	底上砂中南	F403
127	SD01/02	012	土師器	甕	108			ナデ	ナデ		灰褐	灰褐	少	並		少	並	箱下層	S331
128	SD01/02	012	土師器	甕		80		ナデ	ナデ	段転糸切り	灰褐	灰褐		並		少	並	箱下層	S335
129	SD01/02	012	土師器	皿	118			ヨコナデ・ナデ	板目ナデ		淡灰褐	淡灰褐	少				並	箱下層	S332
130	SD01/02	011	白磁	碗				透明釉	透明釉		透明	淡黄灰白					並	地山直上	F392
131	SD01/02	0	白磁	碗		62		透明釉	透明釉		透明	灰白					並	地山直上	F393
132	SD01/02	011	白磁	碗				透明釉	透明釉		透明	灰白					並	底上砂北	F399
133	SD01/02	011・12	白磁	碗	156			透明釉	透明釉		透明	灰白					並		T480
134	SD01/02	011	白磁	碗				透明釉	透明釉		透明	淡灰					並	底上砂北	F398
135	SD01/02	012	白磁	碗				透明釉	透明釉		透明	淡灰					並	箱下層	S340
136	SD01/02	012	白磁	碗		46		－	透明釉	無釉	透明	白					並	箱下層遺構	S337
137	SD01/02	011	白磁	碗				－	透明釉	無釉	透明	灰白					並	底上砂北	F397
138	SD01/02	012	白磁	碗		70		透明釉	透明釉	無釉	透明	淡灰白					並	箱下層西壁	S336
139	SD01/02	012	白磁	碗				透明釉	透明釉	無釉ヵ	透明	灰白					並	底上	F395
140	SD01/02	012	青磁	碗				青磁釉	青磁釉	淡緑灰	淡緑灰	灰白					並	箱下層東壁ベラ6a区	S339
141	SD01/02	011	青磁	碗				青磁釉	青磁釉	青磁釉	淡黄緑	灰白					並	地山直上撹乱区	F391
142	SD01/02	012	白磁	碗				透明釉	透明釉		透明	淡灰					並	箱下層	S338
143	SD01/02	012	珠洲	壺	388			ナデ・タタキ	ナデ・当具		灰	灰	少	並			並	箱下層	S327
144	SD01/02	012	珠洲	壺	188			ナデ	ナデ		灰白	褐灰		少	並	並	並	O12ライン	T483
145	SD01/02	011	珠洲	壺				ナデ	ナデ		淡灰	淡灰	少	並			並	底上砂中南	F388
146	SD01/02	011	珠洲	壺				ナデ	ナデ		灰	灰	少	並			並	底上砂中南	F389
147	SD01/02		珠洲	壺				ナデ	ナデ		灰	灰		並	並		並	地山直上	F407
148	SD01/02	012	珠洲	壺				ナデ・タタキ	ナデ		灰	灰		少	少		並	南側トレンチ0ライン	T484
149	SD01/02	012	珠洲	壺・甕		130		タタキ	ナデ		淡灰褐	淡灰褐	少	少	少		並	箱下層	S329
150	SD01/02	012	陶器	壺・甕		140		ナデ	ナデ		灰	灰	少	並			並	南側トレンチ0ライン	T481
151	SD01/02	010	瀬戸系	壺				押印			黄褐	黄褐	少	多			並	北中	T482
152	SD01/02	011	瀬戸系	壺				ナデ・タタキ	ナデ		黒灰	褐灰		並			並	地山直上	F408
153	SD01/02	010	珠洲	片口鉢				ナデ	ナデ		灰	灰		少	少		並	南側	F477
154	SD01/02	010	珠洲	鉢				ナデ	ナデ		褐灰	灰	少	並			並	南側	F476
155	SD01/02	011	珠洲	鉢				ナデ	ナデ		淡灰	淡灰		少			並	地山直上	F406
156	SD01/02	012	珠洲	鉢				ナデ	ナデ・刷目		褐灰	灰		並	少		並	底上	F394
157	SD01/02	012	珠洲	鉢		90		ナデ	ナデ	静止糸切り	灰白	灰白		少	並		並	南側トレンチ0ライン	T477
158	SD01/02	012	越前ヵ	すり鉢		190		ナデ	刷目	ナデ	橙	淡橙褐		並	少		並	箱下層	S334
159	SD01/02	010	瓦器	火鉢				ミガキヵ	ナデ		黒	黒		少	少		並	南側方形	F480
160	SD01/02	010	陶器	天目茶碗	116	55	56	鉄釉	鉄釉	無釉	黒茶	淡黄灰白					並	南側	F482
161	SD01/02	012	陶器	碗		62		鉄釉	鉄釉	無釉	暗茶	淡橙褐					並		T478
162	SD01/02	012	陶器	陶錘	35	24	9				赤褐			並			並	底上14g	F396
163	SD01/02	012	土製品	土錘	37	22	6				灰褐		少	並		少	並	箱下層12.3g	S342
164	SD01/02	012	土製品	ふへ・かすり	(51)	(22)	(30)				淡橙褐		少	並		少	並	箱下層	S341
182	SD02	011	土製品	土錘	53	34	12				淡橙褐			少		少	並	59.1g	F462

※（　）は最大値を示す。

第10表　土器・陶磁器・土製品観察表(3)

（単位：mm）

No.	遺構	地区	種類	器種	口(長)	底(幅)	高(厚径)	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調(胎色調)	内面色調(素地色調)	釉	砂	骨	赤	焼成	備考	実測No.
183	SD02	010	調整器	壺				タタキ	タタキ		淡橙灰褐	淡灰褐	並	少			不	上部中期D01と接合	F465
184	SD02	010	調整器	蓋	130	18	24	ナデ	ナデ	ヘラ切り・ヘラ起し	灰	灰	少	並			並	上層北	F471
185	SD02	010	調整器	無台坏	118	76	30	ナデ	ナデ	ヘラ切り・ヘラ起し	灰	灰	少	並			並	上層北中	F464
186	SD02	010	調整器	坏底部					ナデ	ヘラ切り	淡灰	淡灰	少	少			並	上層北西悪書	F470
187	SD02	011	珠洲	壺				タタキ→ナデ	当具		淡灰	灰	少	並	並	少	並	上層	F467
188	SD02	011	調整器	壺				ナデ・タタキ	ナデ・タタキ		灰	灰	少	並			並	上層	F468
189	SD02	010	陶器	鉢				ナデ	ナデ		赤灰褐	淡赤灰褐		少			並	上層北	F469
190	SD02	010	越前	すり鉢				ナデ	ナデ・卸目		橙灰	橙灰	少	多			並	上層北中	F466
191	SD02	010	越前	甕a				ナデ	ナデ		橙褐	淡赤灰褐	少	並	少	少	並	上層北中	F461
192	SD02	010	陶器	天目茶碗		44		鉄釉	鉄釉	無釉	黒褐	白褐					並	上層北中	F460
193	SD02	010	土製品	粘土塊	54	54	32				淡橙褐			並			並	上層中南	F463
194	SD02	010	土師器	壺				ナデ	ナデ		橙灰褐	橙灰褐		多			並	2階	F419
195	SD02	010	調整器	高坏				ナデ	ナデ		淡灰	淡灰	少	少			並	2層A北中	F414
196	SD02	011	調整器	無台坏	115	82	35	ナデ	ナデ	ヘラ切り	淡黄灰	淡黄灰	少	少	少		並	2層A北中	F410
197	SD02	011	調整器	無台坏				ナデ	ナデ	ヘラ切り・ヘラ起し	灰	灰	並	少			並	2層中南	F411
198	SD02	010	調整器	無台坏	118	86	33	ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	灰	灰	少	並			並	2層A北中	F412
199	SD02	010	緑釉	碗		63		緑釉	緑釉	緑釉	灰	灰					並	2層A底部ヘラ記号	F479
200	SD02	010	調整器	壺・瓶		126		ナデ	ナデ	ナデ	灰	淡灰	少	少			並	2層A北中	F416
201	SD02	N11	調整器	瓶		160		ナデ	ナデ		灰	灰	並	多			並	2層輪砂	F432
202	SD02	010	調整器	壺				ナデ	ナデ		灰	灰	少	少			並	2層A北中	F413
203	SD02	010	白磁	碗				透明釉	透明釉		透明	灰白					並	2層A中南	F417
204	SD02	010	青磁	碗	143			青磁釉	青磁釉		淡緑灰	白灰					並	2層A北中	F475
205	SD02	011	土製品	土錘	22	14	13.0				淡灰褐			並			並	2層中2.65g	F418
206	SD02	011	弥生	壺	168			マメツ	マメツ		淡灰褐			並		並	並	2-3層南西	F420
207	SD02	010	調整器	壺a				タタキ→カキメ	ナデ		灰	灰		並			並	2-3層中南	F428
208	SD02	011	調整器	壺				ナデ・タタキ	タタキ		灰	灰	並	並			並	2-3層北	F422
209	SD02	011	調整器	坏	112			ナデ	ナデ		灰	灰					並	2-3層南側	F430
210	SD02	011	調整器	有台坏	126	91	37	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	褐灰	褐灰	少	並			並	2-3層北	T525
211	SD02	011	調整器	無台坏	128	100	32	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰	少	少			並	2-3層北	F426
212	SD02	011	調整器	坏底部				ナデ	ヘラ切り	ヘラ切り	灰	灰	少	少			並	2-3層北悪書	F424
213	SD02	010	土師器	有台碗		60		ナデ	ナデ	回転糸切り	淡橙灰褐	淡灰褐		少		少	並	2-3層中南	F421
214	SD02	011	調整器	無台鉢	158	40	19	ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	灰		少			並	2-3層北	F425
215	SD02	010	調整器	有台鉢				ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	灰	少	並			並	2-3層中南	F429
216	SD02	011	珠洲	壺		82		ナデ	ナデ	静止糸切り	淡灰	淡灰			少		並	2-3層北	F423
217	SD02	010	珠洲	壺				ナデ	ナデ		灰	灰		並			並	2-3層中南	F427
218	SD02	012	珠洲	壺				ナデ	ナデ		灰	灰		少			並	中下層	S379
219	SD02	011	弥生	装飾器台	180			マメツ	マメツ		淡橙	淡橙		少	少	少	並	3層	T490
220	SD02	011	土師器	壺	232			ハケ後ナデ・ナデ	ハケ		淡橙褐	淡橙褐		多			並	3層中	T493
221	SD02	011	土製品	粘土塊	52	52	33.0				淡橙			少		少	並	3層中52.25g	T505
224	SD02	011	調整器	有台坏		94		ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	灰		並			並	3層北中	T496
225	SD02	011	調整器	無台坏	126	72	37	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	淡橙	淡橙	少	並		少	不	3層中	T499
226	SD02	010	調整器	無台坏	138	96	37	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰白	少	並			並	3層北	T497
227	SD02	010	調整器	無台坏		72		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰	少	並			並	3層北中西部悪書	T512
228	SD02	011	調整器	無台坏		76		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	淡橙	淡橙	少	並		少	不	3層中南部悪書	T501
229	SD02	011	調整器	無台坏a				ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰		並			並	3層北西部悪書	T500
230	SD02	010	調整器	無台坏	138	100	37	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰白	灰白		並	少		並	3層中西調査トリ区6	T552
231	SD02	010	調整器	壺a	156			ナデ	ナデ		灰	灰	並	並			並	3層北中	T504
232	SD02	010	調整器	鉢・壺		114		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰	並	並			並	3層北	T502
233	SD02	010	調整器	壺				ナデ	ナデ		灰	灰白	少	少			並	3層北中	T503
234	SD02	010	土師器	壺	192			ナデ	ナデ		淡橙	淡橙	少	少		少	並	3層中南	T491
235	SD02	011	土師器	有台鉢		180		ミガキ	ミガキ	ナデ	淡橙	淡橙		少		少	並	3層中	T495
236	SD02	011	土師器	碗	140			ナデ	ナデ		淡橙褐	淡橙褐		並		並	並	3層中	T487
237	SD02	010	土師器	有台碗		78		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	淡橙	淡橙	少	並		少	並	3層中南	T496
238	SD02	011	土師器	無台碗a		66		ナデ	ナデ	回転糸切り	淡橙	淡橙		少		少	並	3層中	T489
239	SD02	011	土師器	柱状高台瓶		42		ナデ	ナデ	マメツ	茶褐	茶褐		並	少	少	並	3層中西カ	T494
240	SD02	010	土師器	皿	92	46	13	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	淡橙	淡橙		少		少	並	3層北中	T486
241	SD02	011	土師器	皿	138	80	22	ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ	灰褐	灰褐		少		少	並	3層中	T492
242	SD02	010	土師器	皿	148			ナデ	ナデ		淡橙	淡橙		少		少	並	3層中南	T488
243	SD02	010	白磁	碗		66		無釉	白磁釉	無釉	淡緑灰	灰白					並	3層北中	T508
244	SD02	010	白磁	碗		62		透明釉	透明釉	無釉	透明	灰白					並	3層中南	T548
245	SD02	010	青磁	碗				青磁釉	青磁釉		淡緑灰	灰白					並	3層中南	T511
246	SD02	010	青磁	坏・鉢				青磁釉	青磁釉		青緑灰	灰白					並	3層北	T510
247	SD02	011	珠洲	壺				ナデ	ナデ		灰	灰	少	並			並	3層	S328
248	SD02	010	陶器	皿		76		無釉	灰釉	無釉	淡緑灰	淡橙褐					並	3層北中	T509
249	SD02	011	調整器	蓋	130	21	27	ナデ	ナデ		灰	灰	少	並			並	3層輪砂北半	F451
250	SD02	011	調整器	蓋	162	24	35.0	ナデ	ナデ	ケズリ	褐灰	褐灰		少			並	3層輪砂北半	F450
251	SD02	011	調整器	有台坏		100		ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	淡灰	淡灰	少	並			並	3層輪砂北半	F455
252	SD02	011	調整器	有台坏		106		ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	淡灰	淡灰	少	少			並	3層輪砂北半	F456
253	SD02	011	調整器	無台坏	117	78	31	ナデ	ナデ	ヘラ切り・ヘラ起し	淡灰	淡灰	少	並			並	3層輪砂北半	F453
254	SD02	011	調整器	無台坏	128	80	32	ナデ	ナデ	ヘラ切り	淡灰	淡灰	少	少			並	3層輪砂北半	F452
255	SD02	011	調整器	無台坏		76		ナデ	ナデ	ヘラ切り	赤灰	赤灰	少	少			並	3層輪砂北半	F447
256	SD02	011	調整器	無台鉢	161	130	23	ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	褐灰	褐灰	少	少			並	3層輪砂北半	F454
257	SD02	011	土師器	碗				マメツ	マメツ		淡灰褐	淡灰褐		並		少	並	3層輪砂北	F442

第10表　土器・陶磁器・土製品観察表(4)

[単位：mm]

No.	遺構	地区	種類	器種	口(長)	底(幅)	高(厚さ)	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調(釉色調)	内面色調(漆液色調)	糟	砂	雲	赤	焼成	備考	実測No.
258	SD02	O11	赤彩	無台椀				ナデ・ケズリ	ミガキ・ナデ	マメツ	淡橙褐	橙褐		少		少	甚	3層軸砂北半	F441
259	SD02	O11	内黒	椀				ヨコナデ・ナデ	ミガキ		淡灰褐	黒		少			甚	3層軸砂北半	F445
260	SD02	N11	須恵器	壷・瓶		110		ナデ	ナデ	ヘラ起シ・ナデ	淡灰	淡灰	甚	多			甚	3層軸砂	F431
261	SD02	N11	土師器	無台椀 B		44		ナデ	ナデ	回転糸切り	淡橙褐	淡橙褐		少	少	甚	甚	3層軸砂	F435
262	SD02	O11	土師器	無台椀		38		ナデ	ナデ	回転糸切り	灰褐	灰褐		甚		多	甚	3層軸砂	F439
263	SD02	N11	土師器	鍋				ナデ・カキメ	ナデ		淡灰褐	淡橙灰褐	少	甚		少	甚	3層軸砂	F434
264	SD02	N11	土師器	鍋				ナデ	ナデ		淡灰褐	灰褐		甚		少	甚	3層軸砂	F433
265	SD02	O11	灰釉	椀				灰釉	灰釉		淡灰白	淡灰白		甚			甚	3層軸砂北半	S392
266	SD02	O11	土師器	皿	90	70	15	ヨコナデ	ナデ	指圧	淡灰褐	淡灰褐		少		少	甚	3層軸砂北半	F440
267	SD02	N11	土師器	皿	136			ヨナデ・指圧	ヨコナデ・板目ナデ		淡黄灰褐	淡黄灰褐		甚		少	甚	3層軸砂北半	F436
268	SD02	O11	白磁	椀				透明釉	透明釉		透明	灰白					甚	3層軸砂北半	F444
269	SD02	O11	白磁	椀		58		透明釉	透明釉	無釉	透明	灰白					甚	3層軸砂北半	S393
270	SD02	O11	珠洲	鉢				ナデ	ナデ		灰	淡灰	甚	甚	少		甚	3層軸砂北	F449
271	SD02	O11	珠洲	すり鉢				ナデ	刻目		暗灰	暗灰	甚	甚			甚	3層軸砂北半	F446
272	SD02	O11	珠洲	壷				ナデ・タタキ	ナデ		灰白	暗灰	少	甚		少	甚	3層軸砂北半	F448
273	SD02	O11	土製品	土錘	48	20	7				暗灰			甚			甚	3層軸砂北半 16.4g	F443
276	SD02	O11	弥生	壷				マメツ	マメツ		橙褐	橙褐	少	甚		少	甚	3層武上中	S362
277	SD02	O10	弥生	壷				マメツ	マメツ		橙褐	橙褐		甚		少	甚	3層武上中	S364
278	SD02	O10	弥生	壷・鉢		64		マメツ	マメツ	マメツ	橙褐	橙褐	甚	甚		少	甚	3層武上中	S361
279	SD02	O10	弥生	鉢				ミガキ	ミガキ		赤橙	赤橙		甚		少	甚	3層武上中	S352
280	SD02	O10	弥生	高杯				ミガキ	マメツ		橙橙褐	橙橙褐		多		多	甚	3層武上中	S351
281	SD02	O10	須恵器	有台杯	150	100	65	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰白	灰白	少	甚			甚	3層武上中	T528
282	SD02	O10	須恵器	有台杯		100		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰	少	甚			甚	3層武上中	T527
283	SD02	O10	須恵器	有台杯		92		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	淡黄褐	淡黄褐	少	甚			甚	3層武上中	T526
284	SD02	O10	須恵器	有台杯		76		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰	少	甚			甚	3層土上中須恵器蓋	T517
285	SD02	O10	須恵器	無台椀	122	80	35	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰白	灰白	甚	多			甚	3層武上中	T522
286	SD02	O10	須恵器	無台椀		64		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰	少	少			甚	3層武上中	T519
287	SD02	O10	須恵器	無台椀		86		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰白	灰白	少	甚			甚	3層武上中	T520
288	SD02	O10	須恵器	無台椀	137	100	30	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰	甚	甚			甚	3層武上中	T523
289	SD02	O10	須恵器	無台椀	138	110	33	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ・ヘラ起シ	灰白	灰白	少	甚			甚	3層武上中	T521
290	SD02	O10	須恵器	無台椀	134	100	32	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰白	灰白		甚			甚	3層土中組須恵器・小型R1	T514
291	SD02	O10	須恵器	無台椀		88		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	淡黄褐		甚			甚	3層武上中須恵器蓋	T513
292	SD02	O10	須恵器	無台椀		88		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰白	灰白		甚			甚	3層武上中須恵器蓋	T515
293	SD02	O10	須恵器	無台椀		64		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰白	灰白		甚			甚	3層土上中組須恵器・小型R	T516
294	SD02	O10	須恵器	無台椀	126	70	37	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰白	灰白	少	甚			甚	3層武上中	T524
295	SD02	O11	須恵器	壷・瓶				ナデ	ナデ		灰	灰	少				甚	3層土上中内面青海波	T518
296	SD02	O10	土師器	高杯				ナデ	ミガキ		淡橙褐	淡灰褐		甚		少	甚	3層武上中	T543
297	SD02	O10	赤彩	皿		21		マメツ	マメツ		淡橙	淡橙	少	甚		少	甚	3層武上中南	S368
298	SD02	O10	赤彩	無台椀		64		ナデ・ケズリ	ミガキ	ケズリ	赤橙	赤橙		甚		少	甚	3層武上中南	S367
299	SD02	O10	赤彩	無台椀		92		ミガキ	ミガキ	ケズリ	赤橙	赤橙		甚		少	甚	3層武上中南	S366
300	SD02	O10	赤彩	無台椀		100		マメツ	ナデ	ヘラ切り・ヘラ起シ・ナデ	赤橙褐	淡橙褐	少	甚		少	甚	3層土上中組多・小型R	S365
301	SD02	O10	内黒	有台椀		64		ナデ	ミガキ	指圧痕	淡橙褐	黒	少	甚		少	甚	3層武上中	S369
302	SD02	O10	土師器	無台椀・皿		42		ナデ	ナデ	回転糸切り	淡橙褐	淡橙褐	少	少		少	甚	3層武上中	S356
303	SD02	O10	土師器	無台椀・皿		54		ナデ	マメツ	回転糸切り	淡橙褐	淡橙褐	少	甚		少	甚	3層武上中	S358
304	SD02	O10	土師器	性状高台椀		40		ナデ	マメツ	回転糸切り	淡橙褐	淡橙褐		少		少	甚	3層武上中中間 B	S359
305	SD02	O10	土師器	有台皿		60		ナデ	ナデ	回転糸切り	茶褐	茶褐	少	甚			甚	3層武上中南	S357
306	SD02	O10	土師器	有台椀		84		ナデ	マメツ	回転糸切り・ナデ	淡橙褐	淡橙褐		少		少	甚	3層武上中南	S355
307	SD02	O11	土師器	有台椀		82		ナデ	ナデ	ナデ	淡灰褐	淡灰褐	少	少			甚	表ジリ流れ堆積層南	F483
308	SD02	O10	須恵器	双耳瓶				ナデ	ナデ		灰	灰	少				甚	3層武上北中	T544
309	SD02	O10	須恵器	壷				ナデ・タタキ	ナデ・当具		灰白	灰	少	甚			甚	3層武上北中	T540
310	SD02	O10	須恵器	壷・瓶		88		ナデ・ケズリ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰白	灰白	甚	甚			甚	3層武上北中	T538
311	SD02	O10	須恵器	壷・瓶		120		ナデ・ケズリ	ナデ	ナデ	黒	灰		甚			甚	3層武上北南	T539
312	SD02	O10	須恵器	壷・瓶		156		ナデ・ケズリ	ナデ	ナデ	暗灰	灰	少	甚			甚	3層武上中南	T541
313	SD02	O10	土師器	壷		72		マメツ	カキメ	ナデ・指圧痕	灰褐	灰褐	少	甚			甚	3層武上中南	S360
314	SD02	O10	土師器	壷	160			ナデ・カキメ	ナデ		淡橙褐	淡灰褐	少	甚			甚	3層武上中南	S363
315	SD02	O10	土師器	皿	146			ヨコナデ・指圧	ヨコナデ・板目ナデ		灰褐	灰褐		少			甚	3層武上北中	F437
316	SD02	O10	白磁	椀	160			透明釉	透明釉		透明	灰白					甚	3層武上中	T549
317	SD02	O10	白磁	椀				透明釉	透明釉		透明	淡灰白					甚	3層武上中	S371
318	SD02	O10	白磁	椀				透明釉	透明釉		透明	灰白					甚	3層武上中	T550
319	SD02	O10	白磁	椀		60		透明釉	透明釉	無釉	透明	灰白					甚	3層武上中北中	F438
320	SD02	O10	白磁カ	椀・皿		30		無釉	透明釉	無釉	透明	淡灰白					甚	3層武上中南	S390
321	SD02	O10	青磁	椀	164			青磁釉	青磁釉		淡緑灰	淡灰					甚	3層土上中南後・2層	F481
322	SD02	O12	珠洲	鉢	260			ナデ	ナデ		灰	灰	甚	少		甚	甚	3層土上中10cm以北中	T542
323	SD02	O10	白磁	皿 B		38		透明釉	透明釉	無釉	透明	白					甚	3層武上中	S373
324	SD02	O10	白磁	椀		52		透明釉	透明釉	透明釉	透明	淡灰白					甚	3層武上中	S372
325	SD02	O10	土製品	土錘	38	16	5				橙褐			少		甚	不	3層武上中南6.7g	S370
328	SD02	O12	弥生	壷	138			マメツ	ナデ・ケズリ		淡橙褐	淡橙褐	少	多		甚	甚	底上砂	T532
329	SD02	O12	弥生	脚部		76		マメツ	ナデ		淡橙褐	橙褐		砂	甚	多	甚	底上砂	T328
330	SD02	O11	須恵器	皿		22		ナデ・ケズリ後ナデ	ナデ		灰	灰	少	甚			甚	底上中	T534
331	SD02	O11	須恵器	有台杯	110	82	39	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰	少	少			甚	底上砂南底部墨書	ET118
332	SD02	O11	須恵器	有台杯		84		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰	甚	甚			甚	底上砂南	T582
333	SD02	O12	須恵器	無台杯		78		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰	少	甚			甚	底上底部墨書	T581
334	SD02	O12	須恵器	無台杯	138	110	34	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰	灰	甚				甚	底上砂	T529

第10表　土器・陶磁器・土製品観察表(5)

（単位：mm）

No.	遺構	地区	種類	器種	口(長)	底(幅)	高(厚径)	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調(胎色調)	内面色調(素地色調)	礫	砂	骨	赤	焼成	備考	実測No.
335	SD02	011	内黒	有台椀		66		ナデ	ミガキ	ナデ	淡橙	黒		少	並		並	底上	T531
336	SD02	012	土師器	無台椀・皿		76		ナデ	ナデ	回転糸切り	淡橙	淡橙		少		並	並	底上砂	T530
337	SD02	012	土師器	椀		76		ナデ	ナデ	回転糸切り	淡橙褐	淡橙褐	並	並		少	並	底上砂	T533
340	SD02	011	須恵器	無台坏		84		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	灰白	灰白	少	並			並	7層011ライン直線ヘラ切り	S374
341	SD02	011	白磁	碗	114			透明釉	透明釉		透明	白					並	7層011ライン	S375
342	SD02	011	灰釉	不明				灰釉	灰釉		淡緑灰	淡灰白					並	7層011ライン	S376
343	SD02	011	土師器	椀	138			ナデ	ナデ		灰褐	淡橙褐		並		少	並	8-9層011ライン	S377
344	SD02	011	白磁	碗・皿		60		無釉	透明釉	無釉	透明	淡灰白					並	8-9層011ライン	S378
345	SD02	011	越前	すり鉢				ナデ	卸目	ナデ	淡赤橙	淡赤橙	少	並			並	10-11層011ライン	S383
346	SD02	011	弥生	高不・器台				ミガキ	ナデ		淡橙褐	淡橙褐	少	並		少	並	12-13層011ライン	S381
347	SD02	011	土師器	有台椀・皿		36		マメツ	マメツ	ナデ	淡橙褐	淡橙褐		並		少	並	12-13層011ライン	S382
348	SD02	011	須恵器	無台坏	114	96	35	ナデ	ナデ	ヘラ切り・ヘラ記ハナデ	灰	灰	少	並		少	並	12-13層011ライン	S380
365	SD03	011	須恵器	壺ｂ				ナデ	ナデ		淡灰	淡灰	少	少			並		F474
366	SD03	011	須恵器	有台坏		70		ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	暗灰	暗灰	少	少			並		F473
367	SD03	011	白磁	碗				透明釉	透明釉		透明	灰白					並		F472
368	SD05		弥生	壺	222			ハケ	マメツ		淡橙褐	淡橙褐	少	並		少	並		S401
369	SD05		弥生	壺	120			ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		橙褐	淡橙褐		並		少	並		S400
370	SD06	H/19	土師器	甕胴	48	24	24	ナデ	ナデ		淡橙灰	淡橙灰		少		少	並		S402
371	SD07		土師器	鉢	72	40	14	ナデ・指圧痕	マメツ	ナデ・指圧痕	淡橙褐	淡橙褐		少		少	並		S403
372	SD20	H/10	弥生	壺	148			ナデ	マメツ		淡橙褐	淡橙褐	多	少		少	並	西	F507
373	SD20	H/10	弥生	壺ａ				ミガキ	ミガキ		白橙	淡灰褐		少		少	並		F499
374	SD20	H/10	弥生	壺	194			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ		淡橙灰褐	淡橙灰褐	多	並		並	不		F501
375	SD20	H/10	弥生	壺・甕		93		ハケ	ケズリ	ナデ	淡灰褐	暗灰	並	多	少	並	並		F498
376	SD20	H/10	弥生	有孔鉢ａ		23		ハケ・ナデ	ケズリ		淡灰褐	灰褐		多	少		並		F500
377	SD20	H/10	須恵器	壺	122			ナデ	ナデ		灰	灰	多	並			並		F504
378	SD20	H/10	須恵器	無台坏	120	80	33	ナデ	ナデ	ヘラ切り	淡灰	淡灰	少	並			並	打ち欠き	F502
379	SD20	H/10	須恵器	無台坏	118	92	24	ナデ	ナデ	ヘラ切り	淡灰	淡灰	少	少			並		F503
380	SD20	H/10	須恵器	壺				ナデ	ナデ		淡灰	淡灰	少	少			並	周辺	F508
381	SD20	H/10	土製品	土錘	52	12	6				淡橙灰褐			並		少	並	6.01g	F506
386	SD09		須恵器	壺・甕		162		ナデ	ナデ	ナデ	灰	灰		並			並		S408
387	SD09		土師器	椀		64		ナデ	ナデ	回転糸切り	淡橙褐	淡		少		少	並		S404
388	SD09		土師器	鉢	118	54	30	ナデ	ナデ	回転糸切り	橙褐	橙褐		並		少	並		S405
389	SD09		青磁	碗ａ		60		青磁釉	青磁釉	無釉	淡緑灰	淡灰					並		S407
390	SD09		青磁	碗	126	60	36	青磁釉	青磁釉	無釉	淡青灰	灰					並		S406
391	SD09		瀬戸ａ	瓶子類				鉄釉	無釉		濃緑灰	灰					並	耳1コ残	S409
392	SD10	H/11	弥生	壺	194			ナデ	ナデ		淡灰褐	淡灰褐		並		少	並	下層	S410
393	SD10	H/11	弥生	壺	107			ナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ		黒褐	橙褐	少	並	多	少	並		Q7
394	SD10	H/11	弥生	壺	106			ミガキ・ナデ	ミガキ・ケズリ		暗茶褐	暗褐	少	並	少	少	並	下層3トレ	Q11
395	SD10	H/11	弥生	壺	102			ミガキ	ミガキ・ケズリ		灰褐	灰褐		少	並	少	良	下層	S412
396	SD10	H/11	弥生	壺	135			ナデ・ハケ・キザミ	ハケ		淡橙褐	淡橙褐		多	少	多	並	下層	F510
397	SD10	H/11	弥生	壺	169			ナデ・ハケ	ナデ・指圧痕・ケズリ		淡橙白	灰褐	多	多	並	少	並	下層	Q14
398	SD10	H/11	弥生	壺				マメツ	ナデ・指圧痕・ケズリ		黒褐	黒褐	多	多	少	並	不		Q8
399	SD10	H/11	弥生	壺	182			ナデ	ナデ・ケズリ		淡灰褐	淡灰褐		並		少	並	下層	S411
400	SD10	H/11	弥生	壺	137			ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		灰褐	灰褐		多	少		並	下層	F509
401	SD10	H/11	弥生	壺	122			ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		淡灰褐	淡灰褐		多		多	並	下層	F493
402	SD10	H/11	弥生	壺	169			ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		黒褐	暗褐		並	並	並	並	下層	Q13
403	SD10	H/11	弥生	壺	177			ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		淡灰褐	橙灰褐		多		並	並	下層	F494
404	SD10	H/11	弥生	壺	168			ナデ	ナデ・ハケ		黒褐	淡褐	並	多	並	並	並	下層	Q10
405	SD10	H/11	弥生	高坏		96		ミガキ	ケズリ・ナデ		淡灰褐	淡灰褐		並	少	多	並	下層	F497
406	SD10	H/11	弥生	器台ａ				マメツ	マメツ		暗褐	淡褐		並	並		並	下層	Q12
407	SD10	H/11	須恵器	壺・甕		76		ナデ	ナデ	回転糸切り	淡橙褐	淡橙褐		少	少	少	並		Q9
408	SD10	H/11	須恵器	有台坏	172	118	63	ナデ	ナデ	ナデ	灰褐	灰褐		並	少		並	3トレ	Q6
409	SD10	H/11	須恵器	無台坏	116	85	30	ナデ	ナデ	ヘラ切り	青灰	青灰	少	並			良		Q5
410	SD10	H/11	土製品	鈴	-30	-35	-36				灰褐		並	並	少		並	下層	F495
411	SD10	H/11	土製品	土錘	35	38	6				黒			並			並	下層51.92g	F496
416	SD02	011	須恵器	坏	116			ナデ	ナデ		淡灰	淡灰	少	並			並	上層	S384
417	SD02	011	内黒	有台椀				マメツ	ミガキ	マメツ	淡橙灰	黒		並		少	並	上層	S387
418	SD02	011	土師器	無台椀・皿		42		マメツ	マメツ	回転糸切り	淡橙褐	淡橙褐		少		少	並	上層	S386
419	SD02	011	珠洲	壺				ナデ	ナデ		濃灰	濃灰	少	並		少	並	上層	S385
422	SD18	H/13	弥生	高不・器台	180			ミガキ	ミガキ		淡橙褐	淡橙褐		少	多	並			T577
423	SD18	H/13	弥生	高不・器台		156		ミガキ	ナデ		淡橙褐	淡橙褐		並	多	並			T576
424	遺構外	H/11	弥生	壺	180			ハケ	ミガキ・ナデ・ケズリ		淡橙	淡橙		並	少	並			N5
425	遺構外	H/13	土師器	高坏	148			ミガキ	ハケ		橙褐	淡橙褐		並		並	並		N4
426	遺構外	M/11	弥生	高坏		136		ミガキ	マメツ		淡橙灰	淡橙灰		並			並		ET115
427	遺構外	011	須恵器	有台坏	118	72	40	ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	淡青灰	淡青灰	少	少			並	底部墨書	T442
428	遺構外		須恵器	壺	216			ナデ	ナデ		暗灰	灰	少	並			並		T447
429	遺構外	N/10	白磁	皿	132			透明釉	透明釉		透明	白					並		T450
430	遺構外	010	陶器	椀		44		灰釉	灰釉	灰釉	淡青灰	灰					並		T451
431	遺構外	012/13	珠洲	壺				ナデ	ナデ		淡赤灰	暗灰		並			並		T449
432	遺構外	011	越前	壺				ナデ	ナデ		灰	灰	少	並			並		T448
434	遺構外	011	陶器	陶器	55	35	16				赤褐			並			並	72.43g	T452
435	遺構外	013	土製品	土錘	66	25	9				淡橙			並			良		T446

第11表　漆製品観察表

（単位：㎜）

No.	遺構	地区	器種	口（長）	底（幅）	高（厚・径）	外面漆	内面漆	外底面漆	樹種	木取	備考	実測No.
12	SK18	I9	椀				黒漆・茶漆絵	茶漆	黒漆	ブナ属			F285
21	SK27	I10	箱膳（蓋）	315	258	31	黒漆	黒漆					M195
22	SK27	I10	箱膳（身）	295	237	113	黒漆	黒漆					M195
23	SK27	I10	椀	158	78	100	黒漆・赤漆絵	赤漆	黒漆				T357
24	SK27	I10	椀	136			黒漆・赤漆絵	黒漆・赤漆絵	黒漆	ブナ属			M192
25	SK27	I10	椀	128	69	49	黒漆・赤漆絵	赤漆	黒漆	ブナ属	横木		M191
26	SK27	I10	箪笥（蓋）	241	125	28							M197
27	SK27	I10	箪笥（身）	223	103	38							M196
30	SK28	I10	椀	132	64	46	黒漆・赤漆絵	黒漆・赤漆絵		ブナ属	横木		ET99
31	SK32	I10	椀	124	66	50	赤漆	赤漆	黒漆・赤漆文字	ブナ属	横木		F284
32	SK32	I10	椀	126	62	53	黒漆・赤漆文字	赤漆	黒漆	トチノキ	横木		S257
33	SK32	I10	椀	106	62	38	黒漆・赤漆絵	赤漆		ブナ属	横木		S258
83	SD01	O12	椀		55		赤漆	赤漆	墨書		横木	墓下砂層	ET27
167	SD01/02	O11	椀	122			黒漆・赤漆絵	黒漆・赤漆絵	黒漆		横木	上層下砂層	S395
168	SD01/02	O11	椀				黒漆・赤漆絵	赤漆	黒漆			地山直上	M169
169	SD01/02	O12	椀	96	38	20	黒漆	黒漆・赤漆絵	黒漆		縦木	底上	S396
349	SD02	O12	皿	86	61	15.0	黒漆	黒漆				下層O12ライン	ET26

第12表　木製品観察表

（単位：㎜）

No.	遺構	地区	種別	長	幅	厚	樹種	木取	備考	実測No.
84	SD01	O13	曲物側板	71	71	21	針	柾目	厚2㎜	M160
85	SD01	O12	曲物側板	89	89	30	針	柾目	中下層厚2㎜	M175
86	SD01	O13	円形板	73	73	5	針	柾目		M161
87	SD01	O12	円形板	86	86	5	針	柾目	中下層	M173
88	SD01	O12	円形板	86	86	6	針	柾目	中下層	M174
89	SD01	O12	板状	(126)	18	8	針	柾目	中下層	M180
90	SD01	O12	箍状	195	(19)	14	針	柾目	中下層	M179
91	SD01	O12	ウチワ型り部	142	42	7		柾目	中下層全面黒漆	M171
92	SD01	O11	板棒状	(189)	66	20	針	柾目	中下層	M178
93	SD01	O11	桶側板	173	59	8	針	柾目	中下層焼印	M176
94	SD01	O12	板状	167	36	3	針	柾目	中下層台、脚か	M172
170	SD01/02	O11/12	小型容器	42	38	40			墨描キ	M170
171	SD01/02	O11	箸状	213	6	5	針	芯去	南下方形	M163
172	SD01/02	O11	箸状	203	4	6	針	芯去	南下方形	M164
173	SD01/02	O11	箸状	(135)	6	4	針	芯去	南下方形	M165
174	SD01/02	O11	棒状	(71)	7	5	針	芯去	南	M166
175	SD01/02	O12	草履芯	218	(45)	2	針	柾目	墓下層	T338
176	SD01/02	O12	板状	(103)	(51)	11	針	柾目	墓下層下駄ノ歯?	T339
177	SD01/02	O11	板状	(89)	22	5	針	柾目	南	M167
178	SD01/02	O12	棒状	(117)	52	13	針	柾目	墓下層焼印	M159
179	SD01/02	O11	棒状	257	9	9.0	針	芯去	南方形	M162
180	SD01/02	O12	板状	81	(105)	9	針	柾目	墓下層	T340
350	SD02	O11	箸状	(192)	7	4.0	針	芯去	3層底上平	T344
351	SD02	O11	箸状	(184)	7	5.0	針	芯去	3層輪砂北半角	M182
352	SD02	O11	箸状	(176)	8	4	針	芯去	3層底上平	T345
353	SD02	O11	箸状	(122)	6	4.0	針	芯去	3層底上多角	T346
354	SD02	O10	棒状	(226)	9	6.0	針	芯去	3層底上方形	T334
355	SD02	O11	箸状	200	11	8.0	針	芯去	3層底上台形	T343
356	SD02	O10	棒状	153	10	7.0	針	芯去	平方形	T336
357	SD02	O11	棒状	159	19	10.0	針	芯去	3層輪砂北半	M181
358	SD02	O10	板棒状	149	21	11.0	広?	芯去	3層底	T335
359	SD02	O11	板状	243	31	2		芯去	3層底上	T342
360	SD02	O11	板状	344	41	13	広	柾目	3層底上	T341
361	SD02	O11	杭状	(326)	29	27	広	芯持	3層	T337
362	SD02	O10	杭状	580	40	33.0	針	芯去	3層底上	M168
363	SD02	O11	杭状	934	66	64		芯去	3層	ET63
364	SD02	O11	板状	90	53	5.0	針	柾目	3層底上	T347
412	SD10		杭状	(298)	49	55	広	芯持	下層	ET111
413	SD10		杭状	(101)	(40)	(15)	広	芯持	下層	ET110
414	SD10		杭状	(415)	(61)	(44)	広	芯持	下層	ET113
415	SD10		棒状	(714)	27	19	針	芯去	下層角	ET112

第13表　石製品観察表

（単位：㎜）

No.	遺構	地区	種別	長	幅	厚・径	重量	備考	実測No.
28	SK27	I10	砥	80	40	11			M198
61	SD01	O11	砥石	(81)	(56)	53		中下層285g	F369
165	SD01/02	O12	不明	(140)	(113)	50		黒796g	T485
166	SD01/02	O12	皿	(160)	(95)	42		墓下層1250g	S350
223	SD02	O10	砥石	57	31	7.0		3層北中15.67g	T507
274	SD02	O11	剥片	38	24	20	23.10	3層輪砂北半	F458
275	SD02	O11	石核	112	94	40	545.00	3層輪砂北半	F457
326	SD02	O10	剥片	53	27	14	18.50	3層底上北中緑色凝灰岩	S353
327	SD02	O10	火打石ⅱ	11	15	6	0.90	3層底上北中メノウ	S354
338	SD02	O12	火打石ⅲ	48	31	22	36.09	底上砂メノウ	T537
382	SD20	H/I10	管玉	13	3	2	0.16	緑色凝灰岩	T583
383	SD20	H/I10	剥片	21	20	4	1.35	緑色凝灰岩	F505
384	SD20	H/I10	剥片	39	32	17	24.88	緑色凝灰岩	T585
385	SD20	H/I10	剥片	39	21	9	6.18	緑色凝灰岩	T584
420	SD02	O11	砥石	(85)	(50)	35	230.00	上層	S388
421	SD09/11/12		砥石	(100)	(67)	29	255.00		Q15
433	遺構外	H10	硬	(82)	57	13	85.00		N3

第14表　金属製品観察表

（単位：㎜）

No.	遺構	地区	器種	口（長）	底（幅）	高（厚）	重量	備考	実測No.
6	SK19	I9	鎌	22		1	2.50	孔径6㎜	F488
7	SK19	I9	鎌	24		1	1.73	孔径6㎜	F490
8	SK19	I9	鎌	23		1	0.99	孔径6㎜	F489
17	SK11	I9	鋏	(84)	59	26	65.27	鉄	T556
29	SK28	I10	鉄鎌		190			足3コ残	ET114
34	SK32	I10	鉄鎌	277	220				M199
35	SK32	I10	刀工	319	45	22		刃186×45×5	M193
36	SK32	I10	鋏	359	39	27		刃155×30×4	F286
82	SD01	O11	刀子の柄	(56)	12	5	8.12	中下層鉄	T495
181	SD02	O11	鉱滓	88	74	51	390.00	中	F459
222	SD02	O10	鉱滓	30	31	19.0	17.32	3層北	T506
339	SD02	O12	鉱滓	41	37	12	16.49	底上砂	T536

※（　）は最大値を示す。

第５章　直江ニシヤ遺跡

第１節　概要

本遺跡は南北に長い調査区の全体に複数の溝が設けられ、北方に井戸、ピット、土坑が集中している。これらには弥生時代から鎌倉時代の土器、石器、木製品などが含まれている。所々に初殻の入った大型の土坑(SX01～03)や近世、近代の遺物を含む溝があり、近世、近代は農村となっている。地山は北に向かって緩く傾斜している。

第２節　検出遺構

1．井戸

SE01（第59・60図）　調査区の北方、他のピットや土坑から孤立して存在する。平面形は座標北より約30度東に傾く正方形を呈し、一辺約1m、深さ約50㎝を測る。井壁に沿って縦板組隅柱横桟留めの井戸側が据えられている。隅柱は北角の第59図1と南角の2が角柱状で、底から32～42㎝上に全方向に貫通する枘(ほぞ)穴を開けている。東角の3と西角の4は板状で、少なくとも1・2と対応する高さには枘穴がない。縦板は幅80～140㎝前後、厚さ1.0～1.2㎝の板状で、北東辺は5・6の他6枚、南東辺は7の他8枚、南西辺は8の他8枚、北西辺は9の他10枚が残っていた。北西辺は下方からの土圧で縦板が倒れており、南西辺もかなり孕んでいる。横桟は3方向が残っており、北西の桟が失われている。残り3本の横桟は底から約40㎝上にあり、本来は隅柱の枘穴に組み込まれていたものと思われる。南西は土圧によって折れているが、3本とも長さ88～81㎝、幅42～58㎝、厚さ1.3～1.5㎝の板状である。井戸側内の上方、土層7の上面中央で、完形の土師器皿が上向きに4枚（第61図1・3～5）出土した。井戸鎮めを行ったのであろう。よって13世紀前半に埋められたと考えられる。またその下の、北東辺の縦板のそばから漆器椀が出土した。井戸側内からは他に、砥石や加賀焼・越前焼の破片が出土している。また古代の土師器・須恵器の細片、近世の陶磁器・土器の細片が少量混入している。井戸側外からは土師皿と土師器の細片が1点ずつ出土した。

SE02（第60図）　調査区の南方、SD04の底にある。上方の構造は不明であるが、下方は曲物組の井戸側が検出された。曲物は4個あるが、全て厚さ0.6～0.8㎝の板を1～2㎝間隔でケビキし樹皮で縫い止めたもので、下段にはたがが残っている。下段は地山に直接埋められている。土圧で長軸50㎝の長楕円に歪み折れ、高さは23.6㎝を測る。下段の上に長さ37.5㎝、高さ20.8㎝の2段目が乗る。3段目は少しずれて2段目の上に乗り、高さ12.3㎝分のみ残る。上段は3段目の外に回りこんでおり、高さ13.7㎝を残して上は削り取られる。井戸側内は地盤が不安定で崩落の危険があったため掘りきれなかったが、本来の地山（SD04の上面）からの深さは1.4m以上となり、覆土は黄灰色のシルトであった。井戸側内から土師器と須恵器の細片が1、2点出土した。

2．土坑

SK01（第60図）　調査区中央に孤立している。南北に長い長方形で、箱形に掘られ、南の底が一段低くなっている。長軸136㎝、最深部47㎝を測る。古代の土師器・須恵器の細片が数点出土した。

3．ピット

P01　調査区中央に孤立して存在する。東西に長い楕円形で、東西端の底に小穴がある。長軸56㎝、最深部28㎝を測る。覆土は暗褐色粘質土で、土師器の細片数点と須恵器の細片2点が出土した。

P03　調査区北方の、ピットが集中している箇所に存在する。南北に長い楕円形で、長軸24㎝、深さ30㎝を測る。覆土は灰褐色粘質土で、珠洲焼の破片が出土した。

4. 溝・川

SD01（第60図）　調査区南端にあり、西でSD02に切られ、東に流れる。SD02付近では幅190㎝、深さ30㎝程度の広く浅い溝であるが、東では幅90㎝程度、深さ50㎝程度の断面逆台形に緊縮する。東の方が本来の姿であろう。覆土は3段階に分かれて堆積している。合計で36Lコンテナケースに1/3程度の土器が出土した。上層からは土師器・須恵器の細片が10点前後ずつ、珠洲焼が2点、土製品1点(21)、石製品1点(22)が出土した。下層からは土師器有台坏2点(15・16)、土師器・須恵器の細片が数点、珠洲焼の片口鉢(19)、加賀焼のすり鉢(20)が出土した。深さを知るために調査区東端に入れたサブトレンチからは土師器、須恵器、中世陶器の細片が少量出土した。

SD01・02（第60図）　SD01とSD02の上下関係を確認するためにサブトレンチを入れたところである。土師器・須恵器の細片数点、赤瓦1点、面戸瓦1点、緑釉陶器らしきもの1点が出土した。

SD02（第60図）　調査区南西端に片岸だけ現れる。北でSD01を、南東でSD03を切る。幅3.4m以上で、岸辺は広く浅いテラスとなり、中央で60㎝深さに落ち込む。覆土はテラス部分が砂質土の水平堆積、中央は大半が砂質土や砂のレンズ状堆積であるが、所により粘質土も堆積していた。弥生時代から近世までの遺物が定量ずつ混在し、合計で36Lコンテナケースに1/2程度の量がある。サブトレンチ、SD02上層、SD02下層、SD02に分けて取り上げているが、どの区域も異なる時期の遺物が混在している点では同じである。サブトレンチ、SD02上層から骨片が1点ずつ出土している。

SD03（第60図）　調査区南半にあり、南北に流れる。幅3.4m、深さ60㎝で、底の両端が20㎝ほど深くなっているため、断面W字状に見える。覆土は単純なレンズ状堆積であるが、最深部が埋まった後に地山が流れ込んでいる。古代の土師器、須恵器、中世・近世の陶磁器が細片や破片の状態で、36Lコンテナケース1箱分出土した。出土量は古代が若干多く、近世は少ない。上層、下層、その他に分けて取り上げているが、上層と下層は出土量が同様で1/3箱程度である。

SD03・04（第60図）　SD03とSD04の上下関係を見るためにサブトレンチを入れたところである。弥生土器から近世陶磁器までの小片が36Lコンテナケース2/3程度出土した。

SD04（第60図）　調査区南寄りにあり、東西方向に流れる。断面の観察から、土層5・4で埋まる溝が最初にあり、後に土層3のみで占められる幅4mの溝に切られ、拡幅されたことがわかる。そのため覆土中の遺物は年代が逆転している。弥生土器から近世陶磁器までの小片と小石が36Lコンテナケース2/3程度出土した。

SD05（第60図）　調査区南寄りにあり、東西方向に流れる。まず南側に幅50㎝深さ40～60㎝の溝ができ、それが埋まった後で北へ拡幅し、幅180㎝深さ30㎝の浅い溝へと変化する。先行する溝から須恵器と土師器の細片が少量出土し、上層からは弥生土器、土師器、須恵器、中世陶器が細片で少量ずつ、図示した瓦質土器の火鉢と小石が出土した。

SD06（第60図）　調査区北方にあり、東西方向に流れる。幅1.4m、深さ30㎝で、断面逆台形に掘られる。覆土は単純な2層のレンズ状堆積である。東端のサブトレンチからは弥生土器と須恵器の細片が1、2点ずつ出土した。上層からは須恵器と近世陶磁器の細片と土錘が数点ずつ出土した。下層の遺物は比較的時期がまとまっている。珠洲焼・越前焼と中世土器の破片、鉄鍋1点が出土した。

SD07　調査区北方にあり、東西方向に流れる。幅3.0m、深さ20㎝で、覆土は黒褐色の粘質土のみの堆積である。土師器の細片、須恵器の小片、中世陶器・土器、近世の陶胎染付の破片が36Lコンテナケース

に1/6程度、木杭が1本出土した。最も多いのは須恵器で、末産と高松産の様々な器種の小片がある。末産には墨書土器が1点含まれる。

SD08　調査区北方にあり、東西方向に流れる。幅2.2m、深さ10㎝と浅く、覆土は黒褐色の粘質土のみの堆積である。土師器・須恵器の細片が数点と砥石とが出土した。

5. 近代の土坑

SX03　調査区北方の　東端に存在する。東西端は遺構と調査区端に切られて検出できなかったが、南北軸約2.3mの長方形になると思われる。深さ15㎝を測る。覆土は黄褐色粘質土で、瀬戸焼の小片が出土した。

第3節　出土遺物

1. 井戸

SE01（第61図）　1～10を図示した。1･3～5は完形で、井戸側内の上層から出土した一括資料である。非ロクロ成形の土師器皿で、13世紀前半のものと捉えておきたい。5は口縁の周囲1/3ほどに淡い被熱痕が見られ、灯明皿のような使い方が想定できる。また体部外面の下半に、黒い付着物が見られる。2･6･8も井戸側内から出土したが、6は火鉢や風呂の脚であり、混入である可能性がある。7は内外黒漆塗りの椀で、口縁をはじめ体部の所々の漆が摩耗している。8は角柱状の砥石で、4つの側面全てが使用されている。

2. 土坑

SK01（第61図）　11は高松産の須恵器で、広口瓶の口縁である。

3. ピット

P01（第61図）　12・13を図示した。高松産の須恵器蓋と無台坏の細片で、時期は不明である。

P03（第61図）　14を図示した。珠洲焼の片口鉢と思われる。細片で、著しく摩耗している。

4. 溝・川

SD01（第61図）　15～22を図示した。15・16・19・20は下層から、他は上層から出土した。17～19は珠洲焼で、17・19は13世紀前半、18は14世紀前半と捉えておきたい。20は一方の断面に漆継ぎの痕跡がある。21はかなり摩滅し上下も欠けている、器種不明の土製品である。22は図の両端にあたる面は敲打痕があり、他の面は自然面となっている。

SD01・02（第61図）　23・24を図示した。23は面戸瓦と思われる土製品である。24は暗緑灰色の釉がほとんど剥離しているが、陶胎が明るい灰白色を呈しており、緑釉陶器かと思われる。

SD02（第62図）　25～35を図示した。全て破片である。サブトレンチからは25・27が、上層からは35が、下層からは26・28・29・31・34が出土した。30・32・33の出土層位は不明である。26～27の弥生土器はかなり摩滅している。30は内外面の自然釉が剥落している。32は波佐見焼の皿である。34は越前焼の壺の口縁で、端部に降灰による自然釉がかかっている。

SD03（第62・63図）　36～61を図示した。出土量が多く、時期幅も大きいため詳述はしないが、希少なものおよび特筆すべきものとして38の初期須恵器、47～49の輸入青磁がある。

SD03･04（第63･64図）　62～78を図示した。77はごく軟らかく軽い石を磨き、穿孔したものである。

石錘であろうか。

SD04（第64図） 79～98を図示した。88～90は輸入青磁の碗である。92は内面赤漆、外面黒漆塗りの小ぶりの椀である。ほぼ完形であるが、口縁と高台の端部はほとんどが摩耗および欠損している。

SD05（第65図） 99～101を図示した。99は甕の頸部で、ごく小さな破片である。外面は稜線の上下に精巧な波状文を施している。内面は降灰している。101は瓦質土器の火鉢の小片である。外面の凸帯のうち上方は貼り付けによるもので、一部が剥がれている。また上下の凸帯の間にはかなり摩滅しているが菊花のような押印がわずかに認められる。生産地である奈良では、14世紀後半から15世紀前半の年代が与えられている。

SD06（第65図） 102～109を図示した。105～107の土錘だけが上層、他は下層からの出土遺物である。103・104は越前焼の壺である。104の体部下端から底部外面にかけて著しく摩耗している。また底部内面から体部下半にかけて、全面が煤化している。壺としての機能を終えてから、たとえば口縁から体部上半が欠けてから内部で火を使うような再利用をするのであろうか。体部外面の下半以外が変色しているのも、被熱によるものかもしれない。109の鉄鍋は小さな破片であるが、あまり腐食が進んでおらず、やや新しい印象を受ける。

SD07（第65図） 110～116を図示した。110～112は末産の須恵器である。110・111は8世紀後半と考えられる。114は天目茶碗で、産地・時期は不明である。116はすり鉢で、口縁端部から内面にかけて著しく摩耗している。図の右側にあたる断面には全面に漆継ぎの痕跡がある。

SD08（第65図） 117を図示した。凝灰岩製の砥石片である。残存している面は3面あり、全て使用されている。

5. 近代の土坑

SX03（第65図） 118を図示した。瀬戸焼のおろし皿である。

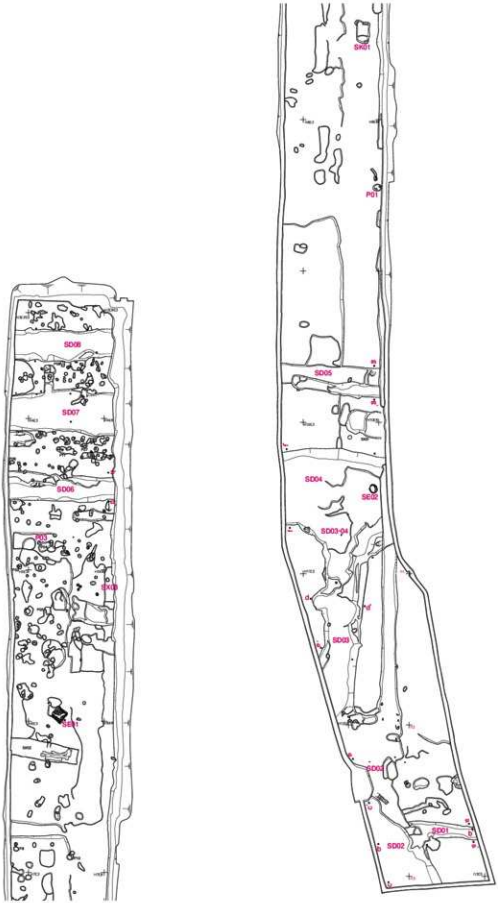
6. 遺構外（第65・66図）

119～136を図示した。その他に、弥生土器から近代までの遺物が36Lコンテナケース1/2程度出土している。119～121は初期須恵器である。119・121は高坏で、明るい青灰色を呈し、坏部の内外面は摩耗している。120は明るい灰白色を呈し、外面に降灰が見られ、内面は摩耗している。126・128は須恵器の甕の破片で、126は降灰が、128には外面に別個体の破片が付着している。127は土師器の甑か甕の把手である。表面が著しく摩滅・剥離している。7世紀頃のものであろうか。129は越前焼のすり鉢の細片であるが、内面の摩耗は認められない。130は瓦質土器の火鉢である。133は陶器の細片で、灰色の地に白泥で文様を描いている。朝鮮陶器か近世の三島手のふたつの可能性をあげておきたい。134・135は輸入陶磁器の白磁と青磁である。136は火箸で、緑色に変色しているが腐食が進んでおらず、新しいものとの印象を受ける。

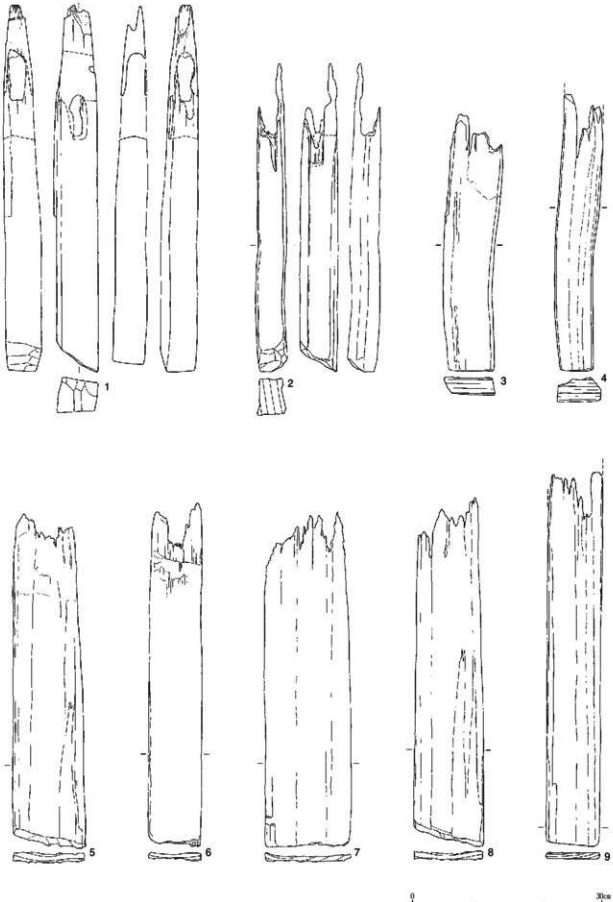
第4節　小結

包含層や溝の中に弥生時代、古墳時代中期、古代、中世の遺物が定量含まれるので、調査区内かその近辺にはこれらの時代の集落があったと想定される。

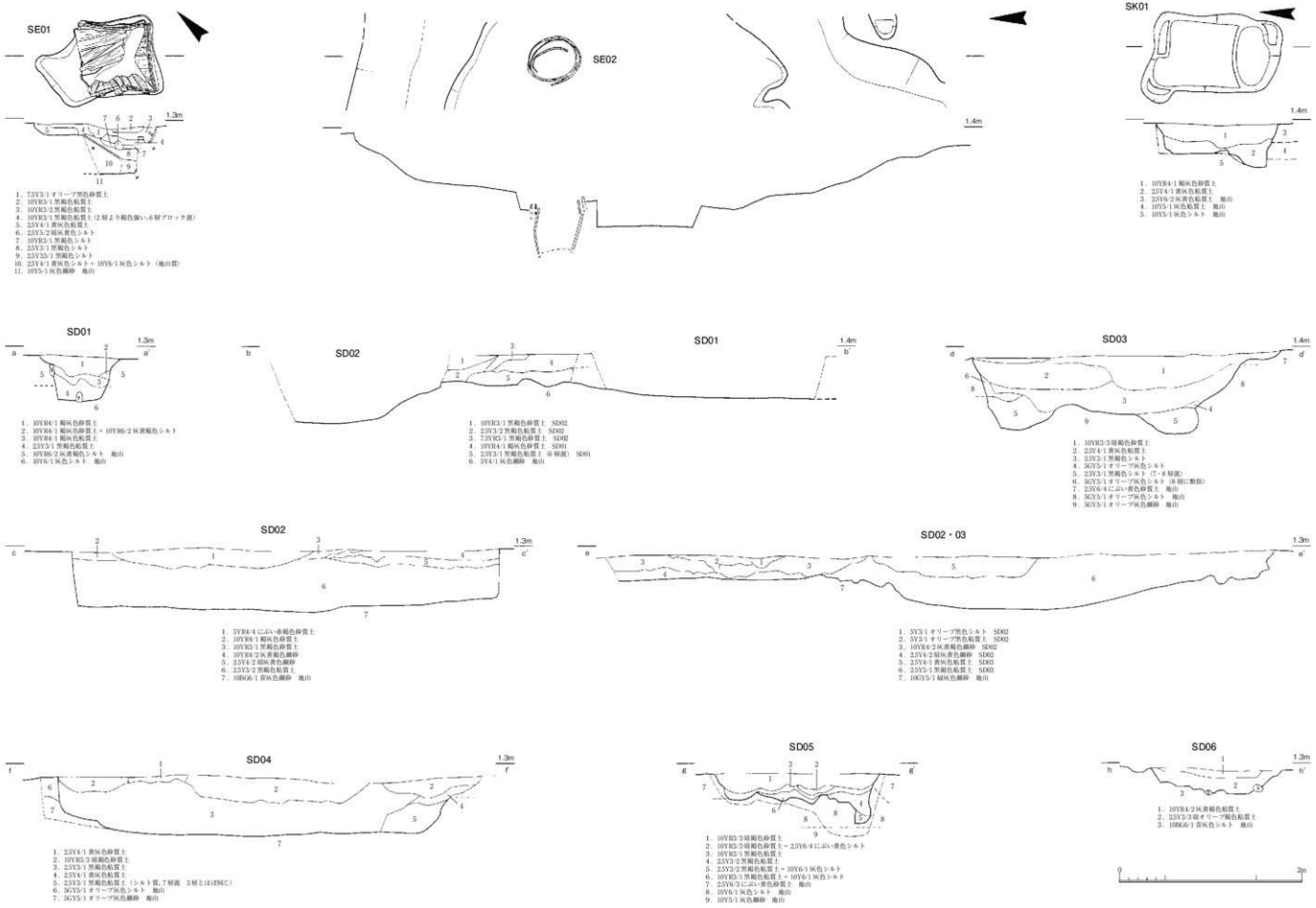
しかし時期が特定できる、良好な出土遺物を伴う遺構は、13世紀前半に埋まったと考えられる井戸SE01しかない。SD04に切られているSE02に象徴されるように、近世以前の遺構は地山ごと削平されているのであろうか。



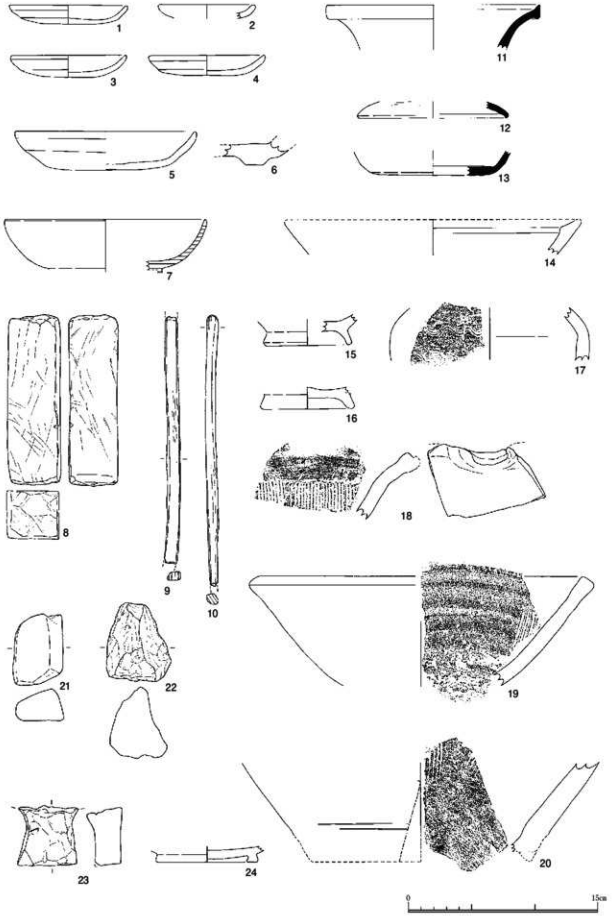
第58図　遺構全体図(S=1/250)



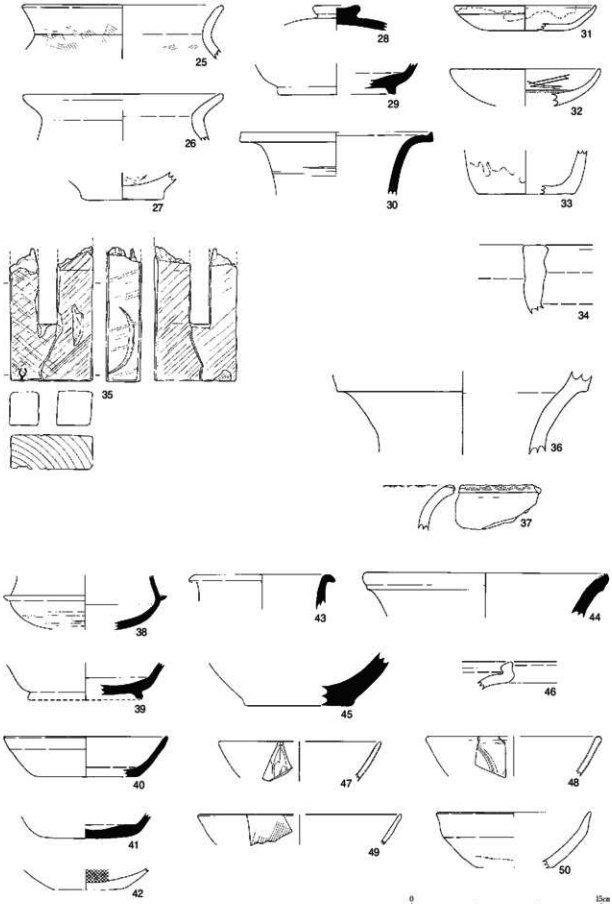
第59図　SE01 井戸側材〔S=1/6〕



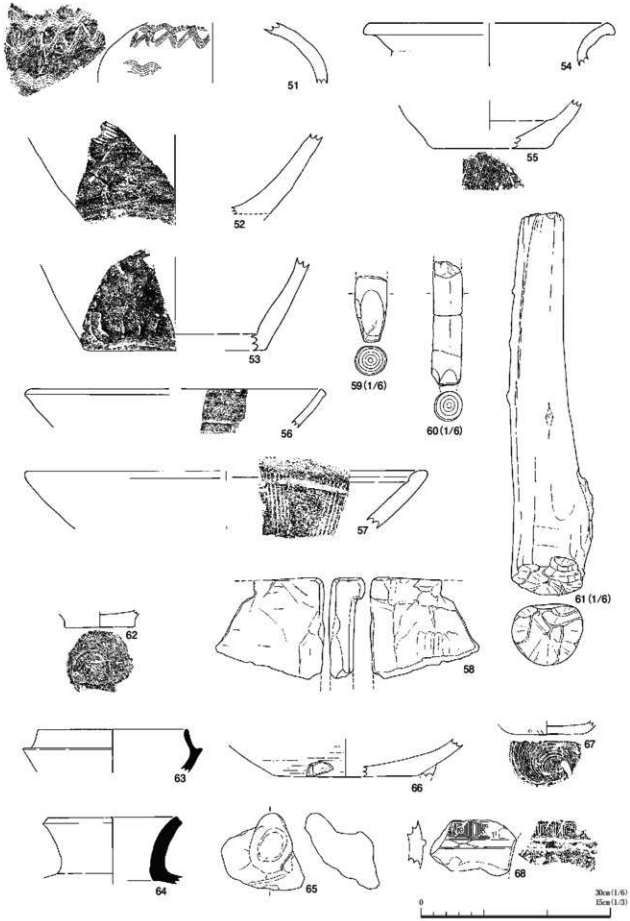
第60図　SE01、02、SK01、SD01～06〔S=1/40〕



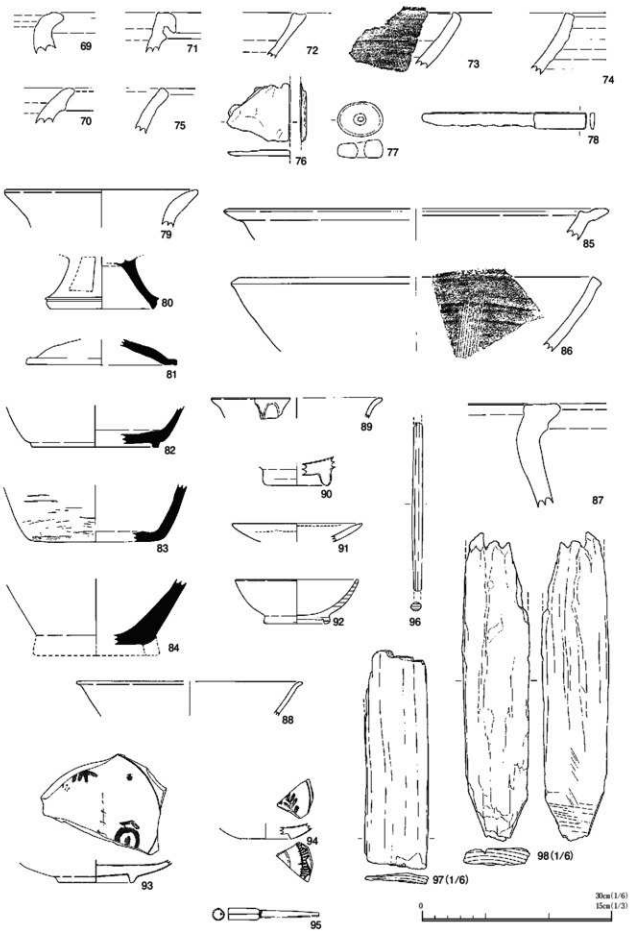
第61図　SE01（1～10）、SK01（11）、P01（12、13）、03（14）、
SD01（15～22）、01・02（23、24）出土遺物〔S=1/3〕



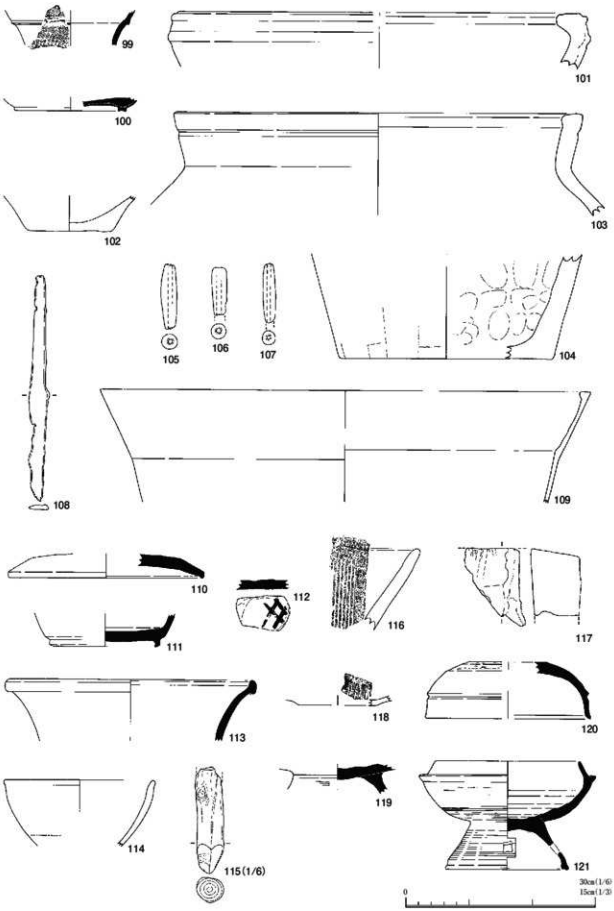
第62図　SD02（25～35）、03（36～42、45～50）、03・02（43、44）出土遺物〔S=1/3〕



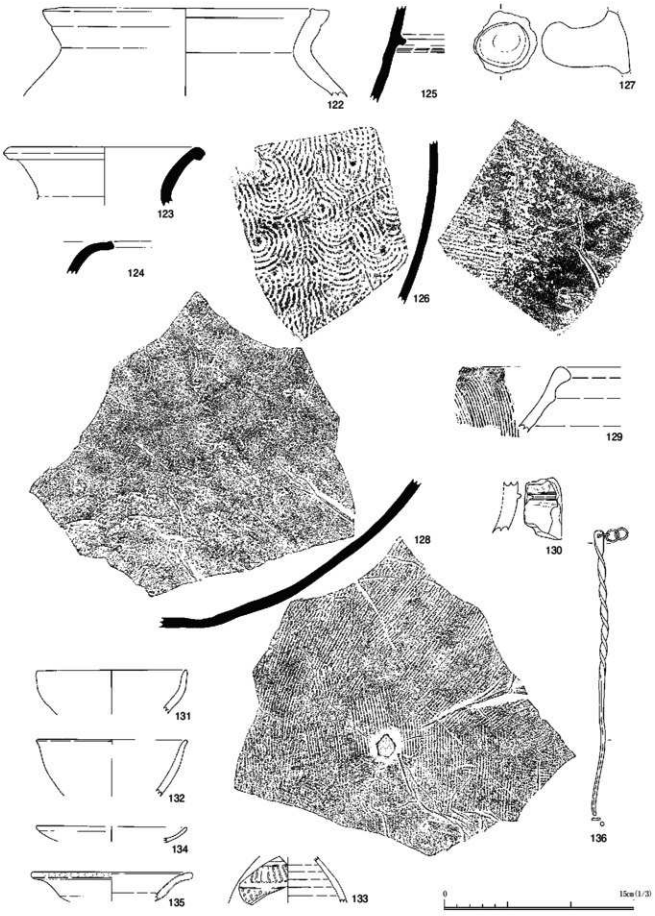
第63図　SD03（51～61）、03・04（62～68）出土遺物〔S=1/3・6〕



第64図　SD03・04（69～78）、04（79～98）出土遺物〔S=1/3・6〕



第65図　SD05（99～101）、06（102～109）、07（110～116）、08（117）、SX03（118）、
遺構外（119～121）出土遺物〔S=1/3・6〕



第66図　遺構外出土遺物(S=1/3)

第15表　井戸枠(縦板等)計測表(1)

(単位：mm)

No.	遺構	地区	器種	長	幅	厚	根枠	木取	備考	実測No.
1	SE01	I5/6	杜	(582)	70	70		芯去	北スミ	M154
2	SE01	I5/6	杜	(490)	46	58		芯去	南スミ	E161
3	SE01	I5/6	杜	(408)	84	32	針	芯去	東スミ	S228
4	SE01	I5/6	杜	(440)	65	40	針	芯去	西スミ	T310
5	SE01	I5/6	縦板	(532)	116	16	針	板目	北東	E165

第15表　井戸枠(縦板等)計測表(2)

(単位：mm)

No.	遺構	地区	器種	長	幅	厚	根枠	木取	備考	実測No.
6	SE01	I5/6	縦板	(546)	82	12	針	板目	北東	E164
7	SE01	I5/6	縦板	(532)	136	10	針	板目	南東	E167
8	SE01	I5/6	縦板	(552)	108	10	針	板目	南西	E166
9	SE01	I5/6	縦板	(594)	84	10	針	板目	北西	T308

第16表　土器・陶磁器・土製品観察表

(単位：mm)

No.	遺構	地区	種類	器種	口(長)	底(幅)	高(厚.径)	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調(釉色調)	内面色調(素地色調)	礫	砂	雲	赤	焼成	備考	実測No.
1	SE01	I5/6	土師器	皿	92	50	15.0	メントリ・ヨコナデナデ	ナデ	ナデ	淡橙	淡灰褐		少		少	並	上層粉内	T546
2	SE01	I5/6	土師器	皿	74			ナデ	ナデ		淡灰褐	淡灰褐		少		並	並	粉内	F295
3	SE01	I5/6	土師器	皿	90	60	18.0	メントリ・ヨコナデ	ナデ	ナデ	淡黄灰	黄褐		少		並	並	粉内上方	E1116
4	SE01	I5/6	土師器	皿	92	54	16	メントリ・ヨコナデ	ナデ	ナデ	淡黄灰褐	淡橙灰		多		並	並	粉内上方	E1117
5	SE01	I5/6	土師器	皿	142	94	31	メントリ・ヨコナデ・ナデ	ナデ	ナデ・敷物痕	淡灰褐	淡黄褐		少		少	並	上層粉内	T547
6	SE01	I5/6	土師器	鍋鉢				ナデ	ケズリ		淡灰褐	淡灰褐	少	少		少	並	粉内	F297
11	SK01	I7	須恵器	椀	168			ナデ	ナデ		暗灰	灰	少	少			並		F294
12	P01	I8	須恵器	蓋				ケズリ・ナデ	ナデ		灰白	灰白	並				並		T415
13	P01	I8	須恵器	無台杯		90		ナデ	ナデ	ナデ	灰	灰	少	少			並		T416
14	P03	I4	陶器	片口鉢				ナデ	ナデ		灰	灰	並	多	少	並	並	1/2層	T417
15	SD01	I1/J12	土師器	有台椀		70		ナデ	ナデ	ナデ	淡橙灰褐	灰褐		少			並	下層内黒ｍ	F338
16	SD01	J12	土師器	有台椀		74		ナデ	ナデ	ナデ	淡橙褐	淡橙褐	少	少		少	並	下層	F337
17	SD01	J12	珠洲	甕				ナデ	ナデ		灰白	灰白		少	少		並	上層	F339
18	SD01	J12	珠洲	すり鉢				ナデ	ナデ・卸目		灰	灰	少	少	少		並	上層	F346
19	SD01	J12	珠洲	すり鉢				ナデ	ナデ・卸目		灰	灰	少	並	少	少	並	下層	F335
20	SD01	J12	加賀ｍ	すり鉢				ナデ・ケズリ	ナデ・卸目		橙灰褐	灰褐		少		少	並	下層	F336
21	SD01	J12	土製品	不明							橙灰褐		少	少		少	並	上層	F354
23	SD01/02	J12	陶器	風炉瓦							淡橙褐		少	並		並	並	サブトレ	F352
24	SD01/02	J12	越前ｍ	甕・鉢		81				無釉	淡緑灰	淡灰					並	サブトレ	F353
25	SD02	I1/J12	弥生	壺	158			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ		赤褐		多		並		並	サブトレ	F342
26	SD02	I1/J12	弥生	壺	155			マメツ	マメツ		橙灰褐	橙灰褐	並	多	少	並	並	下層	F348
27	SD02	I1/J12	弥生	壺・甕		65		ナデ	ケズリ		淡灰褐	淡灰褐	少	少			並	サブトレ	F341
28	SD02	I1/J12	須恵器	蓋		38		ナデ	ナデ		淡灰	淡灰		少			並	下層	F349
29	SD02	I1/J12	須恵器	有台杯		94		ナデ	ナデ	ナデ	暗灰	暗灰		並			並	下層白粒多	F351
30	SD02	I12	須恵器	椀	150			ナデ	ナデ		灰	灰		少			並	北	F344
31	SD02	I1/J12	土師器	皿	110	72	20	ヨコナデ・指圧痕	ヨコナデ・指圧痕	ナデ	淡灰褐	淡灰褐		並	少		並	下層	F350
32	SD02	I12	須恵器	椀	118			透明釉	透明釉		透明	灰白					並	北	F345
33	SD02	I11	陶器	瓶頸		78		鉄釉・鉄泥ｍ	無釉	鉄泥ｍ	黒褐	灰褐					並		F343
34	SD02	I1/J12	越前	甕				ナデ	ナデ		黒	黒		並			並	下層	F347
36	SD03	I11	弥生	壺				ナデ	ナデ		淡橙褐	淡橙褐	少	多		多	並	下層	F310
37	SD03	I11	弥生	壺				ナデ	マメツ		灰褐	灰褐	少	多		少	並	下層	F301
38	SD03	I11	須恵器	坏				ナデ・ケズリ	ナデ		灰	灰		少			並	下層	F308
39	SD03	I11	須恵器	有台杯				ナデ	ナデ	ヘラ切り後ナデ	淡灰	淡灰		並			並	上層	F300
40	SD03	I11	須恵器	無台杯	128	84	32	ナデ	ナデ	ヘラ切り・ヘラ起シ	灰	灰	少	少			並	下層	F303
41	SD03	I11	須恵器	無台杯		74		ナデ	ナデ	ヘラ切り	灰	灰	少	並			並	上層	F298
42	SD03	I11	内黒	無台椀		55		ナデ	ミガキ	ナデ	淡灰褐	黒	少	少	少	少	並	下層	F311
43	SD03/02	I11	須恵器	壺	105			ナデ	ナデ		淡灰	淡灰		多			並	トレンチ	F319
44	SD03/02	I11	須恵器	壺	90			ナデ	ナデ		灰	灰		少			並	トレンチ	F318
45	SD03	I11	須恵器	壺		86		ナデ	ナデ	ナデ	灰	灰		少			並	下層	F304
46	SD03	I11	土師器	壺				ナデ	ナデ		淡橙灰褐	淡灰褐		並		少	並	下層	F309
47	SD03	I11	青磁	椀				青磁釉	青磁釉		緑緑灰	白灰					並	上層龍泉Ⅱｂ	F302
48	SD03	I11	青磁	椀				青磁釉	青磁釉		緑灰	淡灰					並	下層	F314
49	SD03	I11	青磁	椀				青磁釉	青磁釉		オリーブ	淡灰					並	底上同安青磁碗	F320
50	SD03	I11	陶器	天目茶碗	122	62	44	鉄釉	鉄釉	無釉	茶褐	淡灰褐					並	下層	F313
51	SD03	I11	珠洲	壺				ナデ	ナデ		灰	灰		並	少		並	下層	F305
52	SD03	I11	珠洲	壺				タタキ・ナデ	ナデ		暗灰	暗灰		並	少		並		F317
53	SD03	I11	加賀	壺・甕		146		ナデ・工具痕	ナデ		淡黒灰	淡黒灰	並	並			並	サブトレ	F315
54	SD03	I11	珠洲	壺				ナデ	ナデ		暗灰	暗灰		多			並	下層	F306
55	SD03	I11	珠洲	鉢ｍ		100		ナデ	ナデ	静止糸切り	淡灰	淡灰		少	少		並	上層	F299
56	SD03	I11	珠洲	すり鉢				ナデ	ナデ・卸目		暗灰	暗灰		並			並	下層	F307
57	SD03	I11	越前	すり鉢				ナデ	ナデ・卸目		淡灰褐	淡灰褐		少		並	並		F316
62	SD03/04	I10/I11	土師器	鍋台脚・皿		56		ナデ	ナデ	回転糸切り	淡橙褐	淡橙褐	少	並		少	並	表層	T405
63	SD03/04	I10/I11	須恵器	坏	138			ナデ	ナデ		灰白	灰白		並			並	表層	T401
64	SD03/04	I10	須恵器	瓶頸	102			ナデ	ナデ		暗灰	暗灰		少			並	底上	T412
65	SD03/04	I10	土師器	把手							淡橙褐	淡灰褐		並	少	並	並	上層	T411
66	SD03/04	I10/I11	瀬戸	大皿		118		ケズリ	ナデ	ヘラ切り	灰	灰		少			並	表層	T402
67	SD03/04	I10/I11	瀬戸	瓶頸ｍ		56		ナデ	ナデ	回転糸切り	灰	灰		少			並	表層	T403
68	SD03/04	I10/I11	瓦器	火鉢				マメツ	ナデ		暗灰	暗灰		少		少	並	表層	T409
69	SD03/04	I10	珠洲	壺				ナデ	ナデ		灰褐	灰褐	少	並		少	並	上層	T407
70	SD03/04	I10/I11	越前ｍ	壺				ナデ	ナデ		橙褐	暗灰褐	少	少			並	表層	T404
71	SD03/04	I10/I11	須恵器ｍ	壺ｍ				ナデ	ナデ		暗灰	暗灰	少	並			並		T400
72	SD03/04	I10	珠洲	鉢				ナデ	ナデ		暗灰	暗灰		並			並	上層	T406
73	SD03/04	I10/I11	珠洲	すり鉢				ナデ	ナデ・卸目		灰	灰	少	少	多		並	表層	T399

第16表　土器・陶磁器・土製品観察表

（単位：mm）

No.	遺構	地区	種類	器種	口（長）	底（幅）	高（厚径）	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調（釉色調）	内面色調（素地色調）	礫	砂	雲	赤	焼成	備考	実測No.
74	SD03/04	I10	珠洲	鉢				ナデ	ナデ		釉灰	灰	少	目		並	上質		T413
75	SD03/04	I10	越前	片口鉢				ナデ	ナデ		茶褐	赤褐	並	多		並	上質		T408
79	SD04	I10	弥生	壺	150			ハケリ	ハケリ		淡橙灰褐	淡橙灰褐	多	多		多	並	上質	F323
80	SD04	I10	須恵器	高坏		87		ナデ	ナデ		灰	釉灰		目			並	SE02神外	F321
81	SD04	I10	須恵器	壺	118			ナデ	ナデ		淡灰	淡灰	少	少			並	上質	F324
82	SD04	I10	須恵器	有台坏		101		ナデ	ナデ	ヘラ切リ	灰褐	淡灰褐		少			並	底上（SE02）	F334
83	SD04	I10	須恵器	瓶類		104		ナデ	ナデ	ケズリ・ナデ	釉灰	灰	少	目			並	底上	F332
84	SD04	I10	須恵器	瓶				ナデ	ナデ	ナデ	釉灰	灰	少	並			並	底上（SE02）	F330
85	SD04	I10	瀬戸	折縁皿				灰釉	灰釉		淡緑灰	白褐					並	上質	F329
86	SD04	I10	珠洲	すり鉢				ナデ	ナデ・卸目		灰	灰	少	並	少		並	底上（SE02）	F311
87	SD04	I10	越前	壺				ナデ	ナデ		灰褐	灰褐		少			並	底上（SE02）	F333
88	SD04	I10	緑釉	椀				緑釉	緑釉		灰	淡緑灰					並	サブトレ	F485
89	SD04	I10	青磁	坏				青磁釉	青磁釉		緑灰	淡灰					並	下層	F328
90	SD04	I10	青磁	椀		54		青磁釉	青磁釉		淡青緑灰	淡灰					並	下層	F327
91	SD04	I10	土師器	皿	102			ナデ	ナデ		淡灰褐	淡灰褐		並		少	並	上質	F322
93	SD04	I10	陶器	皿		61		透明釉	透明釉		透明	灰白					並	下層	F325
94	SD04	I10	陶器	皿		40		透明釉	透明釉	無釉	透明	淡灰					並	下層	F326
99	SD05	I9	須恵器	甕				ナデ	ナデ		濃灰	淡灰		少			並		S293
100	SD05	I9	須恵器	有台坏		88		ナデ	ナデ	ヘラ切リ後ナデ	灰	灰		並			並		S300
101	SD06	I9	瓦器	火鉢							淡橙褐	淡橙褐	少	並	少	少	並	上質	S292
102	SD06	I4	土師器	底部		62		マメツ	マメツ	マメツ	淡橙白	淡橙白		並		少	並	下層	S299
103	SD06	I4	越前	壺	320			ナデ	ナデ		茶褐	茶褐	少	並			並	下層	S297
104	SD06		越前	底部		168		ナデ・ケズリ	ナデ・指圧痕	ナデ	茶褐	灰褐	少	並			並	下層	S298
105	SD06	I4	土製品	土錘	(52)	13	3				淡灰褐		少		少	少	並	上質5.7g	S295
106	SD06	I4	土製品	土錘	(36)	12	4				淡灰褐				少	少	並	上質3.32g	S296
107	SD06	I4	土製品	土錘	(47)	10	3				淡黄褐				少	少	並	上質3.8g	S294
110	SD07	I3/4	須恵器	壺	156			ナデ	ナデ		灰	灰		並			並		S303
111	SD07	I3/4	須恵器	有台坏		88		ナデ	ナデ	ヘラ切リ後ナデ	灰	灰	少	並			並		S301
112	SD07	I3/4	須恵器	不明					ナデ	ヘラ切リ	淡灰	淡灰	少	並			並	叩書	S305
113	SD07	I3/4	須恵器	壺・瓶	194			ナデ	ナデ		灰	淡灰		少			並		S302
114	SD07	I3/4	陶器	天目茶碗	118			鉄釉	鉄釉		茶褐	淡橙褐					並		S304
116	SD07	I3/4	陶器	すり鉢				ナデ	ナ・卸目		赤橙褐	赤橙褐	少	並			並		S307
118	SX03	I5/6	瀬戸	卸目				灰釉	灰釉	無釉	淡緑灰	淡灰褐					並		T420
119	遺構外		須恵器	高坏				ナデ	ナデ		淡赤灰	灰		少			並		T434
120	遺構外	I4	須恵器	壺				ケズリ・ナデ	ナデ		灰	灰白		並			並		T418
121	遺構外		須恵器	高坏	114	96	86	ナデ・ケズリ	ナデ		釉灰	灰		少			並		T424
122	遺構外	I6	越前	壺	202			ナデ	ナデ		灰	橙灰	少	並			並		T426
123	遺構外		須恵器	壺ｂ	146			ナデ	ナデ		灰白	灰白	並				並		T423
124	遺構外	I3	須恵器	壺・瓶				ナデ	ナデ		灰	灰	少	並			並		T427
125	遺構外	I12	須恵器	双耳瓶				ナデ	ナデ		灰	灰	少	多			並	凸帯付	T425
126	遺構外		須恵器	壺ｂ				タタキ	当て具		灰	灰		少			並		T421
127	遺構外	I11	土師器	把手							淡灰褐	淡灰褐	多	多		並	並		T435
128	遺構外		須恵器	壺				タタキ後ナデ	当て具後ナデ		釉灰	灰	少	並			並		T422
129	遺構外	I5/6	越前	すり鉢				ナデ	ナデ・卸目		灰	黒灰		多			並		T428
130	遺構外	I5	瓦器	火鉢				ミガキ	ミガキ		黒	黒		並			並		T419
131	遺構外	I9	陶器	天目茶碗	118			鉄釉	鉄釉		褐茶	灰					並		T431
132	遺構外	I3	陶器	天目茶碗	118			サビ釉	サビ釉		褐	淡茶灰					並		T430
133	遺構外	I4	陶器	瓶				灰	無釉		透明	灰					並	朝鮮・三島ｂ	T429
134	遺構外	I5	白磁	皿				透明	透明		透明	白					並		T433
135	遺構外	I3	青磁	皿	126			青磁釉	青磁釉		褐緑灰	灰白					並		T432

第17表　漆製品観察表

（単位：mm）

No.	遺構	地区	器種	口	底	高	外面塗	内面塗	外底面塗	樹種	木取	備考	実測No.
7	SE01	I5/6	椀	160			黒漆	黒漆			横木	柿内ｂ	S398
92	SD04	I10	椀	98	52	35	黒漆	赤漆	黒漆		横木		F397

第18表　木製品観察表

（単位：mm）

No.	遺構	地区	種別	長	幅	厚	樹種	木取	備考	実測No.
9	SE01	I5/6	棒状	(196)	11	7	針	芯去	角	T330
10	SE01	I5/6	棒状	(215)	9	8	針	芯去	角	T331
35	SD02	I12	角材	(106)	65	27	針	芯去	北	T332
59	SD03	I11	板状	(105)	50	45	広	芯去	上層	S246
60	SD03	I11	板状	(197)	46	47	広	芯去	上層	S247
61	SD03		柱方	610	126	106	広	芯持		M158
96	SD04	I10	棒状	(135)	8	6	針	芯去	SE02 神外多角	S245
97	SD04	I10	棚板カ	(359)	100	13	針	板目	SE02 神外	S244
98	SD04	I10	板状	(490)	104	26	広ｂ	板目	SE02 屋カ ｂ	F255
115	SD07	I3/4	杭	(165)	43	42	広	芯持		T333

第19表　石製品観察表

（単位：mm）

No.	遺構	地区	種別	長	幅	厚	重量(g)	備考	実測No.
8	SE01	I5/6	砥石	135	42	38	426.00	神内	F296
22	SD01	J12	火打石カ	61	51	56	180.00	上層メノウ	F340
58	SD03	I11	行火	(80)	(85)	27	120.75	下層	F312
76	SD03/04	I12	砥石	(46)	(50)	5	15.62	サブトレ	T414
77	SD03/04	I10	石錘	35	27	14	12.67	上層孔径5㎜	T410
117	SD08	I3	砥石	(62)	44	40	85.00		S306

第20表　金属製品観察表

（単位：mm）

No.	遺構	地区	器種	長	幅	厚	重量(g)	備考	実測No.
78	SD03/04	I10	刀子カ	130	13	5	18.58	底上鉄	T578
95	SD04	I10	煙草吸口	72	9	9	4.93	下層真鍮	T580
108	SD06	I4	刀子カ	(179)	(11)	(4)	12.89	下層鉄	T579
109	SD06	I4	鉄鏃	390				下層	S391
136	遺構外	I5	火箸	226	7	8	20.03	鉄	T553

※（　）は最大値を示す。

第６章　直江西遺跡

第１節　概要

本遺跡では主に弥生時代中期から古墳時代前期の土坑や川跡が見つかっており、同時期の土器や木製品が出土している。ただし川跡は、大半が江戸時代から明治時代の川跡と重複しているため、その大半が失われている。調査区の東方には幾つかピットがあるが、塀や建物を構成するものは認められない。地山は灰白色の軟らかい粘質土で、南西に向かって緩く傾斜している。

第２節　検出遺構

1．土坑

SK01（第68図）　調査区の中央、SD03の縁辺にある。東西方向の浅い溝状を呈し、底は細かい凹凸がある。西端は切れているが長さ約3.1m、幅0.6m、深さ約0.2mを測る。埋土は自然に堆積したようなシルトで、古墳時代前期の土師器の細片が数点と小石が出土している。

SK02　調査区の中央、SK01とSD03の間にある。SK01と同様の形態で、SD03に切られる。古墳時代の土師器の細片が数点出土した。それらはまとまりがなく、混入したもののようである。

SK03　調査区の中央に孤立して存在する。長軸約2.2mの不整楕円形を呈し、深さ0.15mを測る。弥生・古墳時代の甕の細片が数点出土した。

SK04　調査区の中央、SD03の縁にある。長軸約1.9m、短軸1.2mの楕円形を呈し、深さ約0.2mを測る。埋土は暗灰色の粘質土で、同一個体と思われる古墳時代の甕の体部片が2点出土した。1点は内面に厚くコゲのようなものがついており、1点は外面が煤化している。

2．溝・川

SD01（第68図）　遺物への注記は、「SD01」と「南北トレンチ・東西トレンチ　河」の2種類がある。調査区の南半にあり、緩く蛇行して南北方向に流れる。調査区内では幅も底も検出できず、表層とトレンチ部分だけを掘削した。埋土は水平に3層堆積している。上層からは弥生土器、中世陶器、近世陶磁器が小片で数点ずつ出土した。中・下層からは弥生土器、須恵器、中世陶器および近世陶磁器の破片が多く（36Lコンテナの1/3程度）出土し、小石や珪化木10点余りが混じっていた。

SD02（第68図）　調査区の北端にあり、東西方向に流れる。幅1.3～1.5mであるが、調査区の両端では拡張している。深さ0.5m前後を測る。断面図から、上層と下層で埋土の堆積状況が異なることがわかる。珠洲焼と加賀焼の細片、土錘、石皿の破片、炭化材の細片、小礫が出土した。また、底から完形に近い漆器椀が1点出土した。SD04を切っているため、弥生土器も混入している。

SD03（第68図）　調査区の南半にあり、北東－南西方向に流れる。SD01に切られて南岸が検出できないため、幅は6.6m以上と推測する。また底も検出できておらず、深さ1.2m以上としか推測できない。埋土は上下に分かれ、水平に堆積する。上層からは弥生土器の細片が数点出土した。また中央部には自然木や板状、棒状、木材が集積していた。下層からは大量（36Lコンテナの1/3程度）の弥生土器、大量の木製品、および礫と堅果の殻が数点出土した。

SD04（第67図）　調査区の北端にある。北から南へ流れ、SD02に切られる。溝本体は幅0.6m、南へ行くと上面が広がって幅約3.4mになる。深さ0.2mを測り、溝としてはやや浅い。弥生土器が数点出土した。ほとんどが摩滅した細片である。

3. ピット

P01　調査区の中央、SD01の縁辺にあり、直径約30～40㎝、深さ約23㎝の円筒形に掘られる。埋土は黒色粘質土で、古墳時代の土師器の細片が1点出土した。

第3節　出土遺物

1. 土坑

SK01（第69図）　1は近江系の甕の、受け口状口縁の細片である。櫛状工具による斜行短線文があり、外面全体が煤化している。弥生時代後期のものであろう。2はくの字状口縁の甕で、口縁端部から体部外面にかけて煤化している。胎土に大粒の砂礫を含み、体部内面のケズリや、体部外面に残る粘土紐接合痕から、やや作りが粗いように感じられる。

SK03（第69図）　3は焼成が甘く内外面がかなり摩滅している。口縁端部は櫛状工具によりキザミが施され、内面も同じ工具による刺突が面的に行われている。弥生時代中期後葉の壺である。

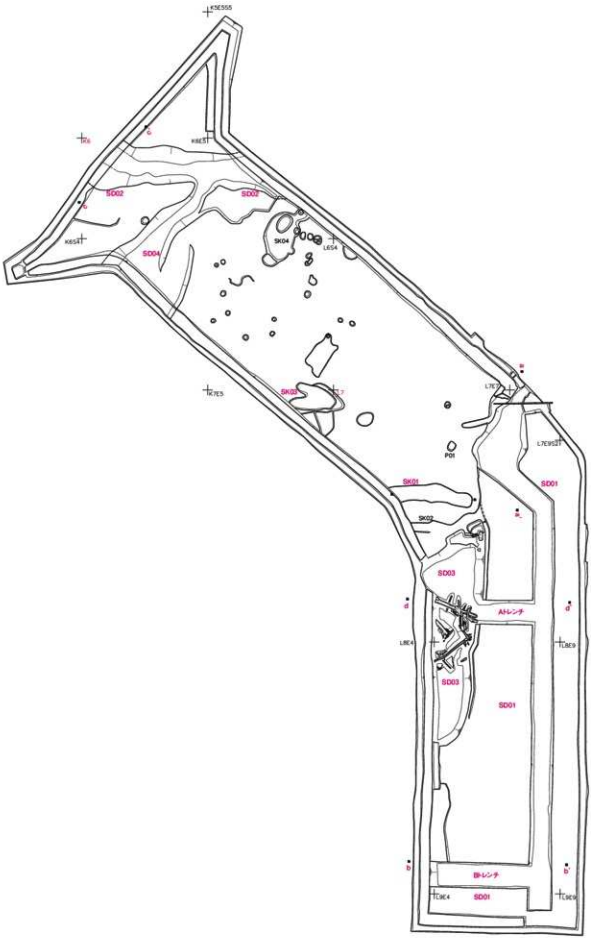
2. 溝・川

SD01（第69図）　4～12を図示した。6・7は肥前焼の陶器である。6は1/4程度残存している口縁の全てと体部内面一部に灯明痕がある。見込みと高台内外の3箇所に砂目がある。17世紀30年代のものである。7は京焼風の碗であるが、高台内は施釉されている。体部外面に鉄絵の一部が見える。体部上半に被熱痕がある。17世紀後半代のものである。9・10は弥生時代中期後葉の甕である。発色は異なるが胎土や内外面の調整および外面全体が煤化している点がよく似ている。12は越前焼のすり鉢のごく小さな破片で、内面全てが摩耗している。16世紀後半のものと考えられる。

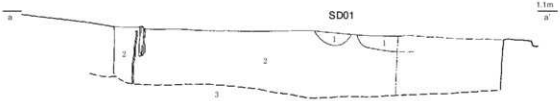
SD02（第69・72図）　13・14・40・41を図示した。13は18世紀前半の波佐見焼の皿である。高台端部が著しく摩耗している。14は石皿である。小さな破片で、内面全体が著しく摩耗している。40は漆器椀である。表面は所々が剥落しているが、黒漆の地に赤漆の絵が描かれている。高台内に「小」のような記号が、体部外面の3方と見込みに扇が、稚拙な筆遣いで描かれている。41は大型の土錘である。表面に横方向の指頭圧痕が見られる。孔の上端が側面に及ぶまで著しく摩耗している。

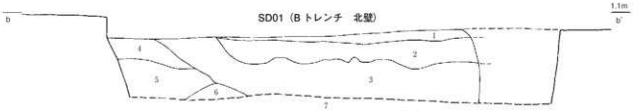
SD03（第70～72図）　17～27の弥生土器と28～39の木製品を図示した。18・19は加飾する壺の肩部である。それぞれ櫛状工具により直線文、簾状文、列点文などを施している。18は外面が煤化しており、上層に同一個体の破片が2点ある。20～23は弥生中期後葉の壺の口縁で、さまざまな技法で端部を波状に見せている。21のみ外面全体が煤化している。24・25はくの字状口縁で、同一個体である可能性がある。24の口縁の一部が煤化している。図示していないが、有段擬凹線口縁の甕も1点ある。よって土器の年代は弥生時代中期後葉から終末期の幅をもつが、主体となるのは中期であろう。28は履物の可能性を想定しているものであり、図の上辺が右上がりであることから左足用と考えられる。上、左右辺は短く立ち上がるが、下辺に立ち上がりは見られない。左側側面の中央付近に略方形の孔があり、紐を通して足の甲にかけたものと考えられる。内面は平滑に調整されているが、図の断面で示したように平坦ではない。裏面は凹凸が多く、使用の痕跡であろう。30は火鑽臼（ひきうす）である。火鑽溝はほぼ等間隔に8箇所あいているが、その上で火起こしが行われたのは4箇所だけである。32は丁寧に細工された木針状である。上方は断面円形で幅1.2㎝の溝を水平に巡らせている。中央から下方は断面長楕円形で、中央が太くなっている。南新保D遺跡の溝（金沢市教委1981）に類例がある。有頭棒、または儀器と分類される（山田昌久2003）。

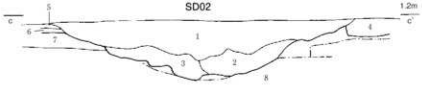
SD04（第69図）　15は無文の有段口縁の甕、16は別個体の甕の底で、内外面に板状工具の施工痕がある。ともに弥生時代終末期のものであろう。

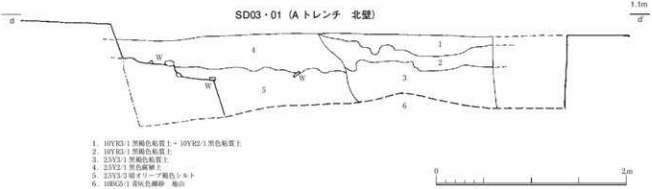


第67図　遺構全体図〔S=1/200〕

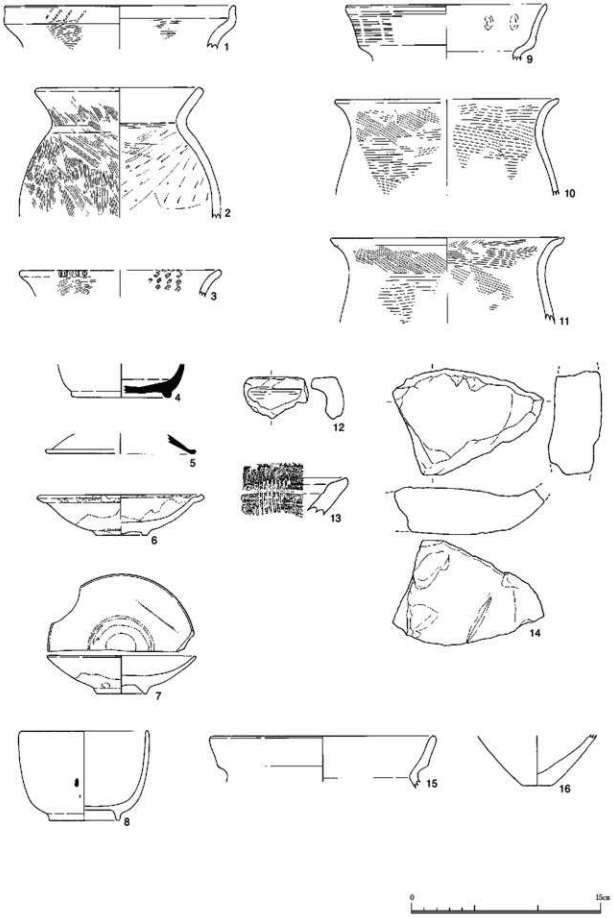




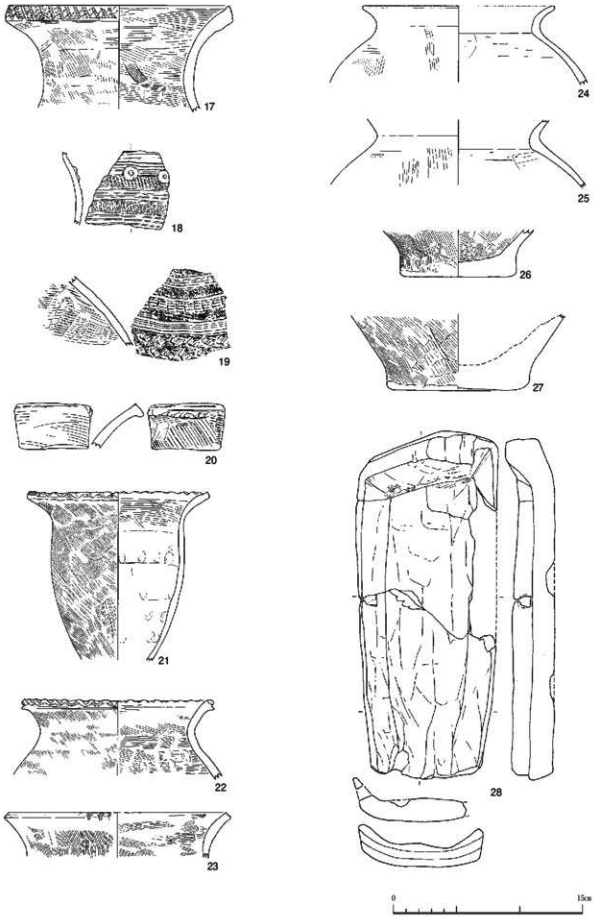




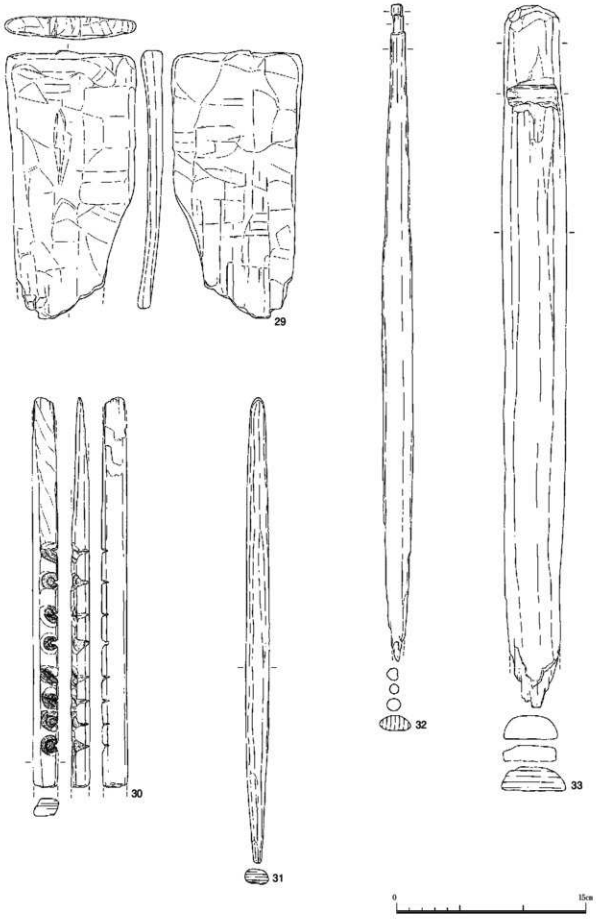
第68図　SK01、SD01、02、03・01（S=1/40）



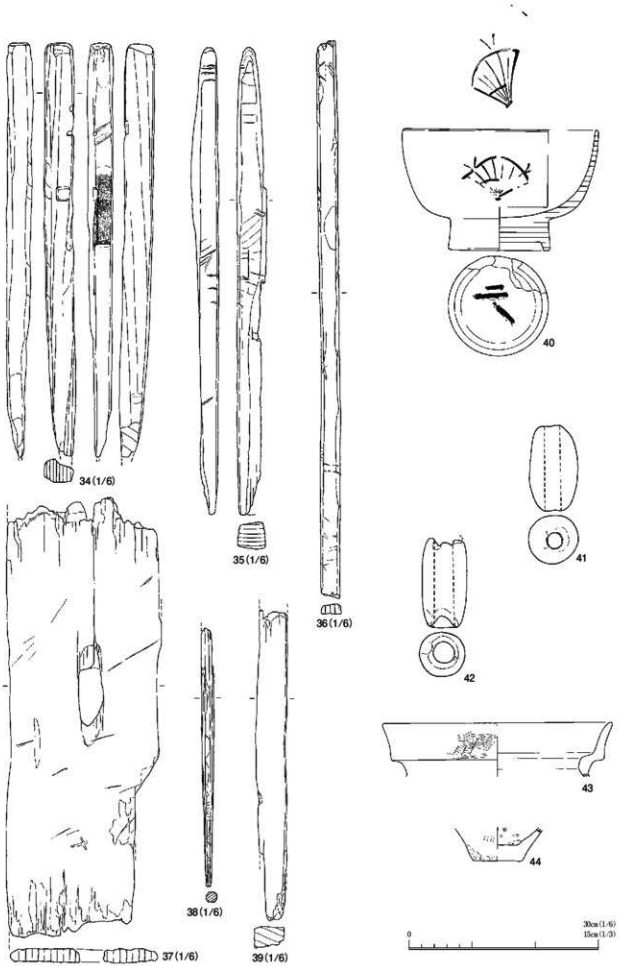
第69図　SK01（1、2）、03（3）、SD01（4～12）、02（13、14）、04（15、16）出土遺物〔S=1/3〕



第70図　SD03 出土遺物(1)〔S=1/3〕



第71図　SD03出土遺物(2)〔S=1/3〕



第72図　SD03（34～39）、02（40、41）、遺構外（42～44）出土遺物〔S=1/3・6〕

第21表　土器・陶磁器・土製品観察表

（単位：mm）

No	遺構	地区	種類	器種	口（径）	底（幅）	高（厚さ）	外面調整	内面調整	底部調整	外面色調（胎色調）	内面色調（素地色調）	礫	砂	骨	赤	焼成	備考	実測No
1	SK01	M7	弥生	壺	182			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ		淡橙褐	淡橙褐	少	少			並		S308
2	SK01	M7	弥生	壺	128			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ・ケズリ		橙褐	橙褐	並	並	少	少	並		S309
3	SK03	L6/7	弥生	壺				ナデ・ハケ・キザミ	ナデ		淡橙褐	淡橙褐		並		少	並		S310
4	SD01	M8	須恵器	有台杯		79		ナデ	ナデ	ヘラ切り・ナデ	淡灰	淡灰		並			並	南北トレンチ列	F355
5	SD01	M8	須恵器	蓋				ナデ	ナデ		灰	灰		少			並	南北トレンチ列	F357
6	SD01	M8	陶器	皿	128	41	32	反転	反転	無釉	灰	淡灰					並	南北トレンチ列	F358
7	SD01	M7	陶器	椀	100	56	71	透明釉	透明釉	透明釉	透明	黄白					並	東西トレ・南北トレ列	F362
8	SD01	M8	弥生	壺	158			ナデ	ナデ・指圧痕		淡橙褐	淡橙褐	少	多		少	並	日トレンチ	S311
9	SD01	M7	弥生	壺				ナデ・ハケ	ナデ・ハケ		灰褐	橙灰褐	並	並	少	少	並	東西トレ・南北トレ列	F364
10	SD01	M7	弥生	壺	184			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ		橙灰褐	橙灰褐	並	並	少	少	並	東西トレ・南北トレ列	F365
11	SD01	M7	瓦器	火鉢				ナデ	ナデ		橙褐	橙褐		少	多	少	並		S312
12	SD01	M8	越前	すり鉢				ナデ	ナデ・刷目		淡茶灰	灰褐	少	並			並	南北トレンチ列	F356
13	SD02	L6	陶器	皿	116	40	30	透明釉	透明釉	無釉	透明	灰白					並		F363
15	SD04	L7	弥生	壺	178			ナデ	ナデ		灰褐	灰褐	少	並		少	並		S314
16	SD04	L7	弥生	壺		24		マメツ	ナデ		橙褐	淡灰褐	少	並		少	並		S315
17	SD03	M7	弥生	壺	174			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ		橙	淡橙褐	少	並			並	下層	S316
18	SD03	M7	弥生	壺					ナデ		橙褐	淡橙褐	少	少		少	並	下層	S323
19	SD03	M7	弥生	壺				ナデ	ハケ		橙褐	褐	並	少	少	少	並	下層	S324
20	SD03	M7	弥生	壺				ナデ・ハケ	ナデ・ハケ		淡灰褐	淡橙褐	少	並		少	並	下層	S322
21	SD03	M7	弥生	壺	142			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ		灰褐	灰褐	少	並	並	少	並	下層	S319
22	SD03	M7	弥生	壺	148			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ・指圧痕		淡橙褐	淡橙褐	少	並		少	並	下層	S320
23	SD03	M7	弥生	壺	172			ナデ・ハケ	ナデ・ハケ		橙褐	橙褐	少	並		少	並	下層	S321
24	SD03	M8	弥生	壺	152			ナデ・ハケ	マメツ・ケズリ		橙褐	橙褐		並	並	並	並	下層	S317
25	SD03	M8	弥生	壺				ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		淡橙褐	淡橙褐	少	並		並	並	下層	S318
26	SD03	M7	弥生	壺		92		ハケ	ハケ	ナデ・ハケ・工具痕	淡橙褐	淡橙褐	少	並	多	少	並	下層	S326
27	SD03	M7	弥生	壺		114		ハケ	ハケリ	ナデ	淡灰褐	淡灰褐	並	並	多	少	並	下層	S325
41	SD02	L7	土製品	土錘	68	39	13				淡橙褐		少	並		少	並	83.5g	S313
42	遺構外	L6/7	土製品	土錘	70	35	15				灰褐			多	少	少	並	78g	F361
43	遺構外	L5	弥生	壺	180			ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ		黒	淡灰褐		並		少	並		F360
44	遺構外	L6/7	弥生	壺		40		ハケ・ケズリ・ナデ	ケズリ		淡灰褐	淡灰褐	少	並	並		並		F359

第22表　漆製品観察表

（単位：mm）

No	遺構	地区	器種	口	底	高	外面漆	内面漆	外面図漆	樹種	木取	備考	実測No
40	SD02	L6	椀	154	80	96	黒漆・赤漆絵	黒漆・赤漆絵	黒漆・赤漆文字		橋木		S399

第23表　木製品観察表(1)

（単位：mm）

No	遺構	地区	種別	長	幅	厚	樹種	木取	備考	実測No
28	SD03	M7	櫂	(274)	110	30		橋木	下層Aトレ	F183
29	SD03	N7	琴ヵ	(201)	104	17		板目	下層Aトレ	ET29
30	SD03	M/N7	火鑽臼	(309)	18	14	計	辺材		T311
31	SD03	M/N7	棒状	369	18	11	広ヵ	辺材		T312
32	SD03	M/N7	棒状	(521)	24	12		辺材		T313
33	SD03	M/N7	棒状	(556)	51	19		辺材		T314
34	SD03	M/N7	杭	(658)	46	37	計	辺材		T315
35	SD03	N7	杭・部材ヵ	742	23	22	計	辺材	下層	S231

第23表　木製品観察表(2)

（単位：mm）

No	遺構	地区	種別	長	幅	厚	樹種	木取	備考	実測No
36	SD03	M/N7	棒状	884	32	16	計	辺材		ET68
37	SD03	M/N7	板状	(700)	244	21	計	板目		ET69
38	SD03	N7	棒状	(410)	20	16	計	辺材	下層	S230
39	SD03	N7	棒状	(494)	48	30	広ヵ	辺材	下層	ET72

第24表　石製品観察表

（単位：mm）

No	遺構	地区	種別	長	幅	厚	重量(g)	備考	実測No
14	SD02	L5	石皿	(118)	(82)	37	350.00		F366

※（　）は最大値を示す。

3. 遺構外(第72図)

図示した他に、弥生土器の細片80点余り、中世の陶器片3点、近世の磁器2点が出土した。42は大型の土錘である。点対称となる位置の孔の端部は摩耗によって深く抉れている。43・44は弥生土器の甕である。43は小さな破片であり、全体に黒斑が広がっている。

第4節　小結

弥生時代中期後葉と弥生時代後期終末から古墳時代前期にかけての2時期に少数のピット、土坑、溝が使われており、集落の縁辺であったと考えられる。その後、16・17世紀にはSD01、18世紀にはSD02が用水として設けられており、周囲は農村となっていたと思われる。

第７章　自然科学分析

第１節　樹種同定

1. 直江ボンノシロ遺跡出土漆・木製品

黒沼　保子（パレオ・ラボ）

1)はじめに

金沢市に位置する直江遺跡群の近世墓から出土した漆器を中心とする木製品７点の樹種同定結果を報告する。なお、漆器については塗膜分析も行なっている（第２節１参照）。

2)試料と方法

試料は、直江遺跡群の墓から出土した17～18世紀の木製品である。SK32から出土した鎌と包丁の柄が各１点（No.1,2）と漆器椀３点（No.3～5）の計５点、SK27から出土した漆器椀１点（No.6）、SK28から出土した１点（No.7）の合計７点である。

方法は、以下の通りである。木取りの確認後、剃刀を用いて試料の３断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。作製したプレパラートは金沢市教育委員会に保管されている。

3)結果

樹種同定の結果、針葉樹はアスナロ１分類群、広葉樹はブナ属とトチノキの２分類群、合計３分類群が確認された。木取りは、鎌・包丁の柄は芯無削出、漆器椀はすべて横木取りであった。結果一覧を表25に示す。

第25表　樹種同定結果一覧

No.	報告No.	遺構	器種	樹種	木取り
1	36	SK32	鎌（柄）	アスナロ	芯無削出
2	35	SK32	包丁（柄）	アスナロ	芯無削出
3	32	SK32	漆器椀	トチノキ	横木取り
4	33	SK32	漆器椀	ブナ属	横木取り
5	31	SK32	漆器椀	ブナ属	横木取り
6	25	SK27	漆器椀	ブナ属	横木取り
7	30	SK28	漆器椀	ブナ属	横木取り

以下に同定された分類群の木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を写真図版10上段に示す。

(1)アスナロ　ThujopsisdolabrataSieb.etZucc.　ヒノキ科　写真図版10上段　1a-1c（No.1）

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材部から晩材部への移行は比較的緩やかである。樹脂細胞は散在し、放射組織内にも豊富に樹脂を含む。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、１分野に不揃いに３～４個存在する。

アスナロは温帯に分布する常緑高木で、耐除性が大きく湿潤地によく生育する。材は加工性・割裂性は中庸だが、耐朽・保存性が高い。

(2)ブナ属　Fagus　ブナ科　写真図版10上段　2a-2c（No.4）

単独の道管が密に散在し、晩材部ではやや径を減ずる散孔材である。道管の穿孔は単一となる。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、２～数列のもの、広放射組織の３種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は堅硬・緻密で靱性があるが、保存性は低い。

(3)トチノキ　AesculusturbinataBlume　トチノキ科　写真図版10 上段　3a-3c（No.3）

やや小型の道管が単独もしくは数個放射方向に２個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一で、道管内壁にはらせん肥厚がみられる。道管相互壁孔は交互状で大型である。放射組織は単列で、すべて平伏細胞で構成される同性である。放射組織は層階状に配列する。

トチノキは温帯から暖帯に分布する落葉高木で、やや湿り気のある肥沃な土地の深い谷間や中腹の緩傾斜地によく生育する。材は柔らかく緻密であるが、保存性はない。

4)まとめ

鎌および包丁の柄の樹種は、２点ともアスナロで、木取りは芯無削出であった。農工具の柄にはアカガシ亜属が用いられることが多いが、ユズリハ属やクヌギ節などの広葉樹のほか、カヤやヒノキなどの針葉樹まで比較的幅広く利用する傾向があり、周辺に生育する樹木から緻密な材を利用していたと思われる（島地・伊東，1988）。北陸地方では縄文時代から近世まで木製品にスギを多用する傾向があるが、アスナロを含むヒノキ科の樹種も中世以降増加している（山田，1993）。アスナロは割裂性が良く加工が容易であり、材質も緻密であることから、農工具の柄にも有用であったと思われる。

漆器の樹種はトチノキが１点で、残りはすべてブナ属であった。漆器の木取りはすべて横木取りである。ブナ属は堅硬、トチノキは軽軟な材であるが、両者とも緻密な材と言える。漆器に利用される樹種は、全国的にブナ属やトチノキ、サクラ属などの散孔材が多く、時代や地域によってはケヤキなどの環孔材や、スギなどの針葉樹が用いられることもある（島地・伊東，1988）。しかし、地域・時代を通じて使用される樹種は比較的限定されている。近世の北陸地方においても、漆器類はブナ属、ケヤキ、トチノキの利用が多く（山田，1993）、本遺跡の樹種利用と一致すると言える。

引用文献

島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧．259 p．雄山閣出版．

山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史－．
植生史研究特別第１号．242 p．日本植生史学会．

2．直江北遺跡・直江中遺跡・直江西遺跡・直江ボンノシロ遺跡・直江南遺跡出土漆・木製品

小林克也・藤根　久(パレオ・ラボ)

1)はじめに

直江遺跡群は石川県金沢市に所在し、日本海へは約３㎞、河北潟と日本海を結ぶ大野川へは約１㎞の距離という臨海地帯に立地する、縄文時代～近世にかけての複合遺跡である。直江遺跡群では弥生末から中世・近世にかけての木製品が出土し、それら木製品の保存処理に伴って樹種同定を実施した。なお切片採取は小林と藤根が、同定および本文作成は小林が行った。

2)試料と方法

試料は弥生時代末～古墳時代前半の槽と加工木が各１点、古墳時代前半の木鍾が１点、12・13 世紀頃の漆器小皿２点と人形、柄が各１点、13・14 世紀頃の木簡と木札が各１点、14 ～16 世紀か?と考え

られている漆器椀が1点、中世末～近世か?と考えられている漆器椀が1点の計11点の木製品である。各試料は切片採取前に木取りの確認を行った。また漆器と考えられているNo.1～4の試料について、塗膜分析が行われている(第2節2参照)。

樹種同定は、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)についてカミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡で検鏡および写真撮影を行った。なお、作製したプレパラートは金沢市埋蔵文化財センターに保管されている。

3)結果

同定の結果、針葉樹のスギ1分類群と、広葉樹のヤナギ属とコナラ属コナラ節(以下コナラ節と呼ぶ)、ケヤキ、クワ属、トチノキ5分類群の計6分類群が産出した。スギが最も多く4点、ケヤキが3点、ヤナギ属とコナラ節、クワ属、トチノキが各1点産出した。同定結果を第26表に、第27表に一覧を示す。

第26表　直江遺跡群出土木製品の樹種同定結果

	弥生時代末～古墳時代前半		古墳時代前半	12・13世紀頃			13・14世紀頃		14～16世紀か?	中世末～近世か?	合計
器種/樹種	槽	加工木	木錘	漆器小皿	人形	柄	木簡	木札	漆器椀	漆器椀	
スギ					1	1	1	1			4
ヤナギ属	1										1
コナラ属コナラ節		1									1
ケヤキ				2					1		3
クワ属			1								1
トチノキ										1	1
合計	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	11

次に同定された材の特徴を記載し、1分類群1点の光学顕微鏡写真を示す。

(1)スギ　*Cryptomeriajaponica*(L.f.) D.Don　スギ科　写真図版10下段　1a-1c(No.5)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は高さ2～15列となる。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で切削などの加工が容易な材である。

(2)ヤナギ属　*Salix*　ヤナギ科　写真図版10下段　2a-2c(No.9)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が直立する異性で、単列となる。

ヤナギ属にはタチヤナギやバッコヤナギなどがあり、水湿に富んだ日当たりのよい土地を好む落葉小高木の広葉樹である。材は軽軟で強度が強く、切削加工などは容易である。

(3)コナラ属コナラ節　*Quercussect.Prinus*　ブナ科　写真図版10下段　3a-3c(No.10)

年輪のはじめに大型の道管が1列並び、晩材部では急に径を減じた、壁が薄くて角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射

組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重くて強靭だが切削加工はやや難しい。現在でも薪炭材として多く用いられている。

(4)ケヤキ　*Zelkovaserrata*（Thunb.）Makino　ニレ科　写真図版11上段　4a-4c（No.4）

年輪のはじめに大型の道管が１～２列並び、晩材部では急に径を減じた道管が集まって集団道管となり、接線～斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端１列が方形となる異性で、１～７細胞幅となる。上下端の方形細胞には結晶がみられる。

ケヤキは温帯から暖帯にかけての肥沃な谷間などに好んで生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬いが、切削などの加工はそれほど困難でない。

(5)クワ属　*Morus*　クワ科　写真図版11上段　5a-5c（No.11）

年輪のはじめに大型の道管が数列並び、徐々に径を減じた道管が晩材部では数個複合し、斜めに断続する半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状、翼状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端１～２列が直立する異性で、幅１～６列となる。

クワ属にはヤマグワやマグワなどがあり、ヤマグワは温帯から亜熱帯に分布し日本全国の山中にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で保存性が高いが、切削加工はやや困難である。

(6)トチノキ　*AesculusturbinataBlume*　トチノキ科　写真図版11上段　6a-6c（No.3）

小型の道管が単独ないし２～３個複合して密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で単列である。また放射組織は層階状に配列する。

トチノキは北海道南部から九州にかけての低山地帯の谷筋の肥沃な土地に分布し、特に東北地方に多く見られる落葉高木である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

4)考察

同定の結果、弥生時代末～古墳時代前半の木製品では、槽はヤナギ属、加工木はコナラ節、古墳時代前半の木鍾はクワ属であった。木取りでは、槽は板目、加工木は柾目、木鍾は芯持丸木であった。ヤナギ属の槽は、半割の材の中心部を刳り貫いた作りであったが、ヤナギ属は軽軟で加工性の良い樹種である。またコナラ節やクワ属は、強靭で耐朽性に優れた樹種である。加工木の用途は不明であるが、槽は材を刳り貫くために加工が容易なヤナギ属を用い、重硬さが必要な木鍾では、重硬なクワ属を用いたと考えられる。

また中世～近世代の木製品は、漆器小皿はケヤキ２点、漆器椀はケヤキとトチノキ、人形と木簡、木札、柄はいずれもスギであった。木取りでは漆器小皿と漆器椀は横木取り、人形と木札は板目、木簡は柾目、柄は芯無削出であった。スギは木理が通直で加工性の良い樹種である。またケヤキは重硬であるが加工性が良く、トチノキは軽軟で加工性は極めて良い樹種である。漆器類では加工性が良くて材の狂いが少ないケヤキ、材の狂いが多いが加工性が良く、大木となって材が得られ易いトチノキを用い、人形や木簡などの板状木製品や柄では、木理通直で加工性の良いスギを用いたと考えられる。

金沢市西念・南新保遺跡では、弥生時代後半の槽が６点出土し、スギとヤナギ属、ヤマグワが各２点産出している（鈴木・能城，1992）。そして小松市の千代・能美遺跡では、古墳時代前期の大溝から木鍾が出土し、シキミと同定されている（津田・（株）東都文化財研究所，2003）。シキミはやや重硬で粘りが強い材である。木鍾に重硬なクワ属を用いた直江遺跡群と用材傾向が一致している。小松市の白

江梯川遺跡では12～14世紀を中心とした木製品の樹種同定が行われており、漆器の挽物ではケヤキやカツラ属、トチノキなどが、木簡ではスギが産出している(鈴木・能城，1989)。直江遺跡群の木製品は、石川県内の時期を同じくする遺跡と用材傾向が類似していた。

引用文献

鈴木三男・能城修一(1989)白江梯川遺跡出土木製品の樹種．

石川県埋蔵文化財センター編「白江梯川遺跡Ⅱ」：93－102．石川県埋蔵文化財センター．

鈴木三男・能城修一(1992)金沢市西念・南新保遺跡出土木製品の樹種．

金沢市編「金沢市西念・南新保遺跡Ⅲ」：285－294．金沢市教育委員会．

津田隆志・(株)東都文化財研究所(2003)出土木製品の樹種同定結果．

小松市教育委員会編「千代・能美遺跡」：70－72．写真図版1－3．小松市教育委員会．

第27表　直江遺跡群出土木製品の樹種同定結果一覧

No.	遺跡・報告No.	遺構	器種	樹種	木取り	法量(mm)	時代
1	ボン・349	SD02	漆器小皿	ケヤキ	横木取り	86×61×15	12・13世紀頃
2	南・102	SI01	漆器小皿	ケヤキ	横木取り	96×77×14	12・13世紀頃
3	ボン・83	SD01	漆器椀	トチノキ	横木取り	底径55、残存器高26	中世末～近世か?
4	中・561	SD02	漆器椀	ケヤキ	横木取り	口径130、器高40	14～16世紀か?
5	中・233	SK23	人形	スギ	板目	377×31×7	12・13世紀頃
6	中・169	SE06	木簡	スギ	柾目	190×39×3	13・14世紀頃
7	中・393	SD01	木札	スギ	板目	231×25×4	13・14世紀頃
8	北・未刊	SE01	柄	スギ	芯無削出	181×22×15	12・13世紀頃
9	西・28	SD03	槽	ヤナギ属	板目	274×110×17・30	弥生時代末～古墳時代前半
10	西・29	SD03	加工木	コナラ属コナラ節	柾目	201×104×17	弥生時代末～古墳時代前半
11	北・未刊	SE06	木錘	クワ属	芯持丸木	171×78×78	古墳時代前半

※遺跡欄の「ボン」は　　を、他は直江●遺跡を示す。
直江中遺跡は平成22年度に報告書を刊行しており、直江北遺跡は平成25年度に刊行予定である。

第2節　塗膜分析

1．直江ボンノシロ遺跡出土漆製品

藤根久・米田恭子(パレオ・ラボ)

1)はじめに

直江遺跡群の調査では、17世紀～18世紀の墓から鎌や包丁あるいは漆器が出土した。ここでは、出土した漆器について、それぞれ塗膜薄片を作製し、顕微鏡観察、X線分析および赤外分光分析を行い、塗膜の構造および材料を検討した。なお、鎌や包丁の柄と漆器については樹種同定が行われている（第1節1参照)。

2)試料と方法

分析試料は、墓から出土した漆器5点である（第28表)。各塗膜試料は、第28表に示す各漆器椀の塗膜層を木胎とともに極少量採取した。なお、試料No.7以外の漆器は、内面と外面からそれぞれ試料を採取し、試料No.7は内面の漆絵部から採取した。塗膜試料は、高透明エポキシ樹脂を使用して試料を包埋した後、薄片作製機を用いて断面の薄片を作製した。

各塗膜薄片は、あらかじめ塗膜構造を調べるために光学顕微鏡で観察した。

無機成分を調べるためにエネルギー分散型Ｘ線分析装置が付属した走査型電子顕微鏡で調べた。観察および測定は、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM－5900LV、以後SEM）による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型Ｘ線分析装置（同JED－2200）による定性・簡易定量分析を行った。

また、漆成分を調べるために、赤外分光分析を行った。試料は、各塗膜の表面部分において手術用メスなどを用いて２㎜角程度を薄く削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ１㎜程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約７トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光㈱製FT/IR－410、IRT－30－16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

第28表　塗膜分析を行った漆器椀とその詳細

試料No.	種類	報告No.	遺構	部位	塗り	その他の特徴	分析位置
3	漆器椀	32	SK32	内面	赤色		口縁部
				外面	黒色	"一"の赤色文字	高台側面
4	漆器椀	33	SK32	内面	赤色		口縁部
				外面	黒色	褐色漆絵	胴部破断部
5	漆器椀	31	SK32	内面	赤色		口縁部
				外側底面	黒色	底面赤色漆文字	底面
6	漆器椀	25	SK27	内面	赤色		口縁部
				外面	黒色	赤色漆絵	高台側面
7	漆器椀	30	SK28	内面	黒色	赤色漆絵	赤色漆絵

3)結果および考察

塗膜薄片の光学顕微鏡観察および分析の結果は、以下の通りである。

なお、各試料の塗膜についてのＸ線分析は、測定位置を写真図版11下段～13の1bおよび2bに、測定結果を第29表に示した。また、各試料の表面部分の赤外吸収スペクトル図は写真図版11下段～13

第29表　各漆器椀塗膜層のＸ線分析結果　（単位%）

試料No.	遺物	測定面	点No.	C	Na_2O	Al_2O_3	SiO_2	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	FeO	HgO	Total
3	漆器椀	内面	1	62.28	－	－	1.53	9.65	－	－	－	0.74	25.80	100.00
			2	62.54	－	0.29	0.96	9.39	－	0.44	－	0.63	25.77	100.02
			3	76.06	－	1.20	0.61	8.20	－	4.93	－	9.01	－	100.01
		外面	1	62.25	－	4.82	4.19	4.16	0.32	5.46	－	18.81	－	100.01
			2	91.32	－	－	0.51	3.02	0.43	0.58	－	4.14	－	100.00
4	漆器椀	内面	1	34.55	－	0.19	0.12	1.63	0.06	0.18	0.09	63.18	－	100.00
			2	38.25	－	1.54	0.54	1.78	－	0.29	0.00	57.61	－	100.01
		外面	1	49.32	－	－	0.29	2.31	－	0.07	－	48.01	－	100.00
			2	54.08	0.12	－	0.39	2.95	0.20	0.45	－	41.80	－	99.99
5	漆器椀	内面	1	60.28	0.49	0.09	30.91	0.38	0.03	0.24	0.13	7.45	－	100.00
			2	27.43		0.57	1.71	0.35		0.29	0.08	69.57	－	100.00
			3	84.58	0.85	0.60	0.45	2.32	0.11	1.65	－	9.43	－	99.99
6	漆器椀	内面	1	66.94	0.35	0.18	2.22	7.19	－	1.69	－	1.78	19.66	100.01
			2	73.68	0.29	0.23	1.12	6.18	－	1.01	0.41	3.72	13.36	100.00
			3	92.21	0.12	－	1.15	5.60	0.12	－	0.18	0.62	－	100.00
		外面	1	62.90	0.87	8.91	22.67	－	0.11	3.41	0.09	1.05	－	100.01
			2	89.18	0.35	0.93	－	0.68	－	2.18	－	6.68	－	100.00
7	漆器椀	内面	1	70.86	－	0.38	3.05	6.69	0.03	1.90	－	1.21	15.88	100.00
			2	68.62	0.78	1.37	1.24	7.74	0.19	1.56	－	1.43	17.07	100.00
			3	90.52	0.94	0.93	1.21	3.29	0.21	1.71	－	1.19	－	100.00

に示した。縦軸が透過率（%R）、横軸が波数（Wavenumber（cm－1）：カイザー）である。各スペクトル図は、ノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す（第18表）。

［漆器椀No.3］

この漆器椀は、内面には赤色漆、外面には黒色漆が塗布され、外側面に"一"の赤色文字が書かれている（図版1－1a・1b）。

口縁部内面から採取した赤色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層～c3層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層はやや不透明の褐色層、塗膜c2層は透明の黄褐色層、塗膜c3層は不透明な黒色層である（写真図版11下段－1a・1b）。塗膜c3層のX線分析では、水銀（HgO）が最大25.80％含まれており（第29表）、水銀朱からなる赤色顔料が含まれていたと考えられる。

第30表　生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

高台外側面から採取した黒色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層はやや不透明の赤褐色層、塗膜c2層は透明の黄褐色層である（写真図版11下段－2a・2b）。

内面および外面の表面塗膜層の赤外分光分析では、いずれも漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク（№6～№8）と一致しており、漆塗膜層である（写真図版11下段－3）。

［漆器椀No.4］

この漆器椀は、内面には赤色漆、外面には黒色漆が塗布され、外側面に褐色の漆絵が描かれている。

口縁部内面から採取した赤色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層はやや不透明～不透明の黒色層、塗膜c2層は不透明の黒色層である（写真図版12上段－1a・1b）。塗膜c2層のX線分析では、鉄（Fe2O3）が最大63.18％含まれており（第29表）、ベンガラからなる赤色顔料が含まれていたと考えられる。

褐色の漆絵のある胴部外側の破断部から採取した黒色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層～c3層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層は透明の黄褐色層、塗膜c2層は不透明の黒色層である（写真図版12上段－2a・2b）。塗膜c3層のX線分析では、鉄（Fe2O3）が最大48.01％含まれており（第29表）、ベンガラからなる赤色顔料が含まれていたと考えられる。

内面および外面の表面塗膜層の赤外分光分析では、いずれも漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク（№6～№8）と一致しており、漆塗膜層である（写真図版12上段－3）。

［漆器椀No.5］

この漆器椀は、内面には赤色漆、外側面は赤色漆、外側底面には黒色漆が塗布され、底面に褐色の漆文字が書かれている。

口縁部内面から採取した赤色塗膜の観察では、木胎のほか下地層b層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層b層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層はやや不透明の褐色層、塗膜c2層は不透明の黒色層である（写真図版12下段－1a・1b）。塗膜c2層のX線分析では、鉄（Fe2O3）が最大69.57％含まれていたことから（第29表）、ベンガラからなる赤色顔料が含まれていたと考えられる。なお、不純物と

して鉱物類も多く含まれていた(第29表の点No.1)。

外側底面から採取した黒色塗膜の観察では、木胎のほか下地層ｂ層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層ｂ層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層は透明の赤褐色層、塗膜c2層は透明の黄褐色層である(写真図版12下段－2a・2b)。なお、表面部は酸化層である。

内面および外面の表面塗膜層の赤外分光分析では、いずれも漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク(№6～№8)と一致しており、漆塗膜層である(写真図版12下段－3)。

[漆器椀No.6]

この漆器椀は、内面には赤色漆、外面には黒色漆が塗布され、外側面に赤色の漆絵が描かれている。

口縁部内面から採取した赤色塗膜の観察では、木胎のほか下地層ｂ層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層ｂ層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層はやや不透明の褐色層、塗膜c2層は不透明の黒色層である(写真図版13上段－1a・1b)。塗膜c2層のＸ線分析では、水銀(HgO)が最大19.66％含まれており(第29表)、水銀朱からなる赤色顔料が含まれていたと考えられる。

外側底面から採取した黒色塗膜の観察では、木胎のほか下地層ｂ層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層ｂ層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層はやや不透明の赤色層、塗膜c2層は透明の黄褐色層である(写真図版13上段－2a・2b)。なお、表面部は酸化層である。

外面の表面塗膜層の赤外分光分析では、いずれも漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク(№6～№8)と一致しており、漆塗膜層である(写真図版13上段－3)。なお、外面の表面塗膜層の赤外分光分析では、水銀の影響のためウルシオールの吸収ピークは確認できなかった。

[漆器椀No.7]

この漆器椀は、内面・外面とも黒色漆が塗布され、内面に赤色漆絵が描かれている。

内面底部の赤色の漆絵部から採取した赤色塗膜の観察では、木胎のほか下地層ｂ層、塗膜層c1層およびc2層からなる。下地層ｂ層は微細な炭粉からなる。塗膜c1層は透明の黄褐色層、塗膜c2層は不透明の黒色層である(写真図版13下段－1a・1b)。塗膜c2層のＸ線分析では、水銀(HgO)が最大17.07％含まれており(第29表)、水銀朱からなる赤色顔料が含まれていたと考えられる。

内面の表面塗膜層の赤外分光分析では、いずれも漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク(№6～№8)と一致しており、漆塗膜層である(写真図版13下段－2)。

第31表　各漆器椀の塗膜分析結果(塗膜数,無機成分,下地成分,塗膜材料)

試料No	種類	報告No	遺構	部位	塗り	分析位置	下地	塗膜層		
								c1層	c2層	c3層
3	漆器椀	32	SK32	内面	赤色	口縁部	微細な炭粉	やや不透明の褐色層	透明の黄褐色層	赤色塗膜(水銀朱)
				外面	黒色	高台側面	微細な炭粉	やや不透明の赤褐色層	透明の黄褐色層	－
4	漆器椀	33	SK32	内面	赤色	口縁部	微細な炭粉	やや不透明～不透明の黒色層	赤色塗膜(ベンガラ)	－
				外面	黒色	胴部破断部	微細な炭粉	透明の黄褐色層	不透明の黒色層	漆絵－褐色塗膜(ベンガラ)
5	漆器椀	31	SK32	内面	赤色	口縁部	微細な炭粉	やや不透明の褐色層	赤色塗膜(ベンガラ)	－
				底面	黒色	底面	微細な炭粉	透明の赤褐色層	透明の黄褐色層	－
6	漆器椀	25	SK27	内面	赤色	口縁部	微細な炭粉	やや不透明の褐色層	赤色塗膜(水銀朱)	－
				外面	黒色	高台側面	微細な炭粉	やや不透明の赤色層	透明の黄褐色層	－
7	漆器椀	30	SK28	内面	黒色	赤色漆絵	微細な炭粉	透明の黄褐色層	漆絵－赤色塗膜(水銀朱)	－

4)おわりに

直江遺跡群から出土した漆器椀について、それぞれ塗膜薄片を作製し、顕微鏡観察、X線分析および赤外分光分析を行い、塗膜の構造および材料を検討した。

その結果、漆器椀No.3とNo.6の内外面には、下地層および塗膜2層があり、漆に水銀朱を混ぜた赤色漆を内面に塗布した漆器椀であった。漆器椀No.4とNo.5の内外面には、下地層および塗膜2層があり、漆にベンガラを混ぜた赤色漆を内面に塗布した漆器椀であった。なお、漆器椀No.4の外面にはベンガラを混ぜた褐色の漆絵が描かれていた。漆器椀No.7内面には、下地層および塗膜1層があり、水銀朱を混ぜた赤色漆絵が描かれていた。

2. 直江中遺跡・直江ボンノシロ遺跡・直江南遺跡出土漆製品

藤根　久(パレオ・ラボ)

1)はじめに

直江遺跡群は石川県金沢市に所在する縄文時代～近世にかけての複合遺跡である。遺跡では中世～近世にかけての木胎漆器が出土した。ここでは出土した木胎漆器の塗膜について、顕微鏡観察、X線分析および赤外分光分析を行い、塗膜の構造および材料を検討した。なお、これらの木胎漆器の樹種同定を行っている(第1節2参照)。

2)試料と方法

分析対象試料は、木胎漆器4点である(第32表)。

各試料の内外面の塗膜を極少量採取した後、塗膜断面のプレパラートを作製し、光学顕微鏡による観察、X線分析および塗膜表面の赤外分光分析を行った。

第32表　塗膜分析等を行った漆器試料

No.	遺跡・報告No.	遺構	品名	樹種	木取り	法量(mm)	備考	時代	塗膜分析位置
1	ボン・349	SD02	漆器小皿	ケヤキ	横木取り	86×61×15	内外面黒漆	12・13世紀頃	内面
2	南・102	SI01	漆器小皿	ケヤキ	横木取り	96×77×14	内外面黒漆	12・13世紀頃	内面
3	ボン・83	SD01	漆器椀	トチノキ	横木取り	底径55 残存器高26	外面朱漆外面底部に漆文字	中世末～近世?	外面
4	中・561	SD02	漆器椀	ケヤキ	横木取り	底径55 残存器高26	内外面黒漆	14～16世紀か?	内面

※遺跡欄の「ボン」は直江ボンノシロ遺跡を、他は直江●遺跡を示す。
直江中遺跡は平成22年度に報告書を刊行しており、直江北遺跡は平成25年度に刊行予定である。

各試料は、包埋樹脂に注型用高透明エポキシ樹脂を使用して試料を包埋した後、薄片作製機を用いて断面の薄片を作製した。薄片試料は、アランダムの#3000、ダイヤモンド粒子の1μmの順で研磨し、観察・分析面とした。

各薄片は、あらかじめ塗膜構造を調べるために光学顕微鏡で観察した。その後、エネルギー分散型X線分析装置が付属した走査型電子顕微鏡を用いて無機成分を調べた。光学実体顕微鏡による観察の後、走査型電子顕微鏡(日本電子株式会社製JSM－5900LV、以後SEM)による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型X線分析装置(同JED－2200)による定性・簡易定量分析を行った。

また、漆成分を調べるために、赤外分光分析を行った。試料は、各塗膜の表面部分において手術用メスなどを用いて0.2mm程度を薄く削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ1.0mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光㈱製FT/IR－410、IRT－30－16)を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

3)結果および考察

塗膜薄片の光学顕微鏡観察および分析の結果は、以下の通りである。

漆器小皿(試料№1)

内面塗膜は、下地層(b層)がやや不明瞭であったが、木胎(a層)、黒色の塗膜c1層および透明褐色の塗膜c2層からなる(写真図版14上段－1a)。X線分析では、黒色の塗膜層c1層において鉄(FeO)が56.27および64.01％検出され(写真図版14上段－1b、第21表)、鉄分が含まれていると考えられる。塗膜層c2層の赤外分光分析では、ウルシオール(吸収ピーク№6～8)と一致したことから漆である(写真図版14上段－c)。

漆器小皿(試料№2)

内面塗膜は、下地層(b層)、塗膜層が一部であるが黒色の塗膜c1層からなる(写真図版14上段－2a)。下地層(b層)は、10μm以下の炭粒が含まれ、X線分析においてカリウム(K2O)などが多く含まれていた(写真図版14上段－2b、第33表)。塗膜層c1層の赤外分光分析では、ウルシオール(吸収ピーク№6～8)と一致したことから漆である(写真図版14上段－c)。

漆器椀(試料№3)

内面塗膜は、木胎(a層)、下地層(b層)、透明褐色の塗膜c1層および黒色の塗膜c2層(反射では赤色を呈す)からなる(写真図版14下段－3a)。X線分析では、黒色の塗膜層c2層において鉄(FeO)が88.23および90.80％検出され(写真図版14下段－3b、第33表)、ベンガラが含まれていると考えられる。なお、透明褐色の塗膜c1層では若干鉄が含まれるもののカリウム(K2O)などの元素が多い。また、塗膜層c2層の赤外分光分析では、ウルシオール(吸収ピーク№6～8)と一致したことから漆である(写真図版14下段－c)。

漆器椀(試料№4)

内面塗膜は、木胎(a層)、下地層(b層)、黒色の塗膜c1層および透明褐色の塗膜c2層からなる(写真図版14下段－4a)。X線分析では、黒色の塗膜層c1層において鉄(FeO)が62.56％検出され(写真図版14下段－4b、第33表)、鉄分が含まれていると考えられる。なお、透明褐色の塗膜c2層では鉄が多く含まれるが塗膜c1層の一部が検出されたものと考えられる。また、塗膜層c2層の赤外分光分析では、やや吸収が小さいもののウルシオール(吸収ピーク№6～8)とほぼ一致したことから漆である(写真図版14下段－c)。

第33表　塗膜のエネルギー分散型X線分析結果

(単位％)

試料No.	点No.	C	Na_2O	Al_2O_3	SiO_2	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	FeO	HgO	Total
1	1	1.35	3.17	8.36	0.70	16.97	2.45	8.52	0.87	1.33	56.27	100.0
	2	1.21	1.77	1.22	0.37	6.42	1.39	21.52	0.13	1.94	64.01	100.0
2	1	4.09	9.46	11.35	1.95	30.74	7.21	25.46	3.30	－	6.43	100.0
	2	0.46	7.46	11.97	4.67	29.08	5.11	23.06	3.67	3.06	11.45	100.0
3	1	0.67	1.84	3.37	0.32	0.71	0.04	2.69	－	2.13	88.23	100.0
	2	－	1.47	1.93	0.54	0.86	－	2.49	0.04	1.88	90.80	100.0
	3	0.55	7.67	2.27	2.66	7.97	2.55	39.94	－	1.24	35.15	100.0
4	1	－	5.58	4.30	4.47	15.81	0.55	13.59	－	0.74	54.97	100.0
	2	0.35	6.68	5.57	2.20	4.40	0.50	17.22	0.53	－	62.56	100.0

写真図版14に、各試料表面部の赤外吸収スペクトル図を示す(試料が実線、生漆が点線で示す)。縦軸が透過率(%R)、横軸が波数(Wavenumber (cm－1)：カイザー)である。なお、スペクトルは、ノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す(第34表)。

赤外分光分析を行った結果、いずれの試料の表面部分において漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク(№6～№8)と一致したことから、漆と同定された。

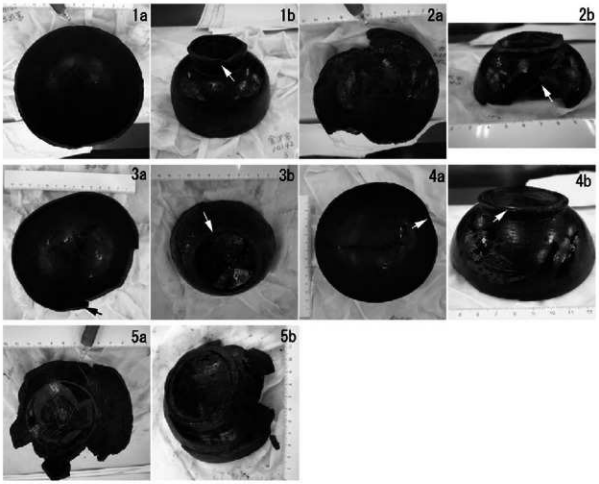
第34表　生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収№	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

4)おわりに

中世から近世の漆器小皿および漆器椀の各外面と内面の塗膜を観察し、無機成分と漆について検討した。その結果、12・13世紀頃の試料№1の漆器小皿と中世末から近世?の試料№3の漆器椀では、鉄分を混ぜた黒色塗膜c1層と透明褐色塗膜c2層の2層塗りで、塗膜表面は漆であった。なお、12・13世紀頃の試料№2の漆器小皿は、黒色塗膜c1層のみであったが、本来試料№1や試料№3と同様の塗膜構造をもつと考えられる。

14世紀から16世紀か?と想定されている試料№3は、ベンガラを含む黒色の塗膜c1層(反射では赤色を呈す)および透明褐色の塗膜c2層の2層塗りで、塗膜表面は漆であった。この漆器椀は、透明漆を塗った後に、全体にベンガラを混ぜた赤漆を塗ったことが明らかとなった。



第73図　塗膜分析を行った漆器椀と採取位置

第8章 総　　括

ここでは、旧直江村の在所を取り巻くように展開している本書で扱った遺跡および直江中遺跡（金沢市2011）、直江北遺跡をひとつの遺跡群と捉えて、時代ごとに動向を述べることで総括とする。なお、直江北遺跡については現在整理中であるので、現段階での見解とさせていただきたい。

【縄文時代晩期】ボンノシロ・中・北遺跡（直江省略、以下同）

ボンノシロ遺跡の鞍月文化会館建設用地の調査（金沢市2012）では、地山がやや汚れたような土質の箇所から、明確な遺構プランをもたない状態で晩期後葉下野式期の土器がまとまって出土している。地山土形成時に入り込んだのであろうか。中遺跡では、川の縁辺から同じように晩期後葉下野式期の土器が集中して出土しており、同様の地山形成時の所産と考えられる。北遺跡では、晩期の川と土坑が見つかっている。川からは土器の他、ヒスイ製とみられる勾玉が出土している。川沿いに見つかった土坑は、クルミなどが出土していることから、貯蔵穴の可能性が考えられる。また、柱穴の可能性がある大きな穴も検出されている。

【弥生時代中期】ボンノシロ・西・北遺跡

ボンノシロ遺跡では溝、川から中期後半の土器が比較的まとまって出土している。部分的な調査であるために遺構の詳細は不明ながら、西遺跡でも川と考えられる流路から中期後半の土器がまとまって出土している。北遺跡では集落を囲繞するような中期後半の溝が見つかっているが、周辺に建物などは見つからず、土器も少ない。

【弥生時代終末期～古墳時代初頭】ボンノシロ・西・北遺跡

ボンノシロ遺跡では川から当該期の遺物がまとまって出土しており、近隣に集落域が想定される。約50m西に所在する大友F遺跡で当該期の集落が見つかっている。西遺跡でも川が見つかっているが、建物などは確認できていない。こちらも隣接する大友E遺跡で当該期の建物など集落域が見つかっている。特筆すべきは履物と想定される木製品の出土であり、同川からは弥生時代中期後半の土器群も出土しているが、形態的にこの時期に位置づけるのが妥当であろう。出土事例が少なく、貴重な事例といえる。北遺跡では溝や井戸などが見つかっており、集落域を区画するような溝も検出されている。建物には掘立柱建物や布堀建物があり、井戸は素掘りのものや4枚の板材を方形に組んで井戸側としているものが見つかっている。

【古墳時代前・中期】ボンノシロ・ニシヤ・西・北遺跡

ボンノシロ遺跡では川から前期の土師器や中期の須恵器が出土している。ニシヤ遺跡では、当該期の遺構に伴うわけではないが、中期の須恵器が複数出土しており、周辺に集落が展開していることを予想させる。西遺跡では前期の土坑が見つかっているが、隣接する大友E遺跡では当該期の集落が確認できる。北遺跡で集落を区画すると考えられる溝と掘立柱建物、井戸、土坑などが見つかっている。溝からは多くの遺物が出土しており、井戸からは完形の土器や木製品が出土している。掘立柱建物の柱穴には柱根が残っており、その多くは平面形が長方形の柱材であった。

【奈良・平安時代】ボンノシロ・ニシヤ・中・北遺跡

ほとんどの遺跡で、溝や土坑、川などから土師器や須恵器が出土しているが、建物が見つからず、集落の構造が定かではない。ボンノシロ遺跡では川から緑釉陶器や灰釉陶器、墨書土器などが出土しており、一般集落の出土遺物とは様相を異にする。9世紀代が主体であるが、平安時代後半の土師器なども多数出土している。墨書土器には「殿」、「依」、「井」などがある（第74図）。ニシヤ遺跡では、土坑が見つかっている。中遺跡では9世紀を主体とする遺物群が中世の川などから出土しており、「殿カ」墨書土器や緑釉陶器、灰釉陶器などがある。北遺跡では「諸刀自女」と書かれた墨書土器が出土している。

【平安時代末～鎌倉・室町時代】南・ボンノシロ・ニシヤ・中・北遺跡

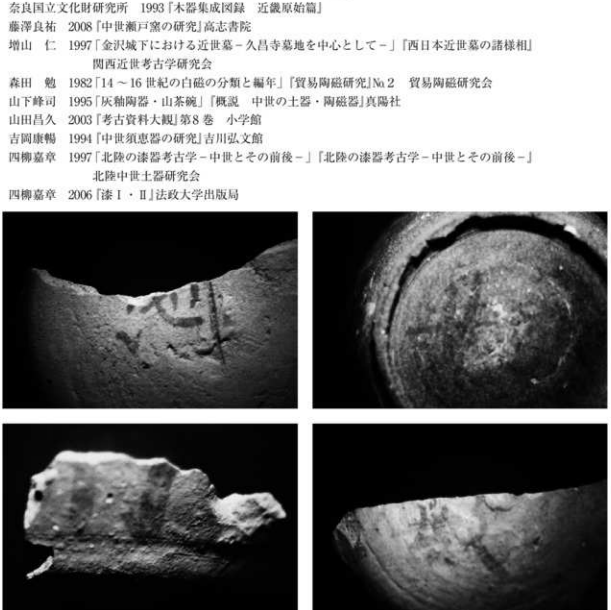
南遺跡で13世紀前半から14世紀前半頃の複数の井戸と竪穴遺構が見つかっている。建物は未検出であるが、近隣に展開しているのであろう。ボンノシロ遺跡では川から16世紀までの遺物が出土している。貿易陶磁器は中世前期の白磁が目立っているので、12・13世紀が主体となろう。15・16世紀の遺物も定量見られ、このころには文献でも直江の名が見られることから（第2章参照）、旧在所を中心とした位置に当該期の集落が存在した可能性が考えられる。ニシヤ遺跡でも、建物跡は確認できないが、鎌倉時代の井戸が見つかっている。また、近世に埋没する溝を複数検出しているが、底付近で16世紀頃の遺物が出土する溝については、中世段階で掘削したものが近世にも継続して使用されたものと推定している。中遺跡では鎌倉時代から南北朝時代頃の掘立柱建物や井戸、土坑、川などを確認しており、川からは杭と横板を用いた治水施設のような遺構が見つかっている。北遺跡では柱穴から白磁壺類の破片が出土した12世紀頃の大型掘立柱建物や呪符木簡が出土した鎌倉時代の井戸、平安時代末から鎌倉時代のものとみられる鳥帽子が出土した方形土坑などが見つかっている。鎌倉時代頃からは広範囲に遺構が分布しており、中世の荘園開発に伴うかは不明ながら、人々の活動が活発になっているのを感じる。

【江戸時代】南・ボンノシロ・ニシヤ・西・中・北遺跡

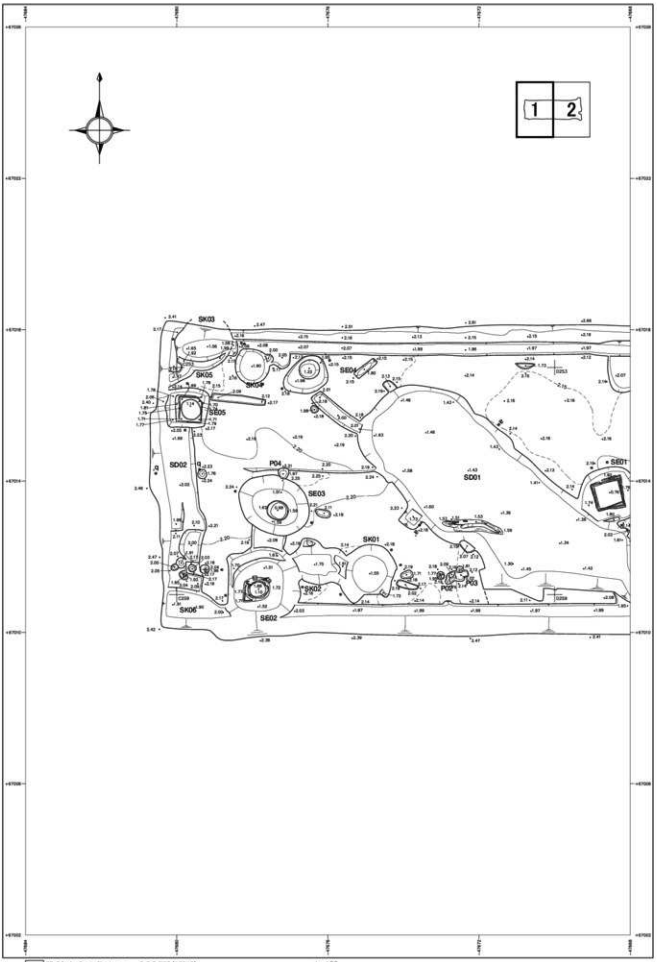
全ての遺跡で当該期の溝や川を検出している。ここでは、ボンノシロ遺跡の鍋被り葬についてのみ記述する。第4章で報告したが、概ね長方形木棺と早桶木棺が近世段階のもので、副葬品も定量見られる。その他の正方形に近い木棺や甕棺は近世末期から近代のものと推定している。鍋被り葬については、長方形木棺と副葬品の漆器から、詳細年代は絞り切れていないが近世段階のものと考えている。鍋被り葬は15世紀から18世紀にかけて東日本の太平洋側で出土事例が知られるが、出土人骨の鑑定結果や伝承調査によって、ハンセン病などの特殊な病気の感染者が亡くなった際や盆中に亡くなった人に鍋を被せる風習であった可能性が指摘されている（桜井2004）。埋葬場所については村境での単独葬の場合と墓域に埋葬される場合とがあり、ボンノシロ事例は後者となる。また、墓地の調査が多い江戸市中では確認されておらず、金沢城下町で見つかっていない状況と類似している。今回の事例がどのような理由で鍋被り葬となったかは明らかにできないが、これまで事例に乏しかった日本海側の北陸にも確実に鍋被り葬が存在することを提示できたこと、また江戸時代の村の墓地および埋葬施設様相も不十分ながら提示できたことは大きな成果といえよう。

【引用・参考文献】

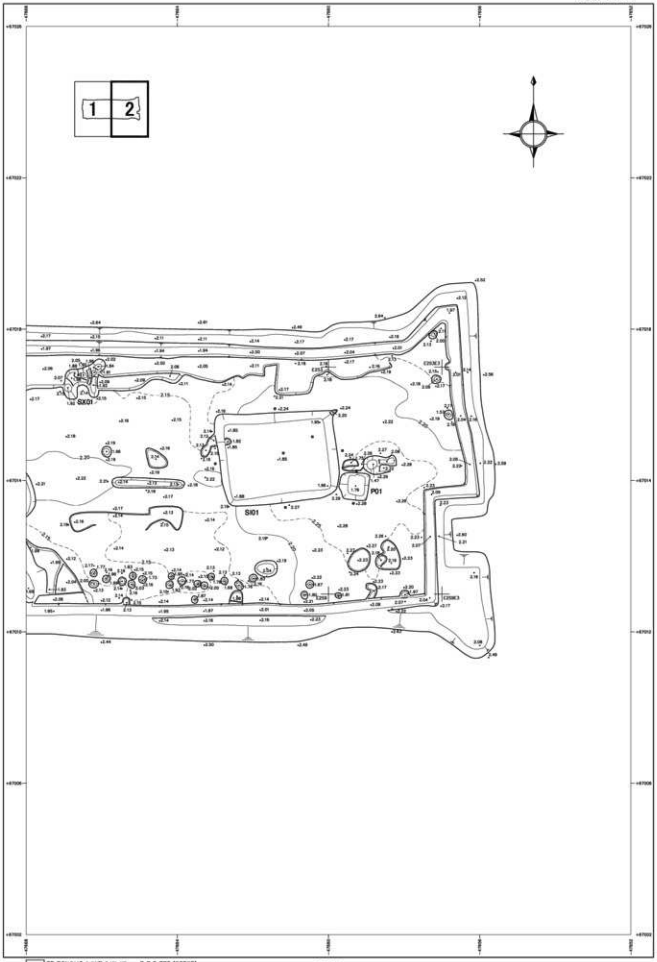
上田秀夫　1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.２　貿易陶磁研究会
江戸遺跡研究会　2001『図説江戸考古学研究辞典』柏書房
垣内光次郎　2001「中世の焼物生産」『新修小松市史資料編３　九谷焼と小松瓦』小松市
金沢市　2004『久昌寺遺跡』
金沢市　2011『直江中遺跡』
金沢市　2012『直江ボンノシロ遺跡』
金沢市教育委員会　1981『金沢市南新保Ｄ遺跡』、p221
木村孝一郎　2011「越前焼の編年的研究と生産地の動向」『山陰地方における越前・常滑系土器』山陰中世土器検討会
九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』
越田賢一郎　2004「鉄鍋再考」『アイヌ文化の成立』北海道出版企画センター
越田賢一郎　2007「東日本・北海道と北方地域の鉄鍋・土鍋」『北東アジア交流史研究－古代と中世－』塙書房
古代の土器研究会　1994『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東３　施釉陶器－』
桜井準也　2004「近世の鍋被り人骨について」『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館
高橋照彦　1995「緑釉陶器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』
田中照久・木村宏一郎　2005「越前」『中世窯業の諸相　資料集』
奈良国立文化財研究所　1993『木器集成図録　近畿原始篇』
藤澤良祐　2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
増山　仁　1997「金沢城下における近世墓－久昌寺墓地を中心として－」『西日本近世墓の諸様相』
　　関西近世考古学研究会
森田　勉　1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.２　貿易陶磁研究会
山下峰司　1995「灰釉陶器・山茶碗」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
山田昌久　2003『考古資料大観』第８巻　小学館
吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
四柳嘉章　1997「北陸の漆器考古学－中世とその前後－」『北陸の漆器考古学－中世とその前後－』
　　北陸中世土器研究会
四柳嘉章　2006『漆Ⅰ・Ⅱ』法政大学出版局



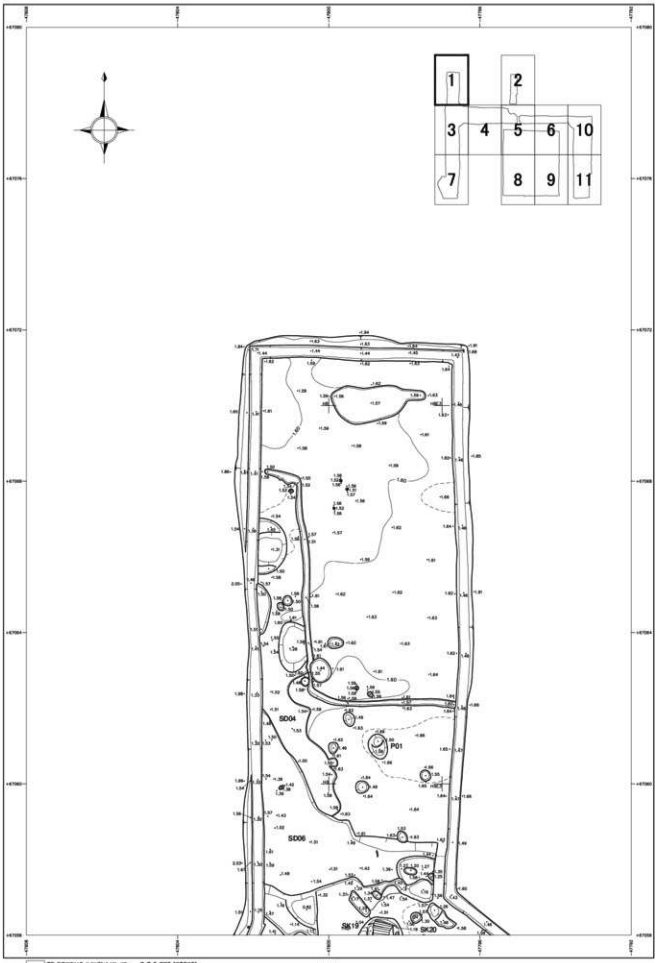
第74図　直江ボンノシロ遺跡出土墨書土器赤外線像(左上：230、右上：331、左下：332、右下：333)



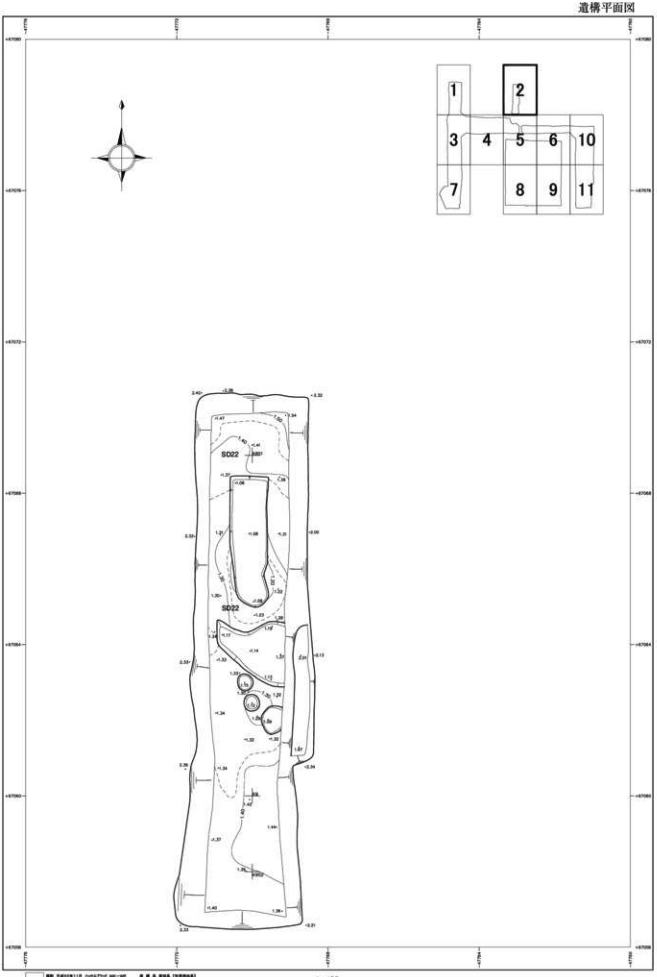
第75図　直江南遺跡遺構平面図(1)〔S=1/100〕



第76図　直江南遺跡遺構平面図(2)〔S=1/100〕

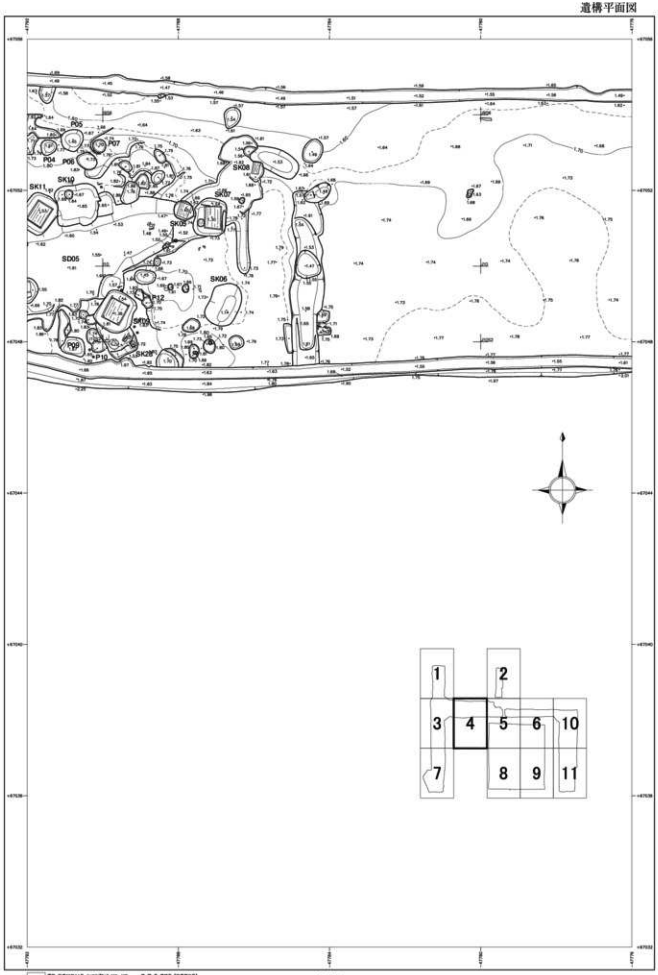


第77図　直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(1)〔S=1/100〕

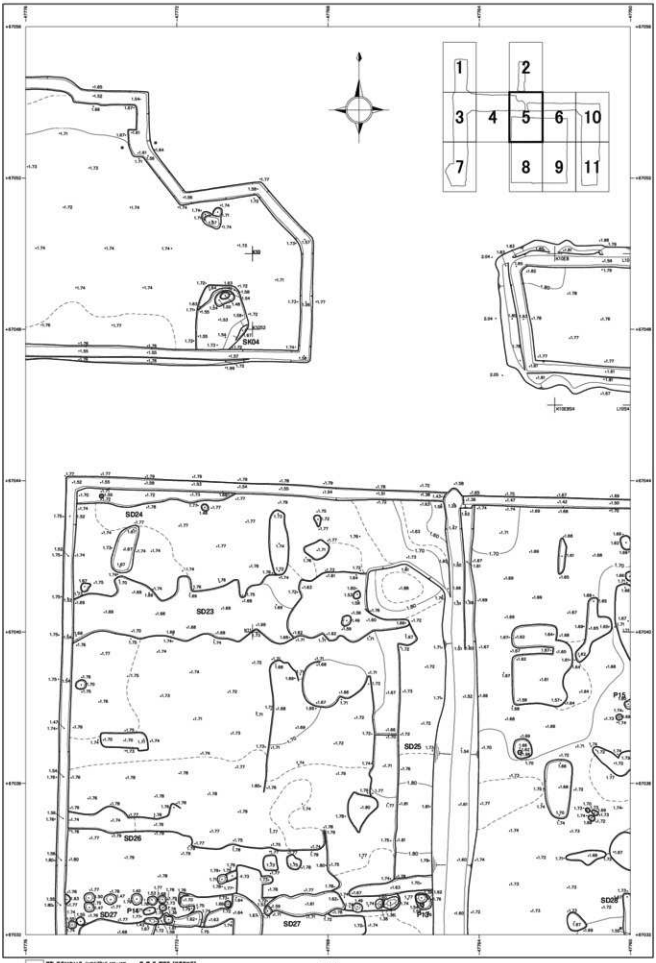


第78図　直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(2)〔S=1/100〕

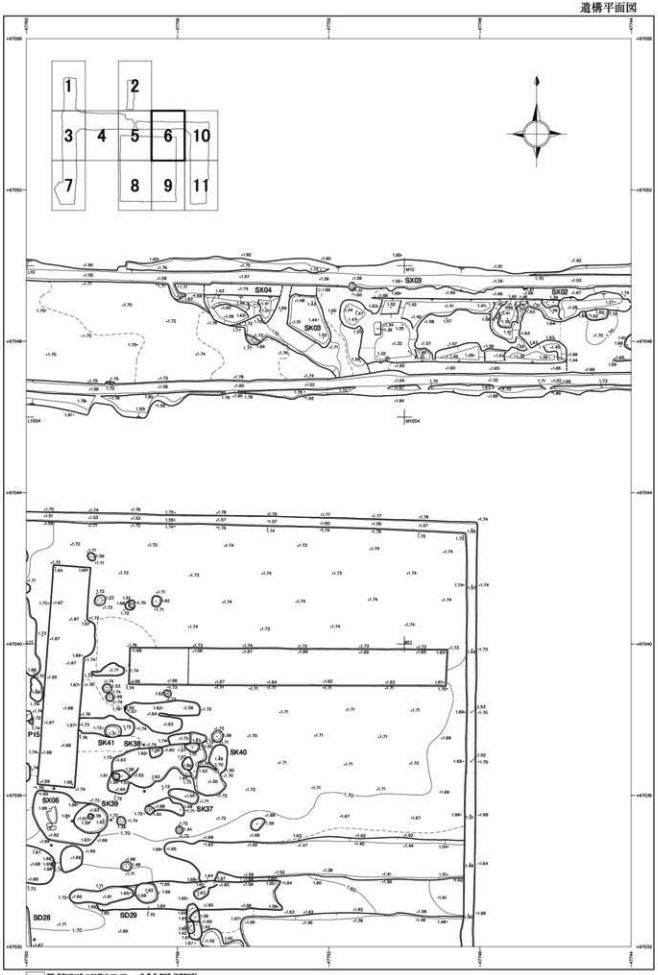
第79図　直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(3)〔S=1/100〕



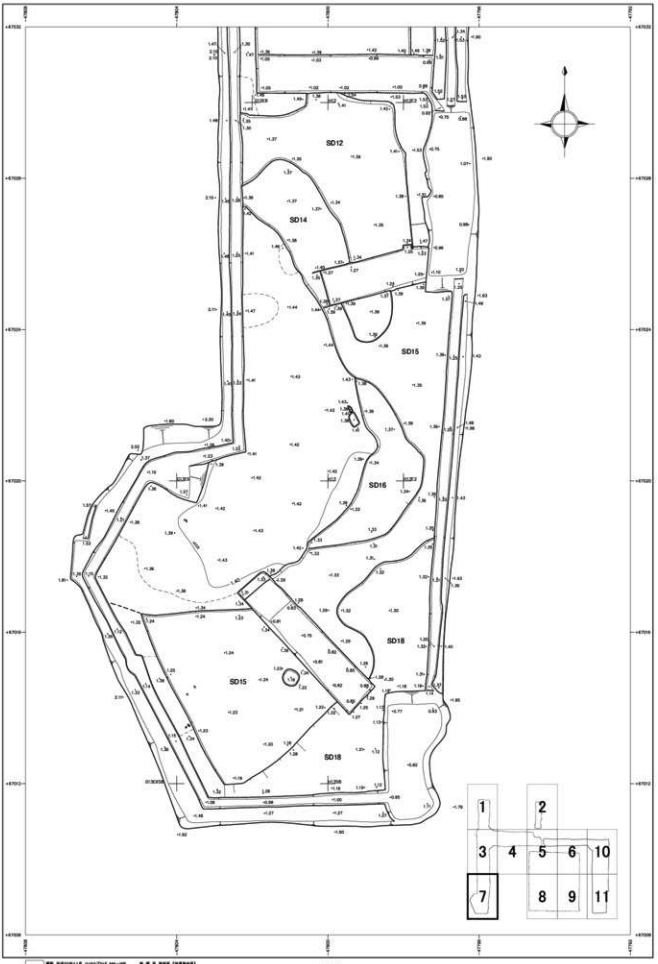
第80図　直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(4)〔S=1/100〕



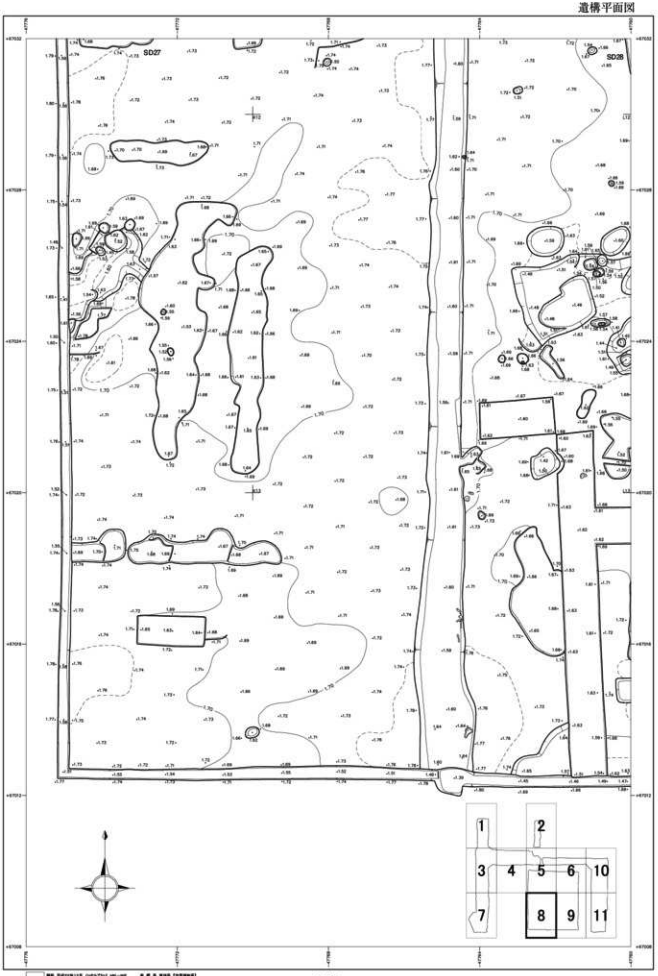
第81図　直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(5)〔S=1/100〕



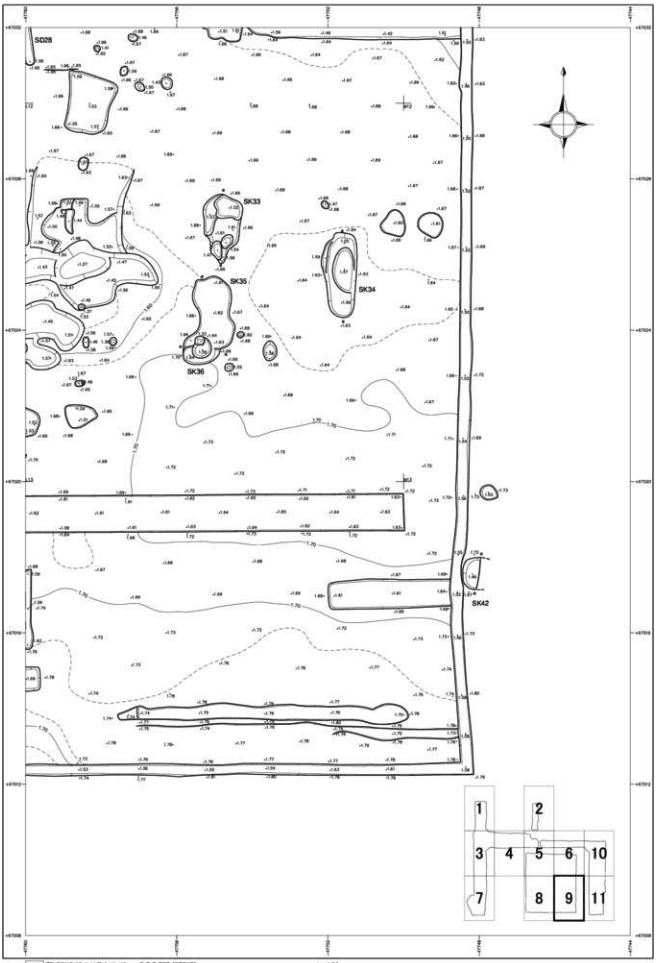
第82図　直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(6)〔S=1/100〕



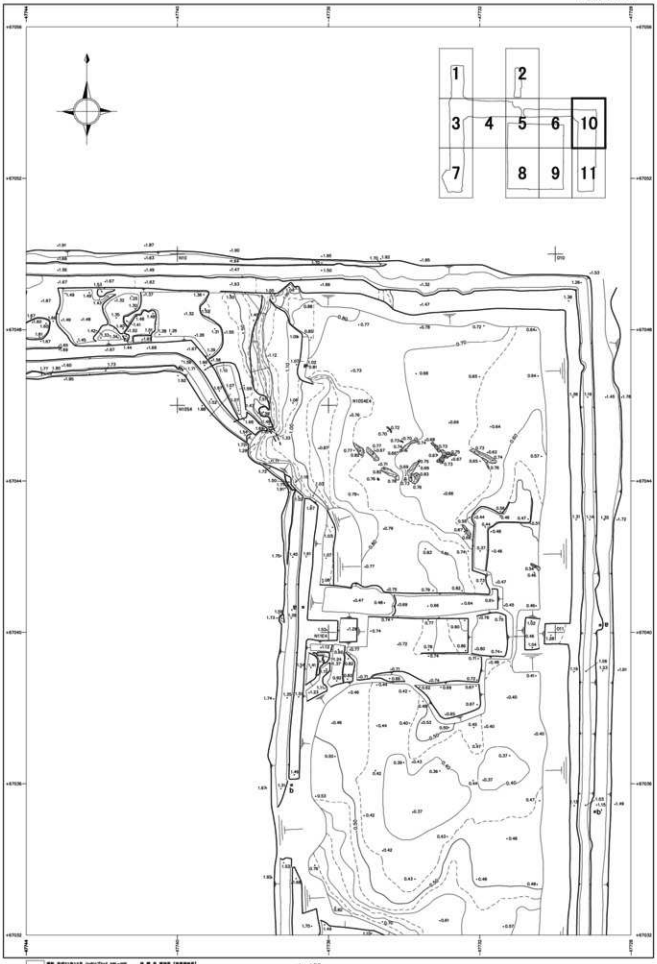
第83図　直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(7)〔S=1/100〕



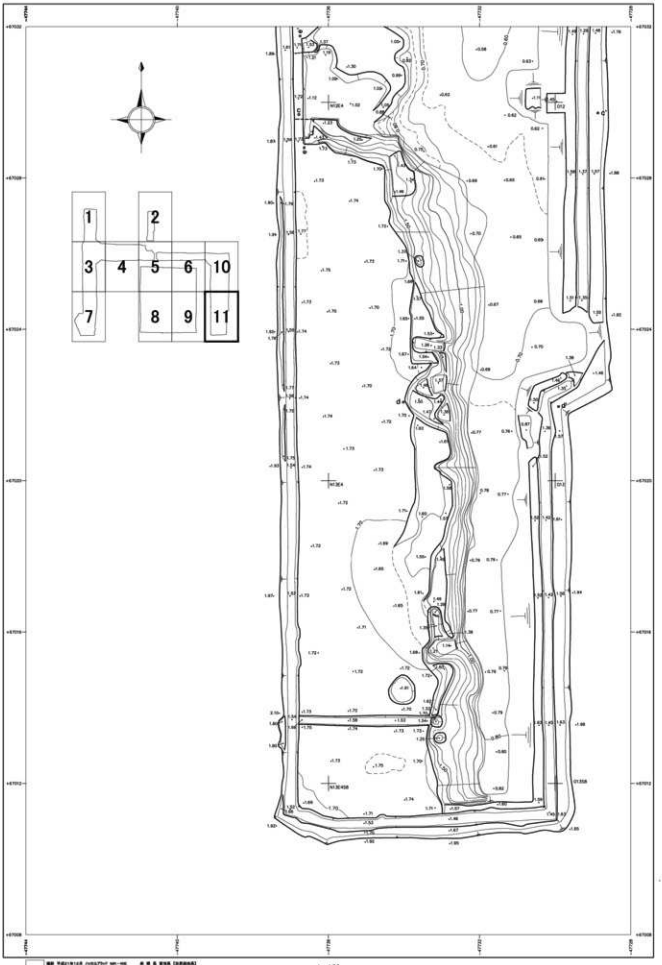
第84図　直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(8)〔S=1/100〕



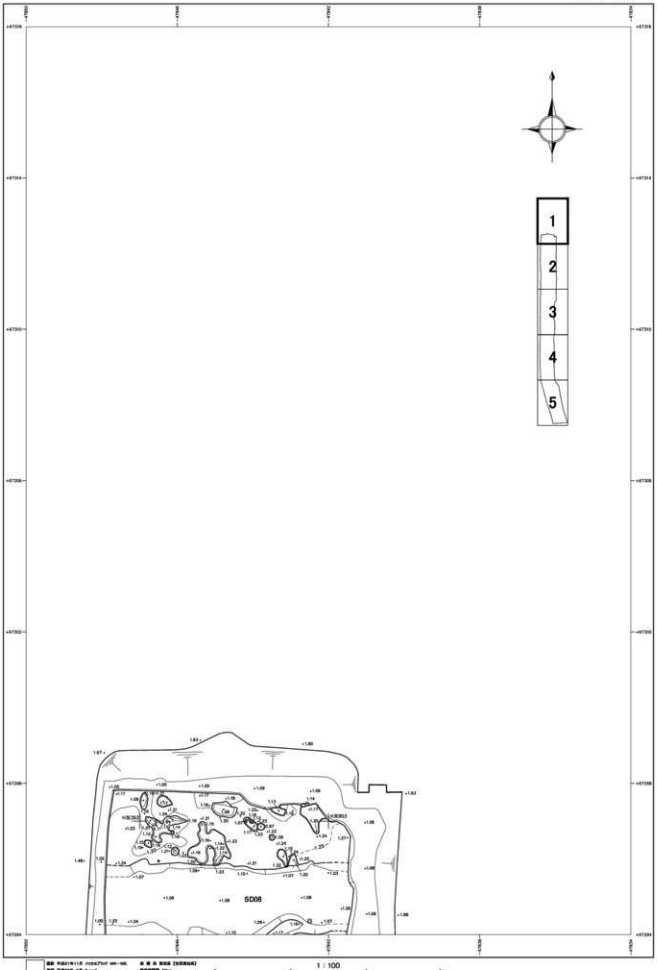
第85図　直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(9)〔S=1/100〕



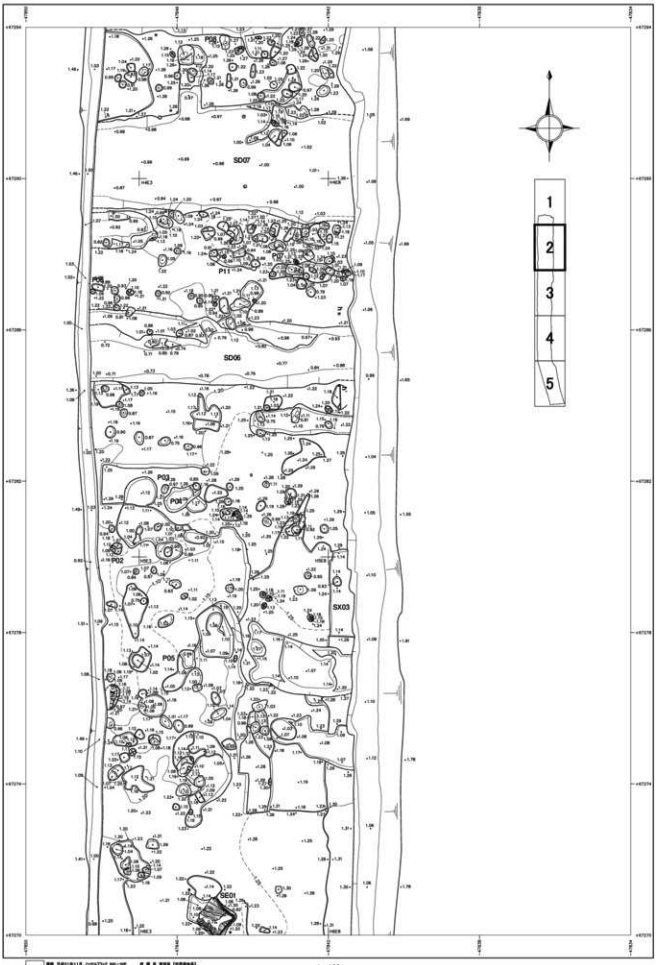
第86図　直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(10)〔S=1/100〕



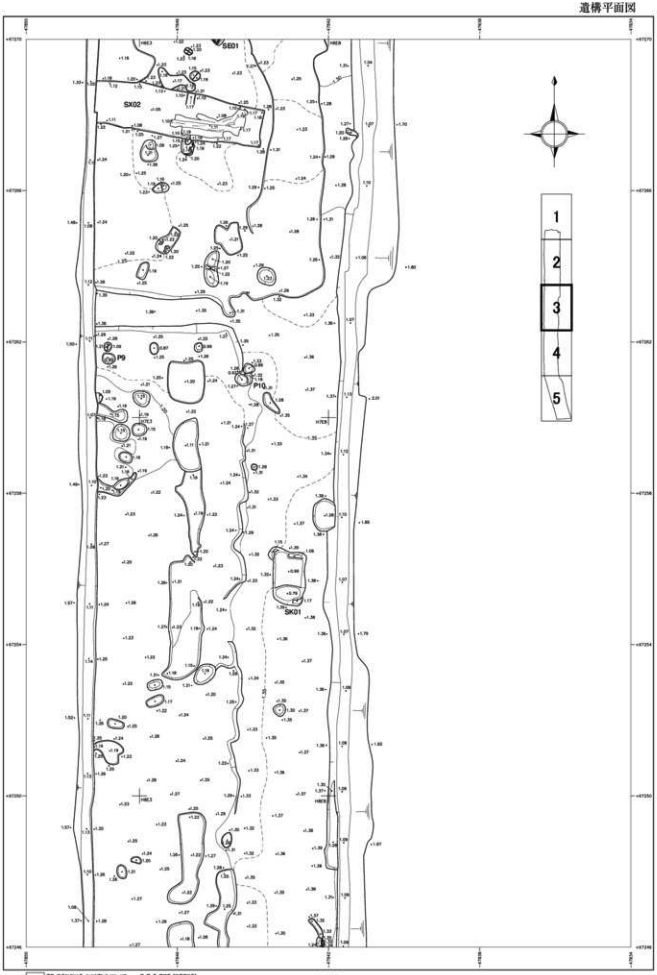
第87図　直江ボンノシロ遺跡遺構平面図(11)〔S=1/100〕



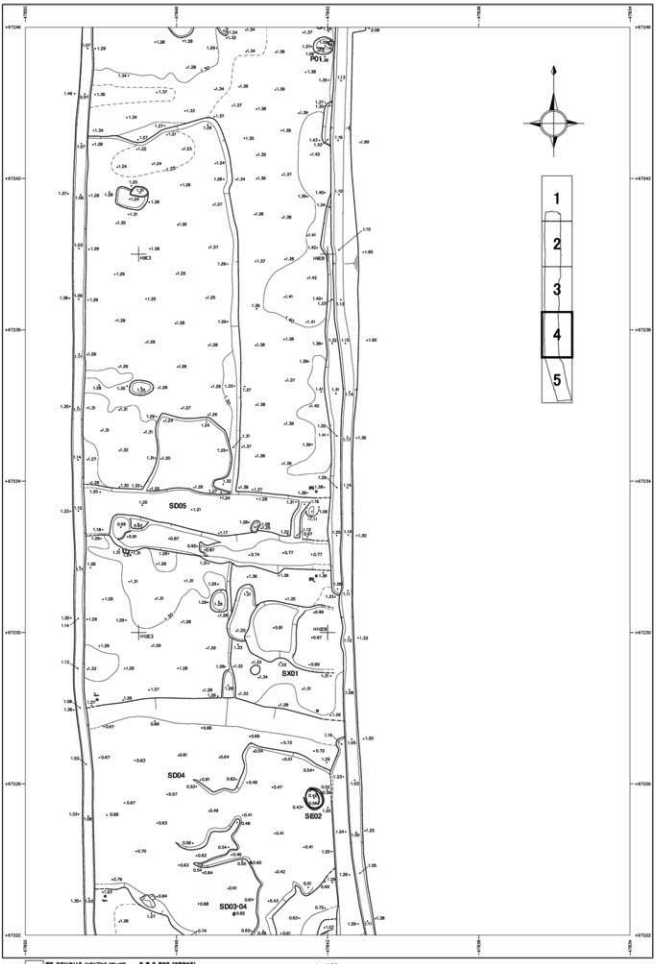
第88図　直江ニシヤ遺跡遺構平面図(1)〔S=1/100〕



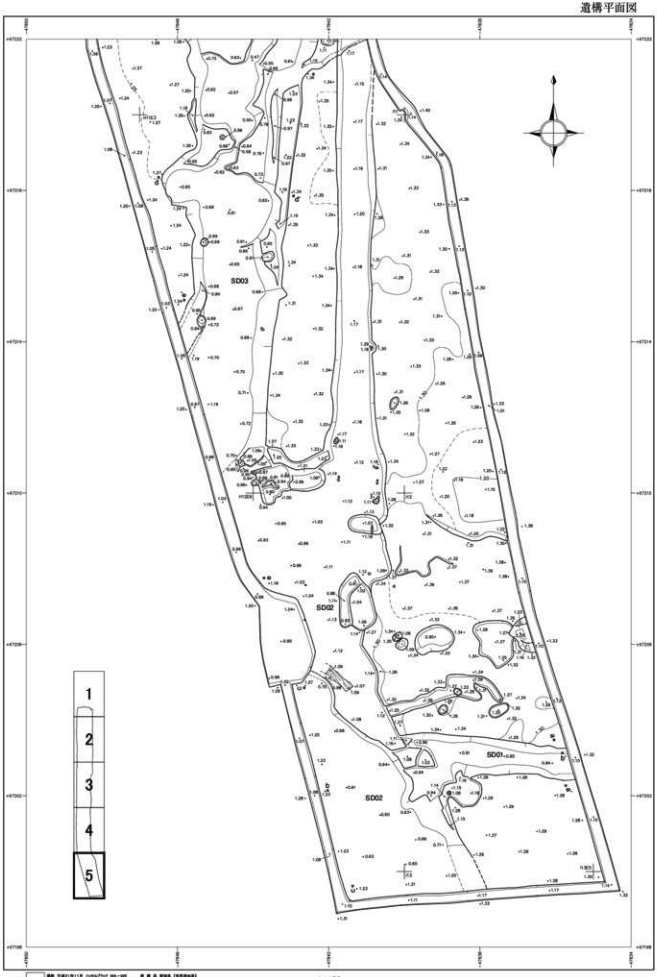
第89図　直江ニシヤ遺跡遺構平面図(2)〔S=1/100〕



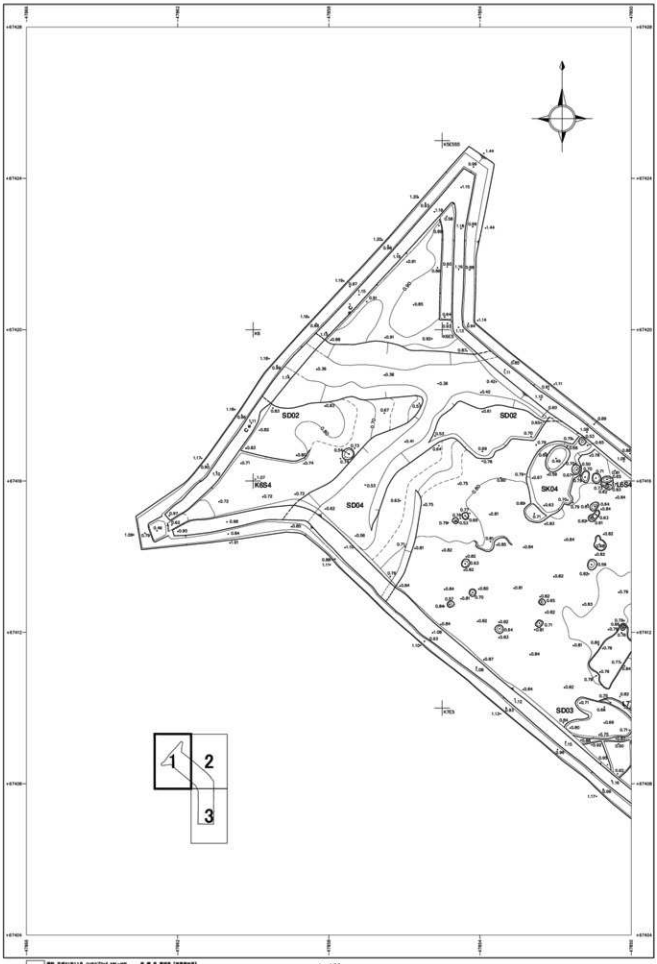
第90図　直江ニシヤ遺跡遺構平面図(3)〔S=1/100〕



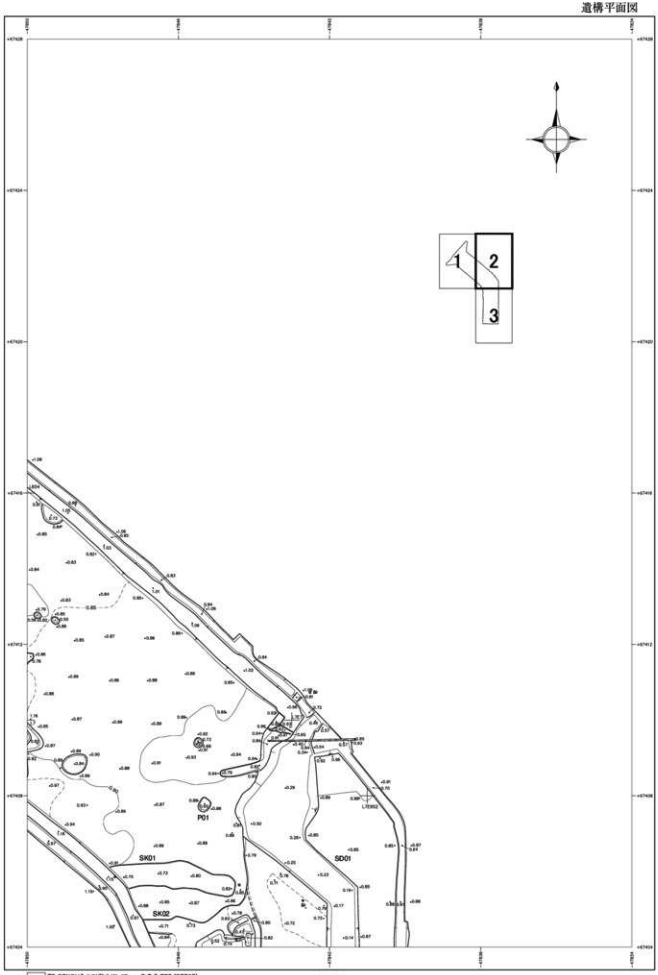
第91図　直江ニシヤ遺跡遺構平面図(4)〔S=1/100〕



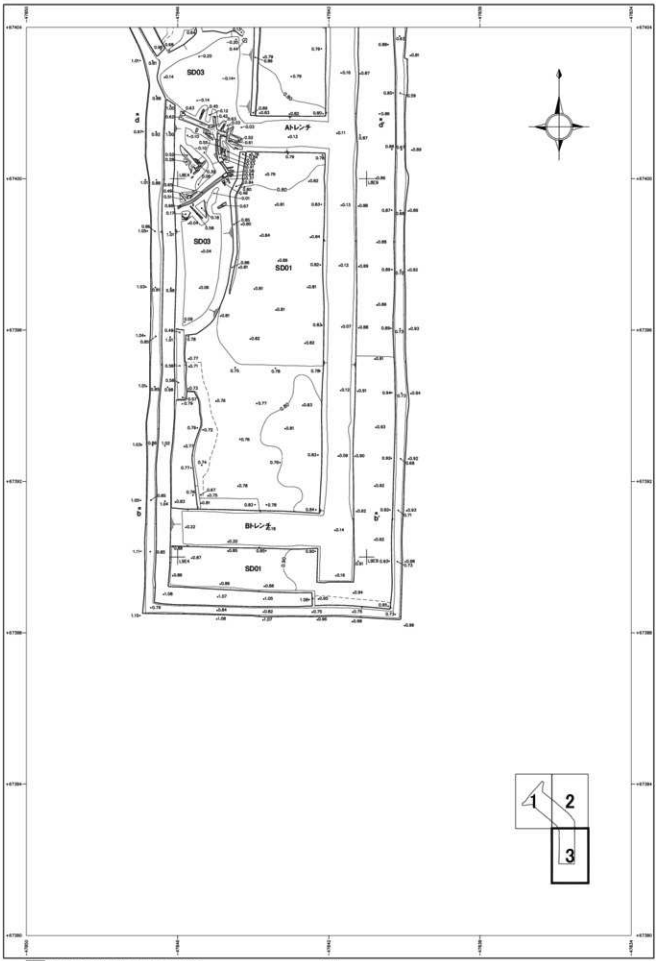
第92図　直江ニシヤ遺跡遺構平面図(5)〔S=1/100〕



第93図　直江西遺構遺構平面図(1)〔S=1/100〕



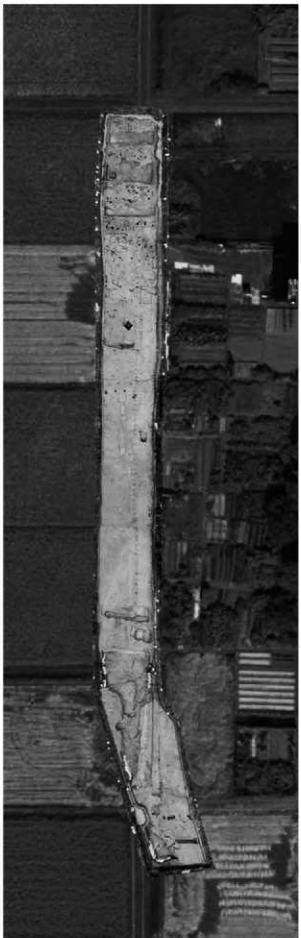
第94図　直江西遺構遺構平面図(2)〔S=1/100〕



第95図　直江西遺構遺構平面図(3)〔S=1/100〕

直江西遺跡全景（オルソ画像、S＝1/500）

直江南遺跡全景（オルソ画像、S＝1/500）



直江ニシヤ遺跡全景（オルソ画像、S＝1/500）

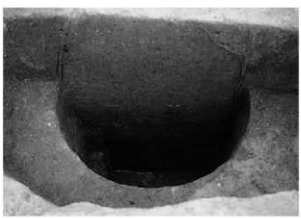
直江ボンノシロ遺跡全景（オルソ画像、S＝1/500）

SE01（直江南遺跡）

SE01（直江南遺跡）

SE02（直江南遺跡）

SE03（直江南遺跡）



SE04（直江南遺跡）

SE04（直江南遺跡）

SE05（直江南遺跡）

SE05（直江南遺跡）

SI01（直江南遺跡）

SD01・02（直江ボンノシロ遺跡）

SD01・02（直江ボンノシロ遺跡）

SD01・02（直江ボンノシロ遺跡）

SD02（直江ボンノシロ遺跡）

SD03（直江ボンノシロ遺跡）

SK19（直江ボンノシロ遺跡）

SK28（直江ボンノシロ遺跡）

SK31（直江ボンノシロ遺跡）

SK32（直江ボンノシロ遺跡）

SE01（直江ニシヤ遺跡）

SE01（直江ニシヤ遺跡）

SE01（直江ニシヤ遺跡）

SE02（直江ニシヤ遺跡）

SD03・04（直江ニシヤ遺跡）

SD06～08（直江ニシヤ遺跡）

SD01・03（直江西遺跡）

SD03（直江西遺跡）

76（直江南遺跡）

102（直江南遺跡）

94（直江南遺跡）

86～89（直江南遺跡）

99・95～98・未実測品（直江南遺跡）

101（直江南遺跡）

井戸枠47（直江南遺跡）

井戸枠49（直江南遺跡）

井戸枠55（直江南遺跡）

28（直江西遺跡）

29（直江西遺跡）

6・7・8

20

30

32

33

25

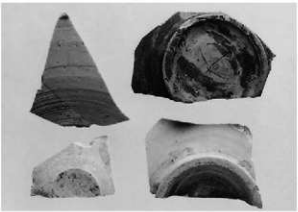
28

31

83

35

36



318・199
320・244

140

349

143

378

307

149

385・384・382

391（直江ボンノシロ遺跡）

401（直江ボンノシロ遺跡）

403（直江ボンノシロ遺跡）

421（直江ボンノシロ遺跡）

422・423（直江ボンノシロ遺跡）

433（直江ボンノシロ遺跡）

121（直江ニシヤ遺跡）

3・4（直江ニシヤ遺跡）

105・106・107（直江ニシヤ遺跡）

28（直江ニシヤ遺跡）

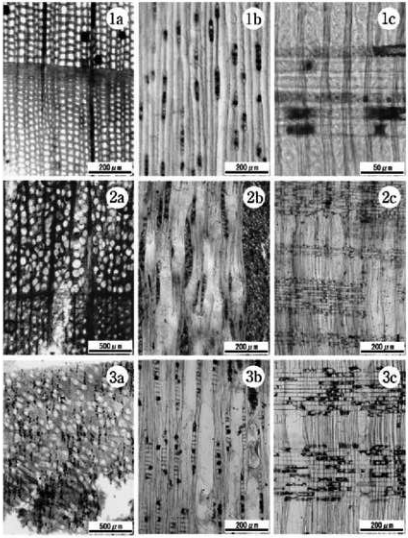
95（直江ニシヤ遺跡）

78（直江ニシヤ遺跡）

108（直江ニシヤ遺跡）

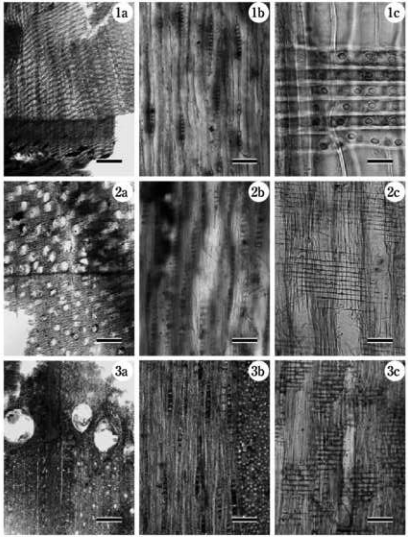
136（直江ニシヤ遺跡）

木製品の光学顕微鏡写真(1)



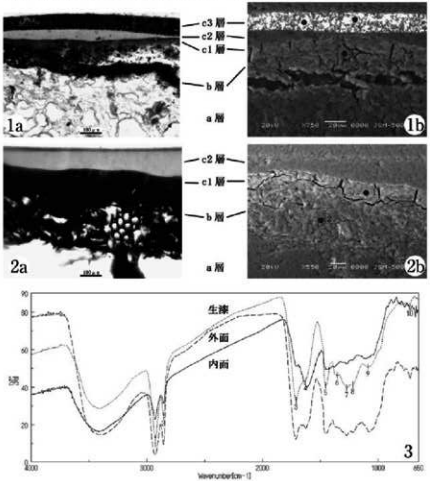
1a－1c. アスナロ（No.1）、2a－2c. ブナ属（No.4）、3a－3c. トチノキ（No.3）
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面

木製品の光学顕微鏡写真(2)



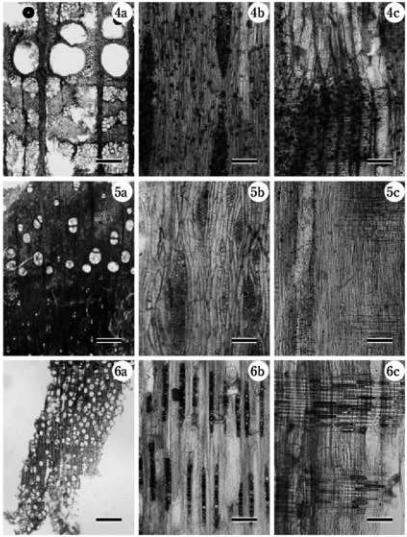
1a－1c. スギ（No.5） 2a－2c. ヤナギ属（No.9） 3a－3c. コナラ属コナラ節（No.10）
a：横断面（スケール＝200μm） b：接線断面（スケール＝100μm）
c：放射断面（スケール＝1：25μm・2－3：100μm）

塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(1)



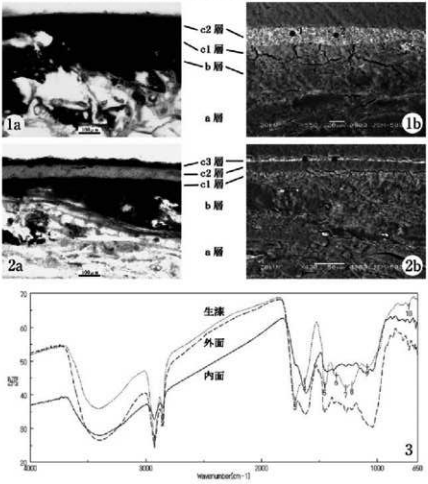
1a. 漆器椀 No.3 内面塗膜断面の光学顕微鏡写真　1b. 漆器椀 No.3 内面塗膜断面の反射電子像
2a. 漆器椀 No.3 外面塗膜断面の光学顕微鏡写真　2b. 漆器椀 No.3 外面塗膜断面の反射電子像
3. 塗膜表面の赤外分光スペクトル図（縦軸は透過率、横軸が波数を示す）

木製品の光学顕微鏡写真(3)



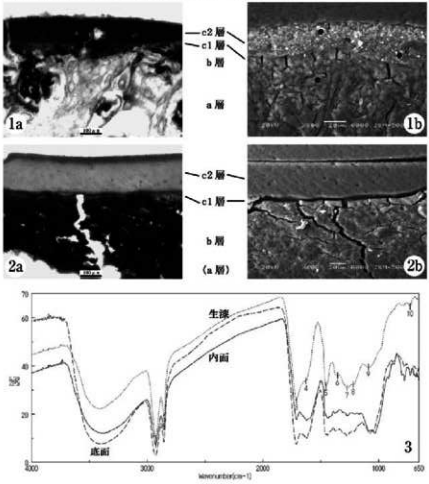
4a－4c. ケヤキ(No.4)　5a－5c. クワ属(No.11)　6a－6c. トチノキ(No.3)
a：横断面(スケール=200 μm)　b：接線断面(スケール=100 μm)
c：放射断面(スケール=100 μm)

塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(2)



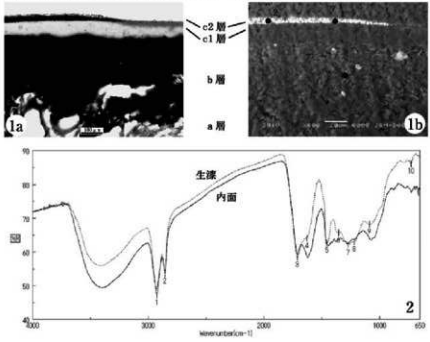
1a. 漆器椀 No.4 内面塗膜断面の光学顕微鏡写真　1b. 漆器椀 No.4 内面塗膜断面の反射電子像
2a. 漆器椀 No.4 外面塗膜断面の光学顕微鏡写真　2b. 漆器椀 No.4 外面塗膜断面の反射電子像
3. 塗膜表面の赤外分光スペクトル図（縦軸は透過率、横軸が波数を示す）

塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(3)



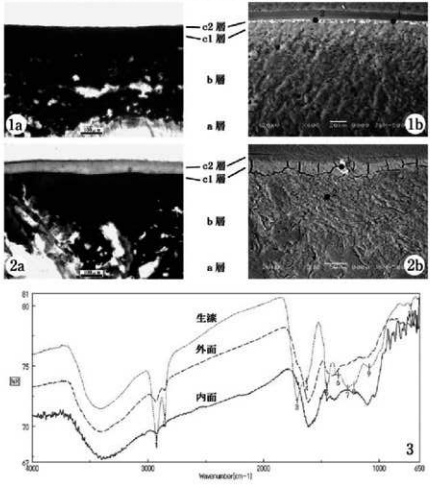
1a. 漆器椀 No.5 内面塗膜断面の光学顕微鏡写真　1b. 漆器椀 No.5 内面塗膜断面の反射電子像
2a. 漆器椀 No.5 底面塗膜断面の光学顕微鏡写真　2b. 漆器椀 No.5 底面塗膜断面の反射電子像
3. 塗膜表面の赤外分光スペクトル図（縦軸は透過率、横軸が波数を示す）

塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(5)



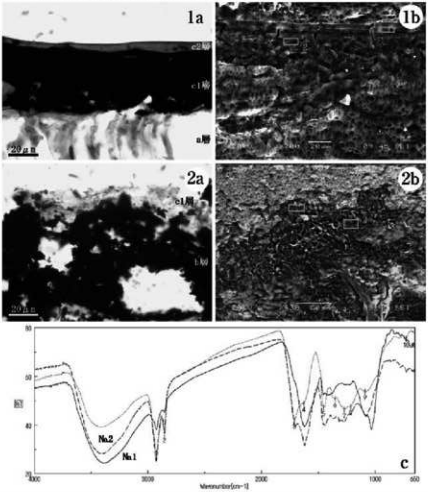
1a. 漆器椀 No.7 内面塗膜断面の光学顕微鏡写真　1b. 漆器椀 No.7 内面塗膜断面の反射電子像
2. 塗膜表面の赤外分光スペクトル図（縦軸は透過率、横軸が波数を示す）

塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(4)



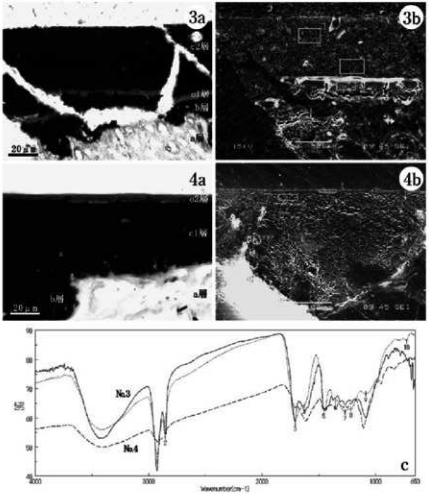
1a. 漆器椀 No.6 内面塗膜断面の光学顕微鏡写真　1b. 漆器椀 No.6 内面塗膜断面の反射電子像
2a. 漆器椀 No.6 外面塗膜断面の光学顕微鏡写真　2b. 漆器椀 No.6 外面塗膜断面の反射電子像
3. 塗膜表面の赤外分光スペクトル図（縦軸は透過率、横軸が波数を示す）

塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(6)



1a. 塗膜薄片の光学顕微鏡写真（試料No.1）　1b. 塗膜断面の反射電子像とX線分析位置（試料No.1）
2a. 塗膜薄片の光学顕微鏡写真（試料No.2）　2b. 塗膜断面の反射電子像とX線分析位置（試料No.2）
c. 赤外分光スペクトル図（縦軸は透過率、横軸が波数を示す。吸収N_0は生漆の主な吸収位置を示す）

塗膜の断面構造と塗膜表面の赤外分光スペクトル図(7)



3a. 塗膜薄片の光学顕微鏡写真（試料No.3）　3b. 塗膜断面の反射電子像とX線分析位置（試料No.3）
4a. 塗膜薄片の光学顕微鏡写真（試料No.4）　4b. 塗膜断面の反射電子像とX線分析位置（試料No.4）
c. 赤外分光スペクトル図（縦軸は透過率、横軸が波数を示す。吸収N_0は生漆の主な吸収位置を示す）

報告書抄録

ふりがな	いしかわけんかなざわし　なおえみなみいせき・なおえほんのしろいせき・なおえにしやいせき・なおえにしいせき
書名	石川県金沢市　直江南遺跡・直江ボンノシロ遺跡・直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡
副書名	金沢市副都心北部直江土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2
シリーズ名	金沢市文化財紀要
シリーズ番号	277
編著者名	向井裕知、前田雪恵
編集機関	金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)
所在地	〒920-0374　金沢市上安原南60番　TEL（076）269-2451
発行年月日	平成24(2012)年3月30日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
直江南遺跡（なおえみなみ）	石川県（いしかわけん）金沢市（かなざわし）直江町（なおえまち）	172014	新発見のためなし	36°60′27″	136°63′27″	090707～091209	200㎡	区画整理
直江ボンノシロ遺跡（なおえ）	石川県（いしかわけん）金沢市（かなざわし）直江町（なおえまち）	172014	新発見のためなし	36°60′28″	136°63′38″	090713～091209 101015～101126	450㎡ 750㎡	区画整理
直江ニシヤ遺跡（なおえ）	石川県（いしかわけん）金沢市（かなざわし）直江町（なおえまち）	172014	新発見のためなし	36°60′49″	136°63′16″	090714～091209	700㎡	区画整理
直江西遺跡（なおえにし）	石川県（いしかわけん）金沢市（かなざわし）直江町（なおえまち）	172014	新発見のためなし	36°60′47″	136°63′17″	090721～091209	300㎡	区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
直江南遺跡	集落跡	鎌倉時代	井戸 土坑 竪穴遺構	土師器 国産陶器 中国磁器	
要訳	本遺跡では、主に中世前期の遺構が見つかっており、複数の井戸と方形の竪穴遺構が検出されている。井戸は縦板組横桟留めや曲物積みによる構造がみられる。竪穴遺構からは完形品の漆器が出土しており、埋納の可能性が高く、墓などの信仰対象施設を推定している。				
直江ボンノシロ遺跡	集落跡	弥生・古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	土坑 溝・川 墓坑	土器・石製品 土師器・須恵器 陶磁器・漆器	
要訳	本遺跡では、古墳時代の川跡や平安時代から室町時代の遺物が確認できる川跡とその川跡と重複する江戸時代から明治時代頃の川跡、また江戸時代から明治時代頃の墓跡が見つかっている。遺物は古墳時代の土器や木製品、平安時代の土師器、須恵器、鎌倉時代から室町時代の土師器や国産陶器、中国産陶磁器などが多く出土している。				
直江ニシヤ遺跡	集落跡	古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	溝 土坑 井戸・土坑・溝	土器 土師器・須恵器 陶磁器・木製品	
要訳	発掘調査では、平安時代の溝と鎌倉時代の井戸、室町時代から江戸時代にかけての大溝を検出している。大溝覆土からは近世の遺物が出土しているが、地山近くの砂層から室町時代頃の遺物が出土しているため、室町時代頃につくられたものが、江戸時代まで使用されていたものと考えられる。				
直江西遺跡	集落跡	弥生・古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	土坑・川 川 川	土器 土師器・須恵器 陶磁器・木製品	
要訳	発掘調査では、弥生時代末頃から古墳時代前半頃の土坑と川を検出している。川は近世の川と重複しているために形状や規模は不明である。川からは土器の他、履物状木製品や火切り臼などの木製品が出土している。				

石川県金沢市

直江南遺跡・直江ボンノシロ遺跡
直江ニシヤ遺跡・直江西遺跡

（『金沢市文化財紀要』277）
平成24年3月30日発行
（2012）

編集　金沢市
発行　金沢市埋蔵文化財センター
〒920-0374
石川県金沢市上安原南60番
TEL（076）269-2451
印刷　株式会社 栄光プリント